
その背に黒の羽根を

Nerine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その背に黒の羽根を

【Zコード】

N1238Y

【作者名】

Zerine

【あらすじ】

捻くれ少女は全てを捨てて、一人世界を渡った。待ち受けるのは、惨劇と憎悪。行き着く先は、償いを強要する地獄。 悪魔な天使は、救う為に血で染まる。理由はただ、気に入らないから。 （異世界トリップファンタジー）

所々、人道的・道徳的に露骨な描写の場面が出てきます。
苦手な方は、ご注意下さい。

プロローグ

物語によくある、主人公が突然異世界に行っちゃう所謂トリップ。そこでは大抵、何か主人公に役割とか秘めたる力があつて、仲間に出会つて物語が進んでく。

そして最終的には、役目を終えてめでたしめでたしか、誰かと愛し合つてめでたしめでたしか、元の世界に戻れてめでたしめでたしか。

とにかく、その主人公は状況も分からずに強制的に巻き込まれて、でも、徐々に覚悟を決めて冒険をしていく。最初は疑われたとして、も、結局は聖女とか救世主とか謡われて。

まあ、王道だよね。私も好きだよ、そういう話。

ただ、現実に自分に起こるなら絶対にごめんだ。

だって、あまりに贅沢じゃないか。争いの中でも自分の手はあまり汚れず、贅沢だ。

そもそも、自分の世界に関係が無いなら、私にしか出来なくともお断りだね。だって、訳も分からず突然呼ばれて勇者になつてくださいとか言われても、今までの生活全てを奪つた相手にいいですよって言える? どんだけお人よし、いや、馬鹿だよ。

だから私は、例えそれで世界が滅んで、自分が巻き込まれたとしても絶対に頷かないね。

そう、私はそういう人間だ。俗に言つて、可愛氣の無い女。まあ、私の場合それ以上のレベルだけど。

兎に角、何が言いたいのかといつと、王道じやなくて良かつたつてことと、楽しみだつてこと。

なつてやるうじやん、世界に追われる破壊者つてやつに。何も知らない奴らを嘲笑いながら、ただ自分の為だけに。

残念ながら、正義感とか使命感とか、そんな大それたモノは持つてないんでね。

そして、屍の上で私は歌う。

『私は私の為に私を捨てよう
後ろ指を差され
石を投げられ

刃を突きつけられても
共犯者には償いを求める
他人には嘲笑いを与えて
私の手は赤く
背には醜い黒の羽根が

捨てるは己
手に入れるは、全てだ』

つまらないのは、満たされていいるからだ

今日もまた平凡な1日が終わる。

周りがざわめきながらこの後のこと相談し合つたり、ただ笑い合つたりしている中、1人じちて鞄を手に教室を出る少女が居た。

名を河内紗那かわうちさなという少女は、いつも通りファミレスのバイトに励んで、21時には上がり22時には家に帰り着く。

日本人の特徴である黒い髪は腰まで長く、瞳も同じく黒い。一般レベルの高校の2年生として学校に通う、本当に普通の少女であった。ただし、少しばかり複雑な家庭で、尚且つ少し独特な性格と体质を持つてはいるが。

バイトで疲れた身体を引きずりながら暗い家へと辿り着くと、紗那を迎えたのはリビングのテーブルの上に無造作に置かれたお金だった。

「律儀なのか、なんなんだか。わざわざ預け入れなきやいけないこっちの身にもなつてほしいわ」

「どうか、こんなにあっても困るんだけど。そう言いながらそのお金を手に取つた紗那は、暫く黙つてそれを見ていた。

彼女は父親と母親、そして自分の3人家族であった。過去形であ

るのは、当の昔にその両親は家に寄り付かなくなり、今やその繋がりは金銭面だけだといえるからだ。

しかし、それを悲しいとか寂しいとか思わないのが、紗那という少女である。

本人はそれで良いと思っているし、むしろそう思つのがダメなのだろうかと疑問に思つてゐる程。

つまんない奴、可愛げのない奴、可哀想な奴、寂しい奴。

紗那と関りを持つた人は、決まってそう言つ。彼女にも少なからず友達はいて、関係を持つた異性だつていた。しかし、現在それは全て思い出であり、他人になつてはいるが。

「お風呂、入る?」

高校生が持つには聊か多すぎる金額を財布へと仕舞つた紗那は、荷物を無造作に近くのソファーヘと置いて風呂場へと向かつた。そうして脱衣所へと辿り着き、制服を乱雑に洗濯機の上へと放りながら考え方をする。

子供の頃はそれなりに愛嬌のある普通の子ではあったが、今ではあまり表情が出ない。年々、両親の仲が険悪になつていくのと同時に真逆に成長していったのだ。

しかし、それが関係していたのは明白だったが、本人曰く原因では無いという。やつと素でいられるようになつた、というのだ。

色々な人に聞き飽きたほど捻くれると表される子ではあつたが、紗那はそんな自分が嫌いではない。

ただ、最近何度も思い出すのが、高校生に上がる少し前、近くの公園で出会った人物。その人だけが、紗那を優しい子だと言つていた。

『君は、優しさといつものをちゃんと分かつているんだね』

そう言つて、無駄に整つた顔で笑つていた。

ほんの数日前まで忘れていた記憶だといふのに、何故かここ最近、その人物の記憶ばかりが紗那を占める。

全裸になり、シャワーを浴びて一日の汚れを落として、その間に溜めていた湯船に身体を沈めながら、紗那はうーんと唸つた。

「確かに、この世界を好きかと聞かれて……」

本人にとって、この行動は無意識であつた。
気付けば何故か、記憶を掘り起こして唸る毎日。まるで何かの前兆のようだ、と感じている。

「色々話した最後に、何だつけ。んー？」

チャポンッと田の前の水を無意味に掬いながら、さらにその人物の会話を思い出さうと頭を捻る。しかし、一番重要な部分を思い出せずにいた。

仕方なく、その人物の姿からおさらじしていくと、掬つた水を戻して鼻の下まで身体を落とした。

ブロンドの肩までかかる綺麗な長髪に、透き通るようなブルーの瞳。正確な身長は知らないけれど、細身の身体付きが印象的だった。ただ、そこらの俳優よりも格好良い容姿のくせして、口調がなよなよしてこるのが紗那には勘に触つて苛々した覚えがある。

「ひつやしふり～ん。いつやあ、見違える程に育つちゃって、まあ！」

紗那は思考の海に沈みすぎていて気付いていなかつた。ただ1人であつたはずの風呂場で、自分以外の声が響いたことに。

「それで、君ならとか何とか言われて、確か最後に」

「もし僕に限界が来たら、力を貸してくれるかい」

喉元まで出かかっていた答えが突然他者により告げられはつとした。

そうだ、そう言われたんだと瞠目する。だけど、深入りすれば後戻り出来なくなる気がして、追求しなかつたんだと当時の心境も思い出した。

「今でも、この世界は好きかい？」

何故ならあの時も、こんな風に寂しく笑つていたから。

と、そこでやつと、紗那は自分の思考の可笑しなところに気がついた。はたと目を瞬き、ゆっくりと横に視線を向ける。

「やつほ～。やつと気が付いたあ？」

「は？……はあ？！」

驚きに思わず立ち上がり、口をぱくぱくさせて言葉にならない声を上げながら指を差したその先には、今まで紗那の頭を占領していた人物と寸分違わない男が居た。

ただし、浴槽の縁に顎を乗せ、明らかに鼻の下を伸ばして紗那の身体を上から下まで隅々観察していくが。

「女の子の成長は著しいねえ」

「つー？ じんの、変態！」

そして、男が発した言葉に自分の姿を思い出し顔を真っ赤に染める。

次には叫びながら、素晴らしいフォームで繰り出された右ストレートが、男の顔面へと炸裂した。

「つまうふつー！」

嫌らしい視線に思わず出た手がしつかりと現実だと教え、でも羞恥が大きすぎたからか、沙那は混乱していくしつかりとした思考が出来ない。

「ああ！ お風呂に鼻血が！」

風呂場には、紗那のズレた悲鳴が響き渡った。

再会は崩壊への幕開け

「なんあんたがここに居るの？！ しかも、風呂場…」

「いやー、良いパンチだつたなあ。でも普通、あそこは平手でしょ
う」

リビングには、かなりの温度差のある2人による会話が繰り広げられていた。

あの後、紗那は男が気絶している間に慌てて風呂場から脱出し、服を着てリビングに避難をした。しかし、そこには気絶していたはずの男が暢気に寛いでいる姿があったのだ。

確かに、手加減無しで顔面ど真ん中を殴りつけた筈なのに、その顔には傷が全く無かつた。

「とにかく答える！」

只でさえ状況が掴めないといつのに、男ののらりくらりとした調子に会話は儘ならず、紗那は苛立ちで普段では有り得ない大声を上げる。

しかし、男はゆつたりと笑ってソファに座っているだけで答えようとはしない。

「まあ、埒が明かないと、紗那は深い溜め息を吐いた。

「……はあ、もつ良い、分かった。取りあえず家から出て行け」

玄関を指差しながら、心の中では警察を呼ばれないだけマシだと思えと悪態をつぐ。しかし、返ってきたのは予想外の言葉だった。

「呼ばないのは面倒くさいからどうしょー？ 嘘は駄目だよん、嘘は

「だつて、被害届けとかなんだとか え、いや、そうじゃなくて！ あんた、今……」

ソファの背の上に肘を置き、仁王立ちしている紗那に身体を向けて男が言った言葉は、確かに正解だった。紗那は、情け以前に手続きが面倒くさい理由で通報をしたくないと思っていた。しかし、それを言葉にしていない。

出来た當時も、男に対して胡散臭さを抱いていたが、今はそれ以上に可笑しいとやつと気付いた。

驚愕とも恐れとも取れる表情で震える唇からは、何も言ひことが出来ない。

変な話ではあるが、紗那のとある理由で絶対の自信が持てる危機察知能力ともいえるもので男に警戒はしていない。

しかし、紗那の家は高級といつてもおかしく無いマンションの為、セキュリティーがかなりしつかりしている。まず不法侵入出来ない造りであり、しかも戸締りもしつかりしていて、さらには風呂場に

どうやって入ってきたのだろうか。

家そのものの自体に入れたとしても、風呂場に入つてこられたらさすがに思考の海に沈んでいてもまず気が付くだろう。なのに、音すら聞いた覚えがなかった。

そんな紗那の戸惑いが分かつたのか、男はしてやつたりと晒す。そして、自身の隣をぽんぽんと叩いて座るよつこ促す。

戸惑つた末、紗那は男から離れてソファぎりぎりの位置にゆっくりと腰を下ろした。

「……何の用？」

暫く、落ち着く為にか唇を浅く噛み視線をさ迷わせ、こめかみをとんとんと叩いた紗那は、ぽつりと睨み付けながら男に言った。

今度は、逆に男が瞠目する番だつた。紗那にしてみれば、当然の問い。危険が無いと判断した上で男がこの場にいるのは、どう考えても自分に何かしら用件があるからだと考えたのだ。しかし、男からしてみれば、簡単にそこに辿り着けるその精神が不思議である。

「君は、変わる所か更に強くなつたみたいだね。嬉しいけど、残念だよ」

そして、どこか悲愴を漂わせる表情で、のらりくらりな喋り方ではないものでそう言つた。それが、紗那には意味深な言葉に感じられ、再び混乱を抱かせる。

その姿は、出会つたあの時と同じであつた。

変わったのは、自分の身体が縦に成長したぐらいである。悔しいかな、男は著しい成長と言つたけれど、紗那の体型は年齢にしては凹凸がない。いや、少なすぎる。

自覚している身にとって、気にしていないとは言つてもコンプレックスに感じてはいたことであった。

だが、田の前の男は記憶と何もかもが同じであつた。見た感じ20代後半に思えるので、2年以上経つても成長は止まつていて当然かもしれないが、服装すらだ。

尚更胡散臭さが増した。そんな事を思われているとこりのに、男は気にした様子もなく、黙つて紗那に視線を向けている。

しかし、男は徐にソファの前のガラステーブルの上にあつたテレビのリモコンを取り、えらくゅつたりとした仕草でその電源を入れた。

すると、当然部屋にはテレビからの音声が響いていく。
わざとらしくゆつくりと、数字の通りにチャンネルを変えしていく画面を、紗那は怒ることなく見つめた。

『次は、世界中で多発する自然災害についてのニュースです』

と、男の手が一つのニュース番組で止まる。

途端訝しげに眉を顰める紗那だが、男はまだ何も言わない。

『アメリカでの竜巻、オーストラリアでの山火事等に続き、昨日中国で大きな地震が発生しました。幸い、日本への津波の心配はありませんが』

それは、最近不自然な程頻繁に発生する災害についてのもので、現在世界中で最も注目されている話題についてだった。

専門家の中では、地球滅亡の危機だなんだと騒いでいるらしい。

しかし、だから何だというのだ。何か用があるのかと言つて、答えのないままにこれを見せられるが、まさかこんなものが関係するとは思えない。

しかし、心の中でそう思ひ至つた直後、だから何だといつ憤りを込めて男を見れば、バツが悪そうに眉を下げて苦笑していた。

「えへっ！ 察しが良いねえ」

「……はあ」

男に常識は通じないのだろうと薄々思つてはいたが、だからどうしろと言つのだ。自分はただの女子高生であり、男が会いに来たのにほこのニコースが関係していたとしても、出来る事は何も無い。

しかし、男が何事もなく去るなんて考えられず、紗那は深く深く溜め息を吐いて目の前に手を翳し、待つたをかけて立ち上がつた。

「え、聞いてくれるの？ って、ちよつと、何処行くの～？」

「コーヒー淹れるの」

頭を抱え、ふらふらとした足取りでキッチンへと向かつ。

背中では男が何かを言つているが、兎に角今は落ち着ける何かが欲しいと紗那は思った。結果、大好きなコーヒーを淹れることにしたのだ。

インスタントコーヒーを用意して、常備しているポットでお湯を注ぐ。かなりのコーヒー好きである紗那は、豆から挽いて淹れることが多いのだが、今日ばかりはその元気が無いらしい。

立ち上る湯気からは、いつものには劣るが、それでも良い香りがする。

「わ～、僕のぶ」

「で、私に何をさせたいの」

手に持つカップは当然一つ。それが分かっていながら催促していく男を無視して再び座り直した紗那は、一刀両断そう問うた。

「聞いたらもう、後には引けないよ？」

その瞬間、男からも紗那からも、いい加減な雰囲気は消え去る。真剣な顔で聞き返してきた男に、紗那は笑った。

「でも、あんたにはもう私しかいないんだろう？」

この時にはもう、紗那の心は決まっていたと言つても間違いではないだろう。彼女は、得体も名も知れない変態の為、全てを守ろうとして破滅に導いた、弱くて怖がりな男の為に悪になる道を選んだ。

出会った時は違い、男が浮かべる笑顔が苦しみからだと氣付かない程、紗那は餓鬼ではなかつた。

「君は、異世界というものは存在するとと思うかい？」

紗那の言葉に田を見開いた男は暫く固まり、田元をふと和らげた。

そして、そう言つ。

「そりやまた、いきなりだね。でもまあ、別にあつても不思議じやないでしょ。」

今度は紗那が思案し、自信なさげに答えた。当然だひつ、異世界とは本の中のファンタジーだ。こんな真面目な場面で出てくる言葉とは思えない。

でも、紗那は馬鹿にするでもなく、考えて答えを返した。
世の中は自分が見たものだけが全てではないんだと、教えられるまでもなく知つていいのだ。

狭い世界に浸つていれば、狭く感じて当然だ。だけど、紗那にとって自分の世界は狭くとも、それに浸つてる気は無いので世の中は広い。

何故なら、好きなもので溢れているから。たとえ、愛は知らなくとも好きで溢れている。

「ははっ、とにかくこれ読んで。その間に、僕はお風呂で寛いでくから

「待て待て待て。大事なことに手を抜くな

好きなものを思い浮かべ、自然と微笑む紗那に男は田を細める。
そして、彼女の出した答えが嬉しいのか、小さく笑い声を上げた。

しかし、あらう」とか男は、異世界があると言つた次にはA4サイズの3枚の紙を紗那に手渡して立ち上がる。

慌ててあげたつこみも無視して、勝手知つたる他人の家ようしく颯爽と風呂場へと行つてしまつた。

「……はあ。まあ、良いや」

怒つても無駄だと悟つた紗那は、ふうつと息を吐いて頭を抱え、少しばかりぼーっとした。でも、それは本当に僅かの間で、よしつと小さく声を出して気合を入れて立ち上がり、新しくコーヒーを入れ直して放置してあつた学生鞄から適当なノートとペンを取り出す。

そして、先ほど渡された紙とそれらを持ち、ダイニングテーブルに移動した彼女は、溢れる疑問や要点を素早く纏められる用に手にペンを持つて、クルクル回しながらとつとつ紙を読み始めようとした。

しかし、いきなりだんつと全力で机を叩き、じすじすと足を踏み鳴らしながらかなりの速さである場所へと向かつた。

ばたんつと壊れるぐらいの勢いでドアを開けば、そこにいたのは見覚えの無いアヒルの玩具で遊びながら湯船で寛ぐ男。

「読んで欲しかつたら、耳障りな鼻歌を止めろー。集中できないからー。」

「さやあーー！ 变態つ！」

「ソレ、千切るよー。」

「「」みんなさー」

繰り広げられたのは、なんていう漫才とつゝこみたくなるような
やり取り。

「冗談の通じない紗那の鬼の形相に恐れを為したのか、男が全力で
謝れば、次は無いと静かに言って扉は閉められた。

どうしてか、見られた男の方が顔を赤らめて悶えていたのは余談
としておこう。

悪魔が笑えば、

『愛しの紗那ちゃんへ』

始まりは、なんとも脱力する言葉で書かれていた。

しかし、量はA4サイズの紙に機械的な言葉でびつしつと、そして内容は紗那が想像していた以上に複雑でシリアスなものだった。

「こんなものを口じゃなく、文面で伝えてくれたことに紗那は結果的に安堵する。

「頭、パンクしちつ」

気付けば、当に口付が変わっていた。あまりの衝撃に立つこともできず、肘を立てて頭を抱える。

だけど、意外にも疑問や質問はあまりなく、横のノートはほとんど空欄だった。

書かれていた内容は、今現在の状況とのままでいけば辿りてしまつ結果。そんな情報ばかりだったのだ。

「問題なのは、私にどうして欲しいかだね」

とはいっても、だいたいの予想はついている。文面からは、準備

をわざわざしたところが見て取れていた。

「とにかく、まずは頭を整理させなきゃ」

だからといって、動搖や混乱をしないわけではなく、むしろスケールが大きすぎてキャパシティーオーバーであつたりはするが。

紗那は、男が未だ戻つてこないのは、まるでこれからを窺つているよつだと感じながらも、自分なりに紙の内容を纏めることにした。

男の言つていた異世界は「アピス」という名で、そこには地球と似たサイクルを持つ存在らしい。

しかしアピスでは、地球上には無い所謂魔法が存在し、人々の生活の要となつていて。さらに、地球が自然サイクルを基盤としているように、アピスでは精霊という存在と量が基盤になつていた。魔法はその精霊の力を借りることによつて使え、それぞれの属性を持つ。火や水といった、地球で伝説・伝承とされる精霊のイメージで良いと言える。

渡された紙には、そのアピスについてと、そこに築かれている国の大まかな世界情勢等が延々と書き連ねられていた。

「めちゃくちやファンタジーじゃん。あれだね、妄想力を侮つてたわ」

ただ、紗那にしてみれば、これだけであればそんなものもあるんだな、程度で終わつていただけ。重要なのは、そこから先である。

そのアピスでは今、精靈がどんどんと数を減らして危機的状況に陥っているらしい。原因は単純明確、人間の争いにより大地が血に染まつたからだ。

精靈は穢れに滅法弱く、どこの世界でも、人間は欲に溺れて争いを生み出すのだろう。そのせいでバランスが崩れ、世界が崩壊するレベルにまで陥った。

しかし、ここまできても、紗那にしてみれば他人事である。いや、地球からすれば他世界事だ。

ただそれは、地球とアピスが一心同体な関係でなければ、だが。

男というか文面曰く、アピスが消えれば地球も消える。それが、あの謎に多発していた自然災害の原因であつた。

こんな事を信じる奴の方が神経を疑われる。いくら異世界があつても不思議はないとは思えて、だからといって、一心同体な世界が滅亡しかけてるせいで地球も危なくなつてますよと言われて信じられるか。答えは否だ。

だが、紗那には男がこんなスケールでのかい噓を言つて自分をどうしたいのか見当はつかないし、そもそも男自体に説明できない行動をされている。

「読んでくれた？」？

取りあえず文面の情報に整理が出来た頃、見計らつたかのようこの男は戻つて来た。

人の氣も知らずに暢気に冷蔵庫のミネラルウォーターをがぶ飲みする姿に、紗那はこれでもかといつぐらいに殺意を覚えるが、そこはぐっと我慢をした。

「んで、私は何をすればいいの？」

代わりに、紙の上から机を「ン」指で叩き説明を求める。

「いいの？ 君の」とだから、大体の見当はついたんでしょう？

「見当は、ね。でも、具体的な事は全然。だから、結論はだせないし、そもそもあなたの考えが分からない」

分かつてているのは、どういった理由にしろ男が自分を選んだというだけだった。だからこそ、紗那には話を聞く権利がある。

その上で決定を下していくのだ。何を選び、どう覚悟をするのか。

仮にこれが下手な冗談であれば、紗那は男の綺麗な顔を原型を留めないぐらい殴つてやろうと決めていた。部分的に嘘が含まれているならばそれ次第で、地球が関係あるのかどうかという一番重要な部分が万一嘘であったなら、生きるのが嫌になるぐらい痛めつけて殺してやるべ、とも。

「うわ、やりかねないねえ」

気配を察したのか、はたまた心を読んだのか。男はひきつった顔でそう言った。そして、紗那の向かい側に腰を下ろす。

「さて、結論からいうとね？」

「タンマ。その前に、ひとつ」

肘をついて手を合わせ、顎の下へともつていった姿は異様な程絵になり、男の瞳からは今までにないぐらい素晴らしい素晴らしく真剣さが溢れていた。

しかし残念なことに、そう、凄く残念なことに、だ。

紗那は大きく溜め息を吐いて、その倍息を吸い込んだ。頭の中で、こいつのシリアルスイッチは何処ですかと、誰に問うでもない質問をしながら。

そして、腹に力を込めて叫ぶ。

「いい加減、服を着ろつー！」

「うへ？あー、忘れてたあ」

へラヘラ笑いながら自分を見た男は、腰にタオルを巻いただけの姿だった。

「ああもう、ここが家なのに無性に帰りたい」

紗那が思わず零した愚痴には、同情を禁じ得ない。

「さてと、こっからは真面目にいこうかなあー」

しかし男は対してダメージを受けず、紗那が不憫に思える。しかし、本人は気付いてはいないが、自分でも自覚しているはずの無表情つぶりが、男の前では普通の少女と変わらないものになっていた。

男はサッと片手を軽く払う動作をした。すると、ほぼ裸であったのが一瞬で服を纏つ。すっと細まつた視線に、紗那も自然と同じものになる。

男もどりゅやらふざけた”フリ”を止めたらしい。

それが分からぬほど紗那は無頓着では無いし、元々人を信用しない性格もある。

「まずは質問、あるかな？」

「世界の仕組みとか情勢に疑問を持つたところで、どうでもいいし何の意味もない。質問は、全部聞き終わってからじやないと意味がなさそうなのだけだし、後ででいいよ」

その答えに満足そうに男が頷いた次の瞬間、世界は一変した。

見慣れた部屋も、今の今まで座っていたテーブルも、飲みかけで冷めてしまったコーヒーも。何もかも、全てが。

目が痛くなるほどに真っ白で窓も扉も一つも無い、まるで延々と続く空間の様な部屋へ。部屋だと思えたのは、男が斜めに身体を倒した、寄りかかる体勢をしていたからだ。

「確か一度も、名乗つていなかつたね」

男の服装も変わっていた。黒いズボンに白いシャツという格好だったのが、今では頭に月桂樹の冠をし、物語に出てくる神官のような真っ白い一枚の布のような服。その姿で、男は微笑んだ。

紗那にとつて吐き氣しか感じない、何もかも優しく包みこむような慈愛の満ちたソレ。

「私は君達人間に、神と呼ばれる存在だ。君は、選ばれた」

交差した視線の中で、紗那は内から溢れだしてくる感情に呑まれていった。

止めどなく、大量に溢れてくる感情。

気持ち悪い。

きもちわるい。

キモチワルイ。

気付けば拳を力の限り握り占め、激しい嫌悪をそのまま視線に宿す。

「分かった、帰る。今すぐ、ここから、家に、帰してつ！」

怖気づいて出た言葉では無い。腹が立つたからだった。それはもう、身体が震えるぐらいの怒り。

しかし、紗那がどれだけ激しく睨み付けても、自称神様は微笑んだままだった。

「どうして？」

身長の差で見下ろされた視線は慈愛に満ち、綺麗なバランスの良い血色の通った口を少しばかり動かして、そんな質問をしながら。

神様は、紗那を試そうとした。

「そんな下らない質問をして馬鹿な真似をするのなら、私は帰る」

「君じゃなきゃ救えなくても、かい？」

それに對し、紗那は鼻で笑つた。

私に責任は無い、もしそうなら選んだカミサマが悪いのだとたまう。

紗那是偽善者でも、優しさに満ち溢れる人間でも無かつた。でも、誰がそれを責められようか。

いくら自分のせいで人が死ぬかもしれない、見捨てる氣かと詰め寄られたところで、はつきり言つて関係無いのだ。しかも、目の前でそれを見せ付けられるならまだしも、知らない場所で知らない人間が。

自覚も、現実味も、問題の重要性を感じることも、平和な日本で暮らす少女にそれを求める事自体間違つているといえよう。しかも、お人よしな性格であったならまだしも、紗那是それとほ程遠い、寧ろ悪いと言われる回数の方が多い性格をしている。

「もう一度言ひ。こんな真似をして私を試すのなら、帰せ」

試されるのは何より嫌いで、見下されることにも腹が立つ。

しかし、今にも殴りかからんばかりの怒りを抱えている紗那に、カミサマは更なる追い討ちをかけた。

「じゃあ質問を変えよう。ここに来た時点で拒否権がなければ、ど

「つある？」

瞬間、紗那の目が零れんばかりに大きく開かれた。
我慢の苦手な彼女にとって、今が限界である。これ以上の”戯言”
”を聞かされればきっと、神様であらうが関係なく拳が飛ぶだろ？
絶対に！」

そして、鼻で笑つてやるんだ。私を選んだお前に、やめ一みうど。

紗那はそう言つて、怯むことなく笑つた。それは平凡な女子高生
がする顔では到底なく、まるで悪魔のように妖艶で至んだ姿であつ
た。

わあ、捨くれな私は何を選ばつか

「へへ、あははははー！ やー、やつぱ最高だよ！」

剣呑とした雰囲気は、カミサマの発した大きな笑い声に消失した。それこそ大口を開け、笑いすぎて咳き込んだり引き笑いになったり、しまいには床を叩いて悶絶する始末。

結局、カミサマはしっかりと紗那を試し、そして見事に合格をした。してやられた紗那は当然怒り、未だに笑い転げるカミサマにつかつかと歩み寄る。

「つか、逃げんじゃねえよ」

「いや、ほんと、『めんつてー！』

繰り出した拳は、寸前で危険を察知したカミサマに避けられて空を切る。慌てて弁解を始めるも、紗那の怒りは収まらなかつた。

「でも、仕方無いじゃないか。これは僕のというより君の為。君が生き残れる可能性を図る為のものだつたん 痛いつー！」

「一発逃げたからって油断するな。」

追撃が見事、カミサマの右頬に命中する。だが、風呂場でのもの

に比べればその威力は可愛いものだ。

2人の間にはいつの間にかテーブルとイスが現れていて、カミサマは殴られた部分を擦って容赦がないな」と文句を言いながらも座るよう促す。

白いこの部屋では当然それも白であり、どういう原理か影が見えなければ視覚では捉えることが出来なかつただろう。促されるままに座った紗那は、何故自分の影は無いのか疑問をもつて頭を捻りながらも、田の前に腰を下ろしたカミサマへと視線を移した。

そこにはもう気持悪い微笑みを携えた者はおらず、代わりに申し訳なさ満点の苦笑が浮かんでいた。

紗那は聞き零してなどいない。カミサマは確かに、生き残れる可能性を図る為と言つていた。それは逆に、これから選択の先には死が伴い、さらに危険性が高いということだ。

その真意を今、カミサマは告げようとしている。

しかし、それだけではまだ足りないと紗那は呟く。決断に必要な情報がなさすぎる、と。

だからだらう、紗那は先ほどとはまた違う挑戦的な笑みをカミサマに向けた。

「僕は、崩れ始めたのをただ見てたわけじゃない。なんとか抑えよう、今まで全力を尽くしてきた」

カミサマはぽつぽつぽつと、本当に悔しそうに言葉を落としてい

く。それを、紗那は無表情で聞いていた。

「でも、限界だった。残る手はもう、一つしかない」

「最後の手段で、あんたが一番避けていたものだね？」

それを言つと、カミサマは頭を押さえて頃垂れる。それでも紗那は微動だにせず、淡々と思つた事を口にした。

隙間だらけの作りかけのジグソーパズルにピースがどんどんとまつていく感じで、穴だらけの予想が埋まつていった。

それに対しカミサマは、君は本当に聰明だねと呟いた。しかし、その顔はどうか残念そうで、褒めているとは思えない。

そういうた態度は、紗那にとつて苛立ちしか生まなかつた。

「君にだけはさせたくなかつた。君は僕の一番のお気に入りで、好きな子だから。でも、君以上に相応しい人間が見つからなかつたんだ」

ただ、この言葉だけは、紗那にも込められた気持ちが分からぬ。その好きはラブなのかライクなのか、ラブだととしても、それは異性に対するものか、はたまた子供に対するものなのか。

もしラブだとしても、紗那にとつてその感情はどうでもいいことであるので、結果意味のないものになつてしまつが。

ただ不思議と、なんとなくだが異性に対するラブだと感じる。しかし、聞いたとしても答えが返つてくることはないだろ？

「僕にとつて、2つの世界は全てなんだ」

「そして世界も、あんたが全て」

先程の言葉に紗那は結局反応を示さず、話は確信へと迫っていくように思えた。

紗那は自然と、そういう答えを導き出している。自分達は、彼を殺すことで今を生きていられるんだろうと。

だけど、今まで聞き手に回っていた紗那は、ここに来て頬杖を付きつつカミサマに問いかける。

「ねえ、私に何をして欲しいの？」

あまりに冷静で冷めた問い。だが、紗那が知りたいのは、カミスマの気持ちや今までの苦労では無い。

何をして欲しくて、何をするべきで、どういった方法で、どんなリスクがあるかどうかだ。

隠すのも言い逃れも、誤魔化しも後回しも当然許はしない。それに、中途半端な態度が寧ろ、辿り着く最期を明らかにしてしまう。

「君に、世界を救つて欲しい」

カミサマはたじろぎながら口づけ。

「どうやって？」

しかし、間髪入れずの言葉に田が泳ぐ。それを見逃すよつた馬鹿はここにねらはず、カミサマは知らずぐつと拳を握った。

「アピスに全部で10ある精石を、残らず全て壊して欲しい」

「それはどういったもので、どんな役割があつて、どれ程の価値があるものなの？」

また返ってきたのは、応否ではなく問い合わせた。一体、このような場面でこんな行動が出来る少女が地球とアピス合わせてもどれ程いるのだろうか。

どんな人生を歩み、どんな経験をし、どのような田で世間を見れば、ここまで冷静に物事を判断しようと思えるのか。

正直、人間味が薄いとも感じるが、しかし、カミサマは紗那がこいつ少女だというのを知っている上で選んだのだろう。それ自体には驚かず、寧ろ彼女のお陰でこの場が成り立っていると思つてゐるかもしれない。

そして、カミサマはおずおずと、今の質問に答える為彼しか知らない歴史を語り始める。

だがそれは、紗那にとって実に下らなく愚かとしか評価出来ないものであった。

それは遙か昔に交わした契り。始まりの詩。

人々がまだ固い石の上で寝起きし、命懸けで食を求める、本能で子孫を残していた時代。そこは、精靈に満ち溢れていた。

人は精靈に感謝し、精靈は人を愛し、そうやつて命は巡った。

そしてある時、それぞれの属性の中で最も力をもつた精靈たちが、人間に有る祈りを抱いた。愛を、形として与えた。

愛する命よ、その幸せが永劫であるよづ、豊かさが心を満たし続けるよう、我等を捧げる。

精靈王とよばれるその精靈達は、代わりにとある約束を結ばせた。

我等の一部である精靈達を、決して穢れに染めてはならない。あれらは、我等であり世界そのもの。これを違いし時、全ては無に帰し、柱は崩れる。

そして10の精靈王は、10の精石へと姿を変え、約束通り人々に豊かさを与えた。

水は、枯れることのない癒やしを。

大地は、溢れる優しさを。

雷は、発達した技術を。

陽は、満ち溢れる勇気を。

海は、雄大な糧を。

空は、自由な翼を。

風は、屈しない心を。

星は、導きを。

そして光が希望を与える、闇が包容した。

次第に人々は国を築き、しかし徐々に豊かさに溺れた。人は、たつた一つの約束を違えたのだ。

そして今、終わりを迎えてある。

契りを忘れ、それに気付くことなく、ただただ、欲に支配されながら。

それを彼等は嘆く。我等はただ、愛していただけだと

「人間は約束を違えた。だからもう、精霊王が精石である理由は無い。人間が豊かさを求める資格はもうないんだ」

そう長くはない話を終え、カミサマは深く息を吐きながら静かに涙を落とした。

透き通るようなブルーの瞳から零れ出る透明な雫は、きらめいて輝

きながら陶器のような滑らかな肌を伝い白いテーブルを音もなく叩く。

その姿は名画の様に美しく、しかし紗那の目には酷く滑稽で無様に映った。

何故なら、精靈王が豊かさを与えた理由は至極下らなく、そもそも求めることに資格など必要ないと思うのだ。

単純に、精靈王は過ちを犯しただけで、カミサマは分かつていなかつただけ。

そう紗那には感じられ、呆れた感情しか浮かばない。

「下らない。だから何だっていうのさ。あんた達はただ認めようとしないだけで、現実から目を背け続けた結果、後が無くなつただけじゃない」

同情も労いも無く、紗那は当然の如く吐き捨てる。しかしそこで、カミサマが初めて感情を顕わにした。今の今までは、いかに紗那をその気にさせようかという思惑を感じる行動ばかりだったというのに、整つた顔を怒りで赤く染めてテーブルを叩く。

「裏切つたのは、君達人間じゃないか！！ 人間のせいでの、世界は危機に陥つてゐんじやないか！！ それを下らないだと？ 僕がどれだけ必死だつたか！」

それだけ努力し頑張つたということなのだろう。しかし、紗那にとってみればそんな言い分通用しない。彼女はアピスの人間では無く、寧ろ地球の生物は全面的に被害者なのだ。仮に地球での温暖化、環境汚染、そういうしたものも世界を蝕んでいたとしても、今回に關

しては無関係といつて可笑しくないだろ。

だから、紗那にしてみれば自分の言葉が図星で、恥ずかしくて、悔しくて、悲しくて、認めたくなくて。だから、みつともなく喚いでいる様にしか受け取れない。

それに、今必要なのは誰が悪いとか、誰の責任とか、誰のせいだとがじやないだろ。カミサマは、何一つ見ておらず、分かつていないので。

それでは気付けないし、認めなければ先へ進めるわけがない。

「どうしても、私には関係ないね。確かに人間が元凶だけど、きっかけを作ったのは精霊王で、それを黙認していたのならあんたも立派な共犯だ」

なんて冷たい言葉を吐くんだ。何も知らない第三者であれば、紗那を責め立てたかもしれない。しかし、紗那に迫られている選択は、そんなことを気にしていられる次元ではない。今ここでカミサマを慰めたところで、世界は絶対に救えないのだ。そして、何も抱くことができない。

「私が、共犯？……ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな……」

逆上したカミサマはさらに怒りを増し立ち上がり、避ける間もなく無抵抗な紗那の胸倉を掴んだ。そして無理やり立ち上がらせ、テーブルに押さえつける。

衝撃で背中に痛みを感じ、紗那は顔を顰めた。

何も捨てれず、何も見ず、それでは何も背負えないといつのこと。

綺麗な顔は醜く歪み、自分を見下ろしてくる視線は射殺さんばかりに鋭い。だけど紗那は、変わらず冷めた目を向けるだけだった。

自分が間違っているとは思わない。たとえ殴られようと、それこそ殺されたとしても、今の言葉を撤回する気はないという強い意思が込められた目。

求めるのなら失う覚悟を、守るのなら奪う覚悟を。その覚悟が何も無いから喚くしかできないのだ。そう、赤ん坊のよつ。

しかし、紗那が相対しているのは、決して赤ん坊では無いのだ。

「いい加減にしろ！！ 失う覚悟も、奪う覚悟も、見捨てる覚悟も何にも無いあなたが、何かを求めるなんて鳥滸がましいにも程があるんだよ！ 何が違うっていうんだ。今のあなたは、欲に溺れた人間と何も変わらないじゃないか！」

負けじと掴んだ胸倉を引き寄せ、唇が触れ合づきりづきりの距離で吼える。

紗那が願つのは、起こつた事実と行ないを認め、その上でやるべき事を決めるということだった。

後悔や懺悔を慰めるなんて後からいくらでもできる上、自分がやる必要は無い。

なのにだ。精神はどうづくづく甘く、足場はぐらつぐら。そんな相手と下らない堂々巡りを先ほどから繰り返し、結果時間だけが過ぎていく。

本人からしてみれば、怒り狂いたいのは自分の方だと憤慨したいぐらいである。

身体を支えてくれているのは背中で足は空中で揺れ、しかも胸倉を容赦なく掴まれているせいで感じる息苦しさからいい加減解放さ

れたかつた紗那は、全身でカミサマを突き飛ばした。突然の衝撃に対応できなかつたのか、カミサマは覚束ない足取りで彼女から離れる。

起き上がつた紗那は、締められていた喉を擦り小さく咳をしながら、片手をテーブルに置いて体重をかけた。

カミサマは、更なる叱責がくるだろうと思つていた。数度咳をして呼吸が落ち着いたのか、鋭い視線が彼へと向く。

しかし、予想に反して掛けられた言葉は、優しく切なく響いたのだった。

「大丈夫。私が染まるから。だからあなたの気持ちを、何を一番守りたいのかを教えて？残念だけど、全部を守るなんて無理なんだよ。過ぎたことは仕方がない。仕方がないから、学ぶんだ。学ばなきや、いけないんだよ」

繰り返さない為に。だから、言つて？

囁かれた言葉は叱責よりも衝撃的で、カミサマはよろめきながら目を見開いた。紗那には当然、心を読む術など無い。だからこそ言葉が必要で、言葉は力を持つ。

「僕は……でも、そうしたら君は」

ああ、なんて馬鹿なヒトだ。なんて弱いヒトだ。

紗那は心で叫ぶ。自らは悟り、そしてついさっき気付いたといふのに。

彼女は、とっくの昔にカミサマのせいで汚されていた。覚悟もせずにした行ないにより犯した罪から逃れるなど、到底許されないのだ。

これだけは言いたくなかったと思いながら、それでも言わずにいられないこの状況を作り出した日の前の人物に、心の底から溜め息が漏れた。

「この2年、私はあなたに振り回されてきた。奇麗事ばっか色々言つてたけどや、あなたはちゃんと私が使いものになるよう仕向けてたんだ。そうだろ？」

それはもう、車に牽かれそうになつたり、頭上から物が落ちてきたりは紗那にとって日常茶飯事だった。それどころか凶悪犯に出てわしたり、強姦魔や強盗に襲われたりだつてしまつた。

体质だと諦めていたそのトラブルへの遭遇率は全部、今日からの為にこのカミサマが起こしてきたことだつたのだろう。危険を察知し、回避し、対処できる経験を培わせるために。今までのやり取りでそう思つて至り、カミサマが唇を噛み締めて反論しない姿から確信する。

「また、繰り返すの？ わざわざつて中途半端なままで、今度は全てを失つつもりか？」

「冗談じゃないと叫んだ姿は、相当な苦労をしてきたのだと想わせた。

好きだと言い、そのくせ都合の良い“神の試練”とやらを経験させるその行為を、ずるいと言わずなんとするか。自身は汚れず、ただ求める姿に何を見出せるところのか。

その考えはとてもお綺麗で、その姿勢はとても愛しい。一見、誰もが大切で優しさの塊みたいなお綺麗な精神は、結局は自分の為でしかないというのです。

「あなたはただの、エゴイストだ」

責める為でも諭す為でもなく、無意識に零れた言葉は聞き取ろうとしても難しいぐらい小さいものだった。だけど、カミサマは心が読めるらしい。なので、しつかりと伝わってしまっているかも知れない。しかし、紗那はそれで構わないと思つた。

彼の行為は許せるものでは決して無い。ただ、ややこしいもので、それが必ず好き嫌いに直結するかといえばそうとは限らない。

「あれは、悪いと、思つてる。あんなことになるなんて、思つてなかつたんだ」

暫くの間、2人は静寂に支配された。しかし、若干青ざめた表情で呟くよつに零したカミサマの言葉でそれは壊される。

「分かつてる。先に言つとくけど、責めたくてこの話を持ち出したんじやないか？」

抜け出せない泥沼状態に思わず零した溜め息は、カミサマの肩を大げさに跳ねさせた。それを見た紗那は、自分まで泣きたくなる焦燥感に駆られる。

しまいには頭痛までしてくる始末で、テーブルにかけた体重はそのまま、こめかみを押さええる。

「許す許さないだつたら、私はあなたを許さない。だけど、好き嫌いでいつたら好きだよ? 気付いた今でも」

「……何で?」

カミサマにとつて、その言葉は予想外だつた。どうもつたらそんな考え方ができるのか、カミサマであるはずの自分にも理解が不能だ。

だから聞いた。何故、と。だけど、紗那からしてみれば理由など無いのだ。ただそう思うだけ。

「私は物事は頭で分析して捉えるけど、好き嫌いだけは感覚まかせなの。だから、理由なんてないよ」

あれはこうだから好きとか、これはああだから嫌いとか、そういうやつてわざわざ理由を付けるのは紗那にとってとても面倒くさくて無意味に思えた。

面倒くさがりで捻くれ者な自分にとつて、なんか好きだな、なんか嫌いだなぐらいがらしくて楽で良い。

それは恐らく、したいからする、したくないからしないといった感情と同じだらう。

「あなたもさ、少しうらこ適当になつていいんじゃないの? 全知全能じゃないんなう」

「ねえ、さつきから言つては」とがどんどん分からなくなつてきてるんだけど」

カミサマのつっこみは当然だろう。紗那自身、自分が何を言いたいのか良く分かつておらず、言葉が上手くまともないでいた。

「だろうね、私も分かんないと正直に言えば、カミサマがおかしいくらいポカーンとした顔になる。」

紗那は一生懸命なつもりだった。自分の出来うる限りで、届けようとした結果であった。

「んー、つまり何か言いたいのかっていうと。そう前置きして暫く色々と考える。感情のままに話したお陰か、始めよりは大分まとまってきた感じがし、そしてああそうか、と自分で納得していた。」

「結局私が言いたかったのは、あんたは人がカミサマにしただけで、別にカミサマでいる必要は無いでしょってこと。カミサマだからこうでなきやいけないとか、ああしなきやいけないとか。あんたの中は、そんなプレッシャーや義務感で蝕まれているんじゃないの？だから、私の声が届かない」

それを聞いた時のカミサマの顔は、本当に見物だつただろう。ようやく紗那の言葉が届き気付いたのか、カミサマは水に打たれたように動かなくなつた。そして徐々に驚愕の表情を浮かべ、それが後悔へと変わり、歓喜に震え、遂に揺れが止まる。

その百面相する姿は、止まっていた時が再び動き始めたかのようだった。

「僕は、神じやなくて、いいのか？」

縋るような震える声で問うたことは、本来紗那に答えられるようなものではないだろう。何せ、大人が赤ん坊に質問するのと変わら

ない上にとてもとても重要なことで、たかが16年程度生きただけの少女に出せるものでもない。

しかし、紗那は柔らかく笑って簡単に言つてのける。

「なりたいのなら目指せばいいんじゃない？ だけど、あなたは元々地球とアピスの二つの世界が実体化しただけなんでしょう？ なら、カミサマでなくていい。やりたいことを、したいようにすればいい」

それは別に、あんたも生きているなら当然持つていい権利なんだから。

根拠も何もないからつぽな言葉に思えるが、カミサマことひてそれは思いがけない救いだった。

「そして決めて。あんたが最も守りたいものが何か」

そうして紗那は、せりて屈託無く笑う。その姿はとても愛らしく、朗らかで、まるで天使のように温かいものだった。

天使は微笑む（後書き）

神様をカミサマと表現しているのはわざとです。

決めたのは、私

「ねえ、君は世界が好きかい？」

幾度もの険悪なムードを乗り越え、一人は苦笑した。
カミサマの田元は少し赤らんでいて、紗那は彼が近付いてきた際
にそっと右側のそこを指で撫ぜせる。

それで良い、と頷きながら。

残るピースはほんの僅かとなつていた。

「好きだよ、とても」

だつて、この世界には好きなものが溢れている。
紗那の境遇は、お世辞にも幸福だとは言えず、色々な闇を見てきて
いた。

それでも迷わずそう言える彼女の心は、捻くれているからといって
汚れていると簡単に言つていいものなのだろうか。

「なら、僕の願いを聞いて欲しい」

紗那の手に擦り寄り自分の左手を重ね、目を閉じながらそつカミ

サマ……いや、世界は願った。

彼女は照れくさそうにはにかみつつも、頷かない。

そこは、強さと言つていい気がする。

無条件に頷かない精神はお人好しではないが、だからといって冷たいとも思えない。しつかりと、現実と向き合つている姿そのものではなかろうか。

それに、紗那の中ではまだ最大の疑問が解決していなかつた。何故自分が選ばれたのかといつ、その理由が。

「精石を壊して、精靈王を目覚めさせねばいいの？」

世界は目は閉じたまま頷く。頬と左手に伝わる温かさを、心の底から愛しいと感じながら。

「ただ、精石は人間にとつて何よりも大事なものなんだ。だから君は、地球とアピス、2つの世界の救世主でありながら、悪にならなきやいけない。アピス全土の人間が君を敵とみなし、そして敵として立ち塞がるだろう」

それが最も重要な、知りたかった“理由”であつた。

世界は、紗那の右手が震えるのを感じた。

恐怖に怯え、何故自分がと恨みを抱いたのかかもしれない。

そつと、拒絶を覚悟して目を開ければ、少し下に落とした視線の先に、左手で口元を押さえ目を見開いて呆然とする少女が映つた。

痛々しい姿だった。贖罪の念に溺れそうになる。だけど、自分の

言葉はどうやつたつて言い訳や取り繕いにしかならないだろう。ぐつと右手で拳を握り、震える唇をこじ開ける。

「断るのなら、今の、内つ！」

だが、全てを言い終わる前に握っていた手を振り払われ、どんづと突き飛ばされる。絶望感に打ちひしがれながら相手を見れば、口元の手はそのまま、もう一方は腹部を押させていた。

若干前に身体を傾け、テーブルに寄りかかる」と必死に立っているようだ。

さらに申し訳なさがこみ上げてくるが、言葉と温もりどちらも拒絶されたばかり。右手が空しく上がるだけで、喉は動いてくれなかつた。

そんな時だ。紗那の肩が一際大きく震え、がばつと突然顔が上がる。

「つ、ぶはつ！　あはははははー！」

白い空間に、盛大な爆笑が響き渡った。

当然、世界は状況が飲み込めずキヨトンとするが、紗那は口元を押させていた筈の手も下げ、どう見ても腹を抱えて笑っている。

しかも、世界の呆然と固まる姿までツボに嵌つたのか、指を差してひーひーと笑い、最終的には力尽きたのか蹲りながら床を叩いて咳き込んでいた。

世界にとつては紗那のその反応が予想外であるが、実は彼女にと

つては自分が選ばれた理由がそつだつたのだ。

死の危険があるのは、十分理解できた。某国の白い屋敷を10回単身で襲撃するのと同じぐらいハイリスクであり、野良猫100匹の中に放り込まれる1匹の鼠という状況が分かりやすい例えだろつ。

だけど、それで怖氣づく人間性を、紗那は持ち合わせていなかつた。

「いいねえ、その、救世主なのに悪の響き。めちゃくちゃワクワクするんだけど！ これは確かに、私以上に相応しい奴はいないわ」

未だ尾を引くのかクツクツと笑いながらも、紗那は嬉しそうにそう言つ。

まさかのワクワク発言に睡然としてしまつた世界は、何やら不穏な空気を感じてブルリと身体を震わせた。

「な、何？ え、というか、ワクワクすんの？！ 普通はここで嫌いとか怖いとか、え？ え？」

混乱が最高潮に達して無駄にオロオロする世界を見つめながら、紗那が言った言葉。この時ばかりは、世界に心を読む余裕は無く、当然聽覚で拾つことも無理だつだらう。

「『』愁傷様。面白そ�でも、一人で責任を負つつもりは無いからね？」

悪魔な顔と、天使の顔。果たして本当の紗那といつ少女はどうぢちうなのだろうか。

「で、まだ答えを言って無いんだよね。 聴きたいならまず、私の質問に答えて欲しいんだけど?」

紗那の笑いが収まれば、今度は世界が相当な衝撃だったのか混乱してしまい、暫く会話がままならなかつた。

でも、爆笑するのも仕方ないじやないかと紗那は憤慨した。なにせ、世界に選ばれた理由がよりもよつて捻くれているからだ。

これを笑わずにいられるか、というのが本人の心情である。

「何回か聞いたけどさ、あんたは一番何を守りたいの？ 人間、精霊、世界、それともその他？」

しかし、そんな和やかともいえる雰囲気はその言葉で欠片も残さず消え去つた。今の質問が、どれだけ悪役台詞で残酷なものか本人は自覚している。

世界も心の内を理解したのか、絶句して答えを言えない。

流石に甘ちゃん精神がすぐにどうにかなるとは思えていない紗那は、ニヤリと笑つて無言で催促した。

この間にも、今までの散々な時間の間に、彼女の好きなものは現在進行形で壊されている。彼女にとつては下らない理由で、しかも世界も違う奴等によつて。

それは、男に犯されるぐらゐに氣持悪く、我慢ならないことだつた。

「往生際が悪いね。あんたはさ、人に悪になれと言いながら、自分は善でいるつもり？」

気付いたのなら容赦しない、と紗那は田で語る。傍から見たら始めてからそんなことしていないと思つぐらいの冷たさではあるが、甘い言葉は誰でも吐ける。だけど、何度も繰り返すが、そんなことを言つて許される次元の問題ではない。

「僕は……」

そもそも何故、紗那は世界を追い詰めてまで答えを先延ばしにし、諭すような言葉ばかり言つていたのか。それはとても単純で、しかし彼女にとつては一番重要なもの。

求めていたのは、唯一これから自分がしていくことを正当化できる共犯者であった。

恐らく、ただ救世主になれ、勇者になれと求めていたのなら、性格からして鱗膠にくも無く断つていただろう。その荣誉に、紗那は価値を見出せない。

「いや、君の言つ通りだ。あれも大切、これも大切じゃ何も守れない。君はやっぱり、優しいね」

嬉しそうに笑う世界に、胸が少しばかり痛んだ。彼は、何をもつてそう思うんだろうか。自分が優しいのならば、人類みんな優しいと言える。

自分の思惑も知らずにいる世界に苦笑を返すのが、紗那にとつて精一杯であった。

「僕は、世界^{ボク}を守りたい」

僅かながら葛藤を抱いている間に、世界は紗那の手に墜ちていた。これで彼女は、世界を救うといつ大義名分の下、破壊の限りをつくせるだろ。

「なら、私は奪う覚悟を

迷いを捨て去るべく頭を小さく振り、紗那は自身の胸に手を当てて言った。

そして、ゆっくりと腕を動かして再び近付いて来ていた世界を指差す。

「あなたは、見届ける覚悟を

それに頷いた世界は、バサリと服を翻して目の前の人間を見下ろす。彼を見上げてくる瞳には、揺らがない不思議な力があった。

「河内紗那に命じる。世界を、救え！」

「……仰せのままに？」

畏まつた世界への正しい返答が分からず、語尾が上がつて疑問形になつてしまつた紗那。一瞬の後にくすくすと笑い合つた姿は、どこにでもいる男女だった。

しかし、恐らく紗那が辿り着く先は地獄で、世界を待ちつけるのは生き地獄だろ。それを悟つてるのは、紗那だけであった。

特別な力も才能もない只の女子高生。ただ、世界が声を大にして言いたいことが一つ。本人は顔も併々凡々だと言うが、実際にはかなり目鼻立ちがすつきりしていて整っている。残念ながら、女性的では無くかなり中性的で、美少年と美少女の境の不思議な位置ではあるが。

とにかくだ。争いの無い世界で過ごしてきた紗那にとって、武器となり得るのは捻くれた根性と冷静な頭のみだけだろう。でもそれが、最も誇るべき力でもあると世界は思っている。

「じゃあ、準備したいから一旦帰して？」

「ええ！？ 何でそんなに切り替えが早いの？ ていうか、あんまりこっちの世界のものを持つていけないんだけど。……いや、はい。拒否権は無いみたいですね」

今だつて、最大限今の状況を生かそうと頭を働かせ、半ば脅しを含めながら行動している。それが到底、平常な精神の人間であれば出来ないことだと、紗那は気付かない。

強かに、狡賢く、姑息に生き残る為であれば、彼女はどんな事でもするだろう。

「ね、ねえ。今更だけどさ、行つたら一度と地球には戻れないんだけど」

大きな存在なくせに、たつた一人の少女におどおどと恐る恐る聞いてくる情けない奴が共犯者だから、尚更気が抜けないはずだ。

「分かつてゐつづーの。そんなの本当に今更だわ」

「そんな軽く……死ぬかもしれないんだよ！？」

纏わり付いてくる大きな荷物を足蹴にしつつ、紗那はまた笑う。変態と捻くれの相性は、どうやらあまり良くないらしい。でも、ある意味バランスは取れているのだろう。

まさしく悪役の笑いに見えるソレは、世界に毎回ダメージを与える。

「上等じゃん。セヒド『キブリ』のように凶太く生き残ってやるのが面白いんだよ」

「うわ、まあ、だから君なんだろ？」

勇ましい相棒を手に入れた世界は、諦めに似た笑みを返して徐に手を差し出した。意味が分からず頭を傾げた紗那だが、素直にその手に手を乗せれば、自然な動作で甲にキスをされる。

「あんまり時間もないし、1日しかあげられないよ？ お別れも、ちゃんととしておいで」

小さいリップ音の後に告げられた言葉。世界が視線を合わせれば、期待してはいなかつたが照れた顔があるわけでもなく、むしろきょとん目を瞬かせる紗那がいた。彼女は、そんなことが頭に全然なくて、不覚にも表情に出してしまつたのだ。当然呆れられ、淡白すぎるのは美德じゃないよと叱られる。

それでも、別れを寂しいと思つ理由がなかつた。

「まあ、それはそれとして。はい、これ

「ん?」

降り注ぐ非難を含んだ視線から逃れるため、一枚の紙を押し付けた。それはノートを切り取ったもので、良く見ればびつしりと細かく色々なものが書かれている。紗那がリビングで書類を読んだ時に、こうなることを見越して準備していたものだった。

「うええええーー！んなにーー？」

中身はすべて、世界に準備して欲しいもので埋め尽くされていて、しかし、如何せん量的にも内容的にも鬼すぎた。

流し読みで一通り確認した世界は、あまりの無慈悲で心臓を覚える。

そして当然、全部は無理だと抗議をしたのだ。

「叫ぶな、喚くな。それでも最低限なんだから。あ、後、私の性別を変えたりとか出来ない？」

「出来るわけないじゃんっ！　言ひとへば、成長させれるのも無理だからー！」

世界からすれば当たり前の反応だというのに、紗那は耳を塞いで心から使えねえ奴と毒を吐く。しかも舌打ち付きとくれば、ショックに固まるのは無理もない。その間紗那はと言えば、せりにこれからのことを見越して頭をフルに回して考えていた。一体、どれだけ準備を重ねる気なんだろうか。

「あ、後一つ。あつちで違和感の無い名前、男と女どっちも考えて

おいて「

「えへっ、もう一杯一杯なんですかびー」

「黙れ、やれ。適当にやつたら知らないから。……まあ、その代わり、私もあなたの名前考えといつてあげるから」

文句を垂れまくる世界とそれを容赦なく退ける紗那。やつと泥沼状態から抜け出したというのに、2人は騒がしく会話を続けていた。そして、紗那は地球での最後の1日を迎える。寝る暇がないと気付くのは、家に戻つてコーヒーを用意し終わつた時であつた。

じつして、漆黒の羽根を生やした邪悪な天使は誕生した。行うのは、平穀の破壊。しかし、今はまだ、それを知る者は誰も居ない。

幸せとは無縁の旅を語る物語が始まつた。

最大の罪、それは君を愛したこと。

「ああああー！ 勿体無い！」

夢見たいな一夜が明け、睡眠を切実に欲求してくる重たい頭で必死に準備をし終えた紗那の前で響いたのは、彼女を苛立たせる天才の悲鳴にも似た叫びだった。

「ああもう、煩い！」

「だ、だつて、だつて髪！ セつかくの髪が！」

世界が騒いだ原因は、叫んだ言葉の通り紗那の髪にあつた。昨日までは流れる美しい腰までの長さだったというのに、彼女の変わりようはかなりのものだ。

只のショートヘアならまだしも、今の髪型は明らかに男のもので驚きも倍増である。

ただし皮肉な事に、中性的な顔立ちが右の前髪だけわざとらしく長く残す形でウルフカットにしているその髪型により引き立ち、普通とは違った意味で似合っていた。

人の頭を指差して口をぱくぱくさせるなど、失礼にも程があるだ

「もー、これから何が起つるか見当もつかないんだから、男として動いたほうが得策でしょうが。つてことで、準備してくれたよね？」

幸い、声も低くもなく高くもない。男としては少し高いかな、女としては少し低いかなという印象を人に抱かせる。本人も、まるでこうなるのが前提で産まれてきたみたいだとあまりの都合の良さに笑っていたところだ。

「あ、うん」

そんな中、世界は淡く、紗那が準備する間に心変わりするのを期待していたのかもしれない。そんな様子がまったく見てどれ無い彼女に、悲しそうな顔をしていた。

紗那にとって、別れはする必要が無かつた。

部屋に戻つた時には朝になつていて、切り替える為にと用意したコーヒーと軽い朝食を手早く味わつた後は、今まであまり手を付けずにいた両親からのお金やバイト代を注ぎ込み、街で必要な物を揃えるのに奔走した。

そして、学校に一方的に退学届けを押し付け、携帯を解約し、家にある自分の物を出来るだけ処分していく。手元に残つたお金は全て銀行からおりし、短い手紙と共にダイニングテーブルの上へ。

可能な限り地球に居た痕跡を消し去つた後に残つたのは、ベッド等の粗大ゴミだけであつた。

発つ鳥、後を濁さず。

そう言えば聞こえが良いが、紗那自身未練を断ち切りたかったのかもしない。実際、長年すれ違い続けて色々な感情を抱いていた両親に対しては、『自業自得だよ』と捨てゼリフを贈っていた。

「ほら、さつさと昨日の場所に行くんじゃないの？ デル

「デル？」

「言つたでしょ？ あんたの名前、考えといてあげるつて

一度、静かにリビングを見渡した紗那は、照れたように言った。デルフィニウムの花からとつて、デル。美容室で髪を切つてもらつている最中読んでいた雑誌に花言葉が載つていて、これしかないなと決めた名だった。

きつかけを聞けばなんて安直な考え方だと思つだらうが、我ながらぴつたりだと紗那は無い胸を張る。

「デル……デルフィニウム、かな？」

世界……デルも察したらしく、ここ今まで意地悪をしなくていいじゃないかと言いつつも嫌では無いのか、どこか嬉しそうにはにかんでいた。

名は、何よりも鎌となる。そこに込められる想いが大きければ、大きいほどに。

「嫌味な名前だけど、まあいいや。じゃ、行こつか

明けっぱなしのカー・テンの先では、真っ赤な夕日が沈み始めていて、部屋をその色に染め上げる。逆光のせいで眩しく、目を細めながら差し出された手を取った紗那にとって、そこから見た景色が地球での最後となつた。

彼女が持つて行つたものは、変装用のカツラやカラーコンタクト、そういうつたものだけで思い出の品は一切無い。この後、社会でどういった扱いを受けるにしろ、一度とコンクリートの地を踏むことは叶わないのだ。でも、それで良いと本人は心から思つてゐる。

全てが終わつた時、責められるのは紗那だけだろう。デルはおそらく、色々な者から優しく慰められる。

君は悪くない、そんな感じで。

「まつ、こんなもんか」

「もつ、だめ、無理つ！ 過労、死、するー！」

再び昨日と同じ部屋へと連れて来られた紗那は、あれこれとデルに指示を出して漸く出発できる状態になつていた。

アピスには黒髪、黒田は居ないらしく、まず、短く切つた髪を違和感の無いシルバーに、瞳を「ゴーランド」に変えさせ、さらに用意させたあちらでの旅装束に着替える。それから、当然言語を理解し話せるようになると、読み書き言葉もチート上等と習得させた。

他にも執拗に細かい作業を頼んでいたが、それは追々説明していくとしよう。その結果が、今の状況である。

疲労困憊で床に伏せて青い顔をしているテルと、高鳴る気持ちが抑えきれないテンションが上がりきみの紗那。かなりの温度差だ。

脅して出してもらった姿見に映るのは、日本人の要素は欠片も残っていない目つきの悪い青年。クルリとその場で回転し、全身をチエックする仕草は流石に女のものではあるが、スタイルはそれにしても寂しく、身長をとっても170cmとかなり高いので不信な点はどこにもない。ついでを言えば、本人もびっくりの美青年だ。

どこかミステリアスで、エキサイティング。年上に好かれそうなタイプである。

「で、あんたは何時までダレてんの？」

「あれだけ酷使されたら、疲れて当然だよー！？」

あまりの理不尽さにテルが起き上がって訴えるも、今のテンション最高潮な紗那に勝てるわけがない。普段でも難しいが、それだけ叫べれば十分元気でしょと切られてしまつ。

さらに、横暴だ悪魔だという文句を喚かれるが、それは褒め言葉にしか思えず、紗那はシカトして最後の仕上げに取りかかった。

まず、黒い布とピアスが一体となっているマスク紛いのものを付けて目から下を隠し、加えて、さらに大きな布を特殊な巻き方、まるで素人とは思えない手つきで素早く髪からマスクの上、肩まで覆つていく。

すると、イメージとしてはアラビアのような、マントを靡かせる男が出来上がった。

晒されているのは金の瞳のみで、怪しそう満点である。日本でこんな格好をして歩けば、即通報か職務質問されること間違ひ無しだ。

「うつわ、めちゃくちゃファンタジー……！」

自分で作り上げたといふのに、紗那は普段からは想像できない程にはしゃいで楽しそうにしていた。

（）ここまで徹底的に顔を隠すのは、当然これから先予想が付かない事ばかりが待ち受けているだらうからだ。デルに教えられた限り、文化も文明も、何もかもが常識外ばかり。出来る限り目立たず、悟られず、紗那は動いていかなければならぬ。

「で、私の名前は？」

「その質問を待つてたよ～！」

全身の最終チェックを施しながら軽く聞いたことに、デルは馬鹿みたいに大げさに反応した。思わず眉を顰める紗那だったが、最早その表情を見た目で窺い知るのは不可能であり、デルが気付くことは無かつた。

「女の子の時はリサーナ。覚えやすいよう、紗那から考えましたん！」

嬉々として発表するデルであったが可哀想に、紗那は今一の反応。あまりに安直で悪趣味だと彼女は思った。

しかし、それすら気付かないデルである。2人のテンションは、まったくの真逆に変わつていぐ。

「んで、男の子のはサイード！ これはなんか、ピカッときて決めました～」

「うつわあ……」

紗那は心底デルに頼んだのを後悔した。さつきのリサーナもだが、それ以上にサイードとは。アニメの1話で死ぬ脇役感がムンムンで、どうにも不安に駆られたのだ。

流石に言葉まで呴かれたら気付いたのか、そんな紗那の反応があまりに召さず、デルはいじけて床に突っ伏した。氣のせいじゃなく、嗚咽も聞こえてくる。

しかし、そこで申し訳無いとは思わないのが紗那だ。良い加減デルも覚えればいいものを、許せる範囲を超えてふざけるデルに苛立ち、そうすれば考える前に手が動く。

「「」みんなさい、もうふざけませんっ！」

まあ、ギリギリで身の危険を感じたデルが察知するのだが。殴りそこない舌打ちをする音には、気付かないフリをするのが得策なのだ

うつわ。

うつやつて、一見緊張感など皆無なやり取りを続ける2人であったが、デルはずつと緊張が空回りしている状態で、紗那はそれを無視する形で空氣を保たせていた。しかし、それももう終わる。

事前にやるべき事はすべて済ませたのだ。後はもつ、ただ突き進むだけ。

「実はね、もう一つ、用意してるんだ」

「さすが、分かってるじゃん」

2人はまったく正反対の笑みを交わし、どちらともなく抱き合つ。傍から見ればどうやっても怪しくはあるが、そんなことは見る者がいなければ関係無い。デルの身体は、小刻みに震えていた。

「……ルシエ。これから先、僕は君をそう呼ぶよ」

か細い声で言われた言葉に、紗那は頷いた。

リサーナ。それは、紗那という地球にいた一人の少女の存在と記憶を留める戒めの名。

サイード。それは、地球上にもアピスにも居場所がない、それでいてどちらにも属するといつ證明の名。

「デルも相当嫌味な奴だね。魔界の王ならまだしも、そんなところから取るなんて」

「ルシエには負けるぞ」

紗那も名に込められている意味が分かったのか、少し悔しそうにはにかむ。布に隠されて見えなくても見え、デルは受け取ってくれたことに喜びを感じた。

ルシエ。それは罪を示す名であり、存在を知らしめる名でもある。

「ま、私にぴったりだね。んじゃあ、せつかくだからそれにプラスしようかな」

どれも授かつたばかりで、馴染むまでに時間がかかるだろう。それでも、リサーナは騙す際に何度も口にし、サイードは隠れたり奪つたりする際、この中で一番口にしていくだろう。

そして。

「破罪使、ルシエ。うん、これが一番ぴったりだ」

その罪すらも壊す使い。破壊するだけじゃ飽きたらず、破壊そのものを呼びこむ使者。アピスの歴史に深く刻まれるであろう、新しい”彼女”的。

「これまた、捻くれた字だねえ」
あざな

つい先ほど贈られ初めて口にした名は、もう2度と会うことないだろう人へと渡る。お互いの名だけが、恐らくこの出会いを絆へと変えてくれるはずだ。口にして、される度に。

「じゃあ、いってらっしゃい。捻くれるのも程ほどだよね？」

「さよなら、脆弱エゴイスト。まつ、私はしたことひたすらだけだ
よ」

何時だって別れとはあつさつとやつてくる。

彼女の足元から黒い光が現れ、それが蛇のようひづねりながらそ

の身体に巻き付き始めた。真っ白な場所で見える黒は毒々しく、そのまま身体は黒い空間へゆっくり引きずり込まれていく。しかし、彼女は焦らない。

2人はお互い静かに見つめ合い、自然と顔を引き寄せる。最初で最後の、布越しのキスだった。

布は、まるで鉄格子のように想いと熱を隔てる。しかし、それでも2人は深く熱く、互いの罪を別け合い擦り合いつ。

彼女は、そのさらに下にひつそりと込められた想いだけを汲み取らずに、とんと軽く相手の身体を押した。たったそれだけで、簡単にその距離は開けてしまった。

ラブとライクは、似ているようで決して交わらない重みの違う想いだ。悲しいかな、それが2人の差であった。

「じゃ、暴れてきますか！」

名残惜しさを隠せずに儂い笑みを浮かべるテルに、彼女はマスクの下で笑顔を返し大きく手を振った。最後に、ある言葉を負わせながら。

そうして、地球に存在していた河内紗那という一人の少女の短い生涯が幕を閉じた。

「じゃあ、まずは一番楽な場所に飛ばすね～？」

「ふざけんな、一番難易度高いところだりそこはー。」

それが、2人が交わした最後の会話だった。

河内紗那が最後に世界に負わせた言葉。

それは、「絶対に、許さないから。」といつ、あまりにも残酷で
切ない想いだつた。

普通すぎて、萎えました

「うつわ……、まじで有り得ない！」

そんな気持ちで、旅はスタートした。

アピスは、精石の恩恵を受けて築かれた10の大国で分かれている。故に其々が持つ領土は広大ほうだいで、国が認めた街や村以外では、個々の自治や統一されたものに加えて定められた法に基づき生活している。

国が一つ一つ至宝しゆぼうを持っているのだから、過去の地球のように幾度と無い戦争とは無縁む縁だと思うかもしれない。しかし、残念ながら、国間全てが良好な関係であるとはいえず、何度も精石を巡った争いが巻き起こってきた歴史がある。

その中でも、最も野心に囚われ他国にけりかいを出してきたのが、陽の国「ムスイム」である。

灼熱の大地に築かれたこの国は、潤いや涼を求めて長年に渡り水の国に戦いを仕掛け、そして何より民を省みてこなかつた。

結果、現在では国庫も火の車で、国としてまだ成り立っているのが不思議なぐらいに衰退してしまっている。

そんな国で、デルの力によりとうとうアピスに降り立つたルシエ

は、たつそく頭を悩ませていた。

自分の意見も聽かず勝手な判断で場所を決め、それを指摘されて慌てたからか、一番動きすら」と考えていた国に送られてしまった。

それが、ルシエの言い分である。予定では、陽の国の隣にある風の国からスタートしようと思つていたらしい。

というわけで、異世界に来てルシエが最初に抱いた感想は最悪だった。

一般論を言つてみれば、中々にその神経は斜め上を遙かにいつているのだが、たとえルシエに諭したところで、自分の感覚はおかしく無いと言わてしまふだらう。

しかしだ。あの黒い空間に全身が沈み、次に目を開けたときに死体が転がっているのを見て最初に、テンショングた落ちだわと思うのは人間性としても道徳的にもどうなんだらうか。

まだそういった光景ばかり見て生きてきているなら分からなくもないが、ルシエは今日初めて人の死に体を見たのだ。ならば、はつきり言えるだらう、それはおかしいと。

「とにかく、リリジやまともに話が出来る奴がいるかどうかも怪しないな」

せりに言えば、その切り替えの早さもだ。異世界の第一歩を踏み出す前に、ルシエはサイードに変わつている。

口調だけではなく、仕草、思考、その全てが事前に作り上げた人物になつていてるのだ。

周りは土造りの家で、突然場に現れたルシエを出迎えたのは死体だけの路地裏だが、通りに出れば道端に浮浪者がしゃがみ込み、飢えに蝕まれた人が溢れている。それを見る瞳に、何の感情も映らない。

「いりつしゃい」
氣を抜けばいりつきに襲われるその国で、ルシエはサイードとなり、異世界での一歩を踏んだ。

かるうじて店となつていいボロ屋に、愛想の無い挨拶が響いた。
訪れたのは黒で全身を包んだ、何者か分からぬ旅装束の男。男
は一瞬、あまりの無愛想な店主の物言いに眉を顰めるが、それは外そ
とみ見分からぬ。

しかも、店にいた人間の誰も、どつかのめんじくさいおばちゃん
から即クレームくるぐらい態度最悪だな、という感情を抱いていた
とは悟れないだろう。当然、この男が異世界人だとも考えない。

「何か食事を貰えるか？」

サイードは今にも折れそうな心許ない椅子に腰掛けながら、カウンターの店主に言った。だが、店主は頷くでも動くでもなく、怪しげに彼を見てくる。仕方なくマントに隠れた腰に付けているお金を入れた袋を示せば、やつと用意に取り掛かった。

しかしその瞬間、彼以外の店に居た客の視線がサイードに集まる。

店にはそぐわない張り詰めた空氣に怯むことなく、冷静に、サイードはさりと済まして立ち去るべきだと判断していた。どうにも長居するべきではないのは確かだ。

「ほひ、Jさんもんでいいか？」

「ああ、すまない」

10分ほどして出された食事は、ほんの少しの干し肉を何か野菜と炒めたものとほとんど具の無いスープといつ、食事とは言えないぐらい質素なものだった。

しかし、Jの国では仕方がないことなのだろう。むしろ、店を開けていられる程の蓄えがあることを驚くべきなのかもしれない。

「兄さんは旅人かい？」

店主は、Jのつきでは無いと判断したからか、はたまた金を持つてこいるからか、初めよりは愛想良く話しかけてきた。

サイードは内心、自分が男に見えていたのに安堵する。さうして、背後の人からさまな視線から気を逸らせる点でも、店主に感謝した。

「ああ。旅をしながら本を書いているんだ」

「また物好きな事を。でも、悪い事は言わん。Jの国は早くでたほうがいい」

勿論、答えた内容は嘘である。サイードの全身を隠す格好が、いぐらじの世界ではそこまで不信感を持たれないとしても、怪しいこ

とに変わりはない。そんな姿で、冒険者しますとか言つてしまえば、下手をすればさうに追求されかねないだらう。

それに、冒険者というのはギルドハウスという場所で登録をしないと本来名乗れない。ちなみにギルドハウスとは、ギルドといふ冒険者のグループを支援する機関を始まりとした、冒険者のコロニーである。

地球でのファンタジー小説等によくある、依頼を受けたりなんなりという役割もあるにはあるが、それよりも、冒険者の管理、土地の情報、武器や防具の店や宿の紹介を中心とした大きな情報屋といった方が正しいだらう。

何より、冒険者とならず者、犯罪者の区別をする役割を大きく担つてているのだ。正規の冒険者であれば、ギルドハウスが発行した身分証明書を持っているので、その予備知識をしつかり蓄えていたサイードは、わざわざ怪しさを残した理由を作ったのだ。

訝しむが、何か訳ありなんだろうなと思わせる嘘を。

サイードは、店主との世間話の中から多方面の情報を得ていった。

途中、食事をする為に布とマスクを外した際、店主が黙るといつ出来事はあつたが。

「……何か？」

「あ、ああ。いや、綺麗な顔をしてると思つてね」

男に対して、それが褒め言葉になるかどうかはさておき、あれほど準備していたというのに、何故こうも簡単に晒したのか不思議で

ある。

「一応、褒め言葉として受け取つておくかな」

「あー、男が綺麗つて言われても嬉しくはないもんな。まあ、それよりもだ。尚更早く出て行かないと、攫われて売られちまうぞ?」

理由は、簡単だった。忘れていたのだ。冷静に受け答えをしてはいたが、内心ではしまったと焦っていた。流石に、気を引き締めていたとしても、今までの生活にまったく無かつた事に対しては、人は無意識に普段の動作をしてしまう。

サイードは、再度頭に刻み込んだ。“自分”が何なのか、何をしようとしているのか。

「ははっ、忠告、感謝するよ」

幸い、店主が実は何かの手練だったといふイベントは無かつた。

見た目通り、これといった味付けの無い微妙な食事が終わったサイードは、マスクをつけ布を巻き直し、カウンターに金を置いた。当然、お金に関する予備知識もばっちりなので、ベタな展開はない。

5円玉に似た銅貨を3枚、3シリクを支払つて立ち上がる。

ちなみに、この世界の貨幣は金貨、銀貨、銅貨の3種類で、金貨はメリク、銀貨はナリク、銅貨はシリクと言つ。1メリクは50ナリクで、1ナリクは100シリクだ。相場を考えれば、今の料理で3シリクは高すぎるのだが、そこは今の陽の国の状況を考えれば仕

方がないのだわい。

「行くかい？ 気を付けてな」

「ああ。貴方も」

軽い挨拶を交わし、片手を振つて店主と別れて扉に手をかければ、店にいた他の客もあからさまに席を立つ。

それが分かりながらも、サイードは氣にするでもなく出て行つた。横目でその人数を確認しながら。

「……この国に来たばかりに、可哀想にな」

その背中に店主がかけた言葉を、サイードが薄い笑いで返していだのを知る者はいない。哀れみから出たものだつたんだろうが、このイベントは彼にとつて好都合だつた。

店にいた客、じゅつきの目的は、金か身体か。

砂埃が舞う閑散とした道を少し歩き、サイードは止まる。

「あんまり、目立ちたくは無いんだがな」

「ちつ、気付いてやがったか」

後をつけていたじゅつき達もそれに習ひ、雑魚キャラ台詞を堂々と言つてのけた。サイードが振り返つた瞬間、じゅつきは彼を囲むように配置について、いたる所が欠け、鎧付いた、切るのも突き刺すのも一苦労に見えるみすぼらしい武器を取り出す。

「何か用か？」

もしこの場に通行人がいたら、一見丸腰で力もなさそうなサイードを哀れな目で見ただろう。5人の男に囲まれた状況で、誰がサイードに期待するだろうか。

綺麗な顔立ちだと「じるつき達が知つていればまた違つただろうが、彼等は店主とサイードの会話を全部聴きとれていたわけではなく、見たわけでもない。明らかに、殺して奪う考えでいた。

国嘗すらままならない状態で、衛兵等の介入は無く、それを当然の如く知る「じるつき達は、処罰に怯える必要が無い。

「身包み置いていくつてんなら、生かしてやつてもいいぜ？」

恐らぐ「じるつき達のコーダ役なんである」、いくらか筋肉の引き締まつた男が、サイードに上目線からそういった。

それを一瞥したサイードは、小さく鼻で笑う。

「断る」

怯えも戸惑いも、一切感じさせない間髪入れない答へ。「じるつき達は、こめかみに青筋を立てた。

とはいっても、身包み剥いでしまえば、女だとバレてしまつて犯されるだけなので、当然な答えなのだ。

「なら、死ね！」

そんな事情を知らない「じるつき達は、雑魚キャラ満載のセリフを吐き、飛びかかった。

「死ぬのは、残念ながらめえらだよ」

「じつに力量は対して見込め無いとしても、命の奪い合いだ。しかしサイードは、まるで有難いと言わんばかりの立ち振舞いをして、迫る人間に静かに囁いた。

「さあ、散れ。俺の為に」

そこに居たのは、謎を背負つた男 - - サイード。彼は、地球で平穏だけしか知らない人間とはまた違う。その裏に異世界人という隠された真実があろうとも、踏みしめるのはアピスの大地であり、会話をするのはアピスの人間。

故に、経験や思想、常識は関係ない。

利用されて利用する。

「精靈よ、契約の下我に従え！…」

それは、一瞬の出来事だった。

サイードを5つの心許ない武器が襲い、それに対抗して行動を起
こそうとした間際、急に響いた第三者の声と共に飛んできた火玉に
全身が包まれ、ごろつき達は断末魔を上げながら地面に崩れた。

それに驚く余裕も無く、サイードは急いで彼等の心臓に、デルに
用意させていた小剣を突き刺した。

殆どは小剣を飛ばして対処したが、直接そつした時にごろつきの
身を焼く炎が手を掠め、熱さに痛みを感じる。

辺りには人の焼ける臭いが立ち込め、その塊が作った円の真ん中
で、サイードは痛みを感じた手をプラプラと揺らしながら第三者を
睨んだ。

「何者だ？」

余計な世話をしてくれたものだ、と苛立ちながら予期しない他者の
介入による動搖を隠す。

彼にとって今回のイベントは、自分の経験値を上げる良い機会だ

つたのだ。それを台無しにした相手に助けられたと思わず、横槍を入れられたと思って当然だ。

「手出しは無用だったみたいだなー？」

視線の先に居たのは、ツンツンで真っ赤な髪をした、16前後のサイードと年の近い青年だった。

「ああ、お陰で手に火傷を負つた」

金の瞳を細めての威圧的な態度に、青年はヘラヘラと笑う。

サイードは、手の痛みが説明出来るのなら力説したいと思つた。
言つなればその痛みは、体育館でこけて摩擦熱で傷ついた痛みの様に地味なもの。それでも、痛いものは痛い。むしろ、地味だからこそ痛みだ。

「それは、あんたがわざわざ火だるまに剣を刺しにいったからだろ？」

「断末魔は嫌いなんでね」

暗に、自分が悪いだろと言う青年にサイードはそう返し、2人の間に得体の知れない者同士が見極めるために作る時間の沈黙と視線が交わされる。

スタート早々、思いがけない事態だった。

赤い髪、そして青年の様に髪と同じ赤い瞳を持つところのは、ムスイムの民の証である。

陽の赤、水の水色、風の緑、大地の茶色、雷の金、海の青、光の白、闇の濃紺。そして、空の白と蒼、星の銀と濃紺。その髪と瞳の色を持つ人間は純血種と呼ばれ、より強い魔法が使えるので重宝される。

だからといって、例えば赤の髪をして水色の瞳をしていれば、その人間は陽の国と水の国の血が通っているとはならず、混血種だと魔法に期待出来ないと蔑まれるわけでもない。

ただしそれは、地球と同じ様に、その時代時代で差別されてしまうことがある、人種や国の出身者とその背景で変わつてはくるが。何よりサイードが警戒したのは、先程の攻撃が精霊の力を借りた魔法であるという点だ。

現時点では、横槍という手助けをした点で敵とはいえないが、無害ともいえない。

「俺は、ティルダ。あんたは？」

「悪いが、名乗るつもりは無い」

なので、利用価値を見出せない間は、こちらの素性を明かすわけにもいかない。

サイードの返答に、ティルダと名乗った青年は訝しげに眉を顰めた。

「じゃあ、何でこの国に？ 見たところあんた、この國のもんじやないだろ？」

お互に情報が足りないんだろう。しかしサイードは、青年の物言いに、賭けてみてもいいかもしないと感じた。少なくとも、ご

るつせには見えない。

「精石について調べながら、旅をしている。その為にこの国を訪れた」

「ひついたものに関する駆け引きや判断は、どうしても経験が必要になってくる。仮に賭けに負けたとしても、今度は戦闘に対する経験も積めるので、サイードにとつてはどうちらに転んだとしてもメリットはあつた。

しかしそれは、負けと判断するタイミングがとても重要であるので、決して簡単なことではない。

サイードの理由を聞いた途端、ティルダは晒つた。いいものを見つけたと言わんばかりに。

「なあ、あんた俺達と手を組まないか？」

「俺達？」

田の前には、ティルダ一人しかいないはずだつた。他にいたのは、今やこげた肉塊となつたごろつき達だけだ。

しかし、言葉の直後、周囲にあつた建物の上や細い路地の隙間から何人もの人間が現れサイードを包囲する。手には、剣や弓を持つていた。

これでは、逃げるのに相当苦労するだらう。しかし、サイードは表面上でも内面上でも焦らなかつた。

自分の命がただ危ないかもしれないというだけでは、これといって心が揺れないのだ。

周囲の人間に、今のところ強い敵意が無いのも関係しているのかも
しないが、根っここの部分に、絶対に目的を完遂させてやるという
使命感が無いのが一因だろう。

命あるモノ、死ぬ時は死んでしまう。当然なことだけれど、悟り
ともいえる命に縛らない考え方、責任感の薄さもそうだ。

「俺達は反乱軍でね。戦力はあればあるほど良い。勿論、あんたに
メリットもある。詳しい話は、アジトでリーダーとしてもらうから、
着いて来てくれない?」

サイードは思った、賭けには勝てそうだと。

そして、マントの下で構えていた小剣から手を離す。ちなみにだ
が、彼の投擲技術の高さはデルに備えさせたもの。サイードの眼は、
以前に比べかなり視力が高くなり、しなやかな腕には一切のブレも
生じない。

こういった技術の向上は、デルが脳にその情報を植えつけ、遺伝
子を操作したりして可能にさせていた。だから、これから先重要な
なり必要なのは、サイードが再三求めている経験なのだ。流石に、
感覚というものは本人が感じて考えていかなければ意味がない為、
他にも備えさせたものはいくらかあるのだが、現時点では宝の持ち
腐れに近い状態だった。

「……サイードだ」

怪しさ満点の反乱軍に名乗ることで、申し出に了承した。この国
に反乱軍がいるというのは知っている。それが目の前の連中だとい
う確かなものは無いが、もし本当であればこれに乗らない理由はな
い。たとえ、利用されるだろ？と感じても、それは仕方無いと割り

切り利用するのだ。

どうやら運に恵まれた、とサイードは密かに笑った。

通常、ゲームで例を挙げれば、キャラクターのレベルが上がるにつれて攻略しなければならないものの難易度も高くなつていく。それは物語にもいえることで、クライマックスに近付くにつれて、やることもでかくなつてくる。

しかし、そういうものは、主人公が認められていく過程で可能になることで、現実はどうかといふと、そうではない。身構えていくとも、いつだって理不尽な状況や諦めるしかない状況に遭遇することが多々あるのだ。

かといって、自分からそういう状況を作り上げるとなればまた話は別だ。

なのにルシエは、考えた上で敢えて難易度が高いものから始めようとしていた。結果的に若干のトラブルがあり、例えるならラスボス一步手前といえる微妙なスタートにはなつてしまつたが、何故そういうしようと思ったのか。

それは、難易度が高いと判断された理由が関係していた。デルが最もそうだと判断したのは風の国である。それ自体は、ルシエも同様に考えた。

風の国は、アピスで最大の規模を持つ国であり、尚且つ最強の戦力を所持しているのだ。

しかし、ルシエが相手取るのは、ゲームのようにレベルが決められていたり、アイテムを手に入れなければ先へ進めないわけではない。

弱いから適わない、というのは当然あるが、だからといって弱いから出来ないには繋がらないということだ。感情や思考のある人間、しかも集団と戦うのであれば、弱いなりに考えて策略を練り、そして行動していくことができる。

さらに、これから先、壊した精石の数が増えれば増える程、存在の認知度は上がり警戒も大きくなる。だからこそ、ルシエは最も難易度の高いところを真っ先に攻めて、隙を狙いたかったのだ。

経験も何も無い今の状態で壊せるのであれば、警戒がいくら強くならうとも力が付いてからでも出来るのではないか。

素人考えなのかもしれないが、否定もできない。

とはいっても、予定が狂ってしまった今、その考えをいくらか組み変えていかなければならぬのだが、最初に抱いた最悪な気持ちは、「これはこれでよかつたのかもしれない」と変化していた。

ティルダに案内された先で思わず隠れ蓑を手に入れたサイードは、そこからの展開の速さに若干幸先が不安になりながらも、賭けはこれから自分の行動が勝敗を左右するだろうと確信した。

いくつもの路地を曲がり、一見普通の家の地下にあった反乱軍のアジトで、全てのメンバーから信用していないという視線をもらいながらも、指示された椅子に座つてほくそえむ。

「サイード、会う準備が出来たつて！ リーダーのところへ案内するよ」

今回の話をふつかけてきた張本人は、纏わり付いてくる点や言動が微妙にデル属性で苛立ちはするが。

「おーい、サイード？」

目の前で手をひらひらと振つて意識を自分に向けようとするティルダに気付きながらも、サイードはわざと反応を示さなかった。ちなみに今更だが、サイードが人を初めて殺したというのに何故平然としているのか、と疑問は持たないで欲しい。

ルシエは、まともな神経と性格をしていない。故に、ルシエが作り出したサイードもその部分は同様であり、だからこそデルに選ばれているのだ。

「今なら顔見てもバレないんじゃね？」

「……死ぬか？」

「じ、冗談だつて！ 本氣にするなよ」

どこまで粘るのか見ていれば、ティルダが余計な事をしようとしたので牽制すれば、大きく慌て取り繕つ。流石にここで顔は晒せない。

実際、今の状況は願つてもないものだが、当然これには裏があるだろう。大方、囮や身代わりとかそういうもので、身元不明の人間はそういうのにもつてこいだ。

「で、リーダーのところにいくのか？」

「んだよ、聞いてたんじやん。ほら、ちだ」

慌てるティルダを無視して立ち上がり促せば、少し不機嫌になりながら地下の奥の方へと案内された。このアジト、地下のくせして結構な広さがあり、色々な部屋がある。待機させられていたのは、集合部屋であり食堂でもあつたみたいで、他はメンバーの寝室や武器庫なんだろう。

周りを観察しながら着いていけば、ティルダが内情をいくらか説明してくれた。聞くかぎり、内容は万が一漏れても支障が少ないレベルではある。しかし、それでもこの状態でサイードに話すということは、ここに来た時点で逃げるのは無理だとこことを暗に告げているのだろう。しかし、だ。

驚いた事に、田の前を歩くティルダは反乱軍の副リーダーだとう。

サイードは、それを聞きあることに気付いた。途端、ティルダが愉快に見え、バれない様にクツクツと笑う。

その間にアジトの最奥に来ていたらしく、見張りを置いて厳重に警戒された扉があつた。明らかに、重要な人物がいると分かる感じで、見張りの男がサイードに威圧的な視線を送る。

その扉からも、腕は本物だという張り詰めた空気が漂っていた。

「悪いけど、武器を全部預けてくれないか？」

「断る」

ティルダにしてみれば、当然の指示だつた。しかし、サイードはきつぱりと拒絕し、警戒を強めた見張りとティルダを睨む。

「断るつてお前！　こつちは、いつでもお前を殺れるんだぞ？」

「なら殺ればいい」

駆け引きはもう始まっていた。サイードのこの行動は、ティルダは勿論、扉の中に向けての牽制だ。本当にそつなのであれば、そうすればいいと。

高圧的な態度と共に投げつけた言葉に、ティルダは少しばかりサイードを選んだことに後悔し、驚きに動きを止めた。

「……はあ。ほら、縛れ。それでいいだろ」

相手にそんな提案をされるなど、本来副リーダーとしての力量を問うものだ。自身でも、反省しなくてはいけないはず。しかしティルダは、サイードがマントの上から背中で腕を組み差し出せば、戸惑いながらも素直に従つてしまつた。

「なあ、何でお前は俺に手を組もうと言つたんだ？」

「リーダーの命令。腕つ節のある旅人がいたら、連れて来いつて

成る程、何故こんな未熟な者が副リーダーと名乗つていたのか。ティルダは、都合の良い駒なのだ。先ほどサイードが気付いたのがそれだ。大方、彼が契約している精霊の力が強いからだろう。

「くくつ、ティルダは従順なんだな」

「ああ、リーダーを尊敬しているからな！」

可哀想に、ティルダは馬鹿にされているにも気付かない。傍でそのやり取りを見ている見張りのほうが何倍も察しが良く、渋い顔をしていた。それをサイードは一瞥し、マスクの下で口角を上げる。

「少し痛いかもしれないが、我慢してくれ。あと、必要以上に動くなよ？」

縛り終えたティルダは、軽い忠告をして見張りに縄の具合を確かめるよう指示していた。サイードは頷き従いながらも、考え事をする。

平和な世界に生きていたはずの自分が、幼い頃から人を殺めているかも知れない奴より歪んでいるのも不思議だが、そういうものも結局、本人次第なのかもしれないな、と。

実際、簡単には言わないが、縛られたぐらいでは完全に動きを封じられたわけではない。サイードが出した譲歩案は、確かにマントの下に隠している小剣を取り出せなくはしたが、足は縛つていなから蹴り倒すことも可能ではあるのだ。よって、ティルダの考えは緩すぎた。勿論、見張りの人間も。

そうして、引っ張られるように、開かれた扉をくぐり部屋へと連れられた。

サイードは頭を切り替え、どうやって利用しているのを悟られず流れを自分に持っていくかに思考を絞る。

「お前がティルダの連れて来た旅人か」

女を1人含んだ4人、サイードとティルダを含めれば6人となつた部屋はそこまで広くはなく、真ん中にテーブルを置いてそれ以外は書類が散らばり、壁には武器があるだけで閑散としていた。

テーブルの上にどつしり構えた男は、サイードを見て言う。

褐色の肌に赤い髪、橙色の瞳をし、筋肉隆々でたくさんの傷跡を恥ずかしげも無くさらした上半身裸の30代の落ち着いた男。腕と覚悟は本物だと見て取れ、彼がリーダーのようだ。

他の3人は恐らく、本当の副リーダーと幹部にあたる者だろう。

サイードは彼等を見た瞬間、嫌悪感を抱いき、顔を顰めていた。

「怪しい臭いが、ブンブンするわね」

リーダーの横に張り付き、いつでも迎撃できる状態でサイードを観察している中、女が除おもむろに近付いてサイードの顔に手を伸ばす。

いくらか荒れてはいるがすらりと伸びる指に視線を向ければ、美人に分類されるんだろう顔が妖艶に笑う。

近付いてきたせいでこみ上げたのは、我慢ならない吐き気と、こちらでは隠す必要の無い殺意。

「……触るな」

低く、淡々と。凡そ素人とは思えない声が、サイードの口から自然に零れた。

サイードにとつて、これほど初見で嫌悪する人間に出会つたのは、初めてのことである。

その言葉により、布に掛かる一步手前で女の手が止まつた。見たくないくすんだ瞳が、驚きに揺れている。

「これまた、大物を釣つてきたみたいだな。ティルダ、てめえは出とけ」

黙つて様子を眺めていたリーダーは、何故か嬉しそうに笑つて邪魔者を除け者にした。

可哀想なティルダは、馬鹿みたいに素直に頷いて部屋を出て行く。

「リル、下がれ。射殺されるぞ？」

クツクツと笑う姿はサイードの抱く嫌悪を助長させ、部屋は剣呑とした雰囲気に支配された。

「サイードとか言つたか？ 精石を調べながら旅をしているらしいな」

名乗らないのは、自らを上と宣言しているようなものだ。実際、態度も言葉も偉そうに見える。しかし、それは仕方の無い事だとサイードは我慢して、リーダーの意味の無い言葉の数々を流していくつた。

やれ精石の情報をやるだとか、報酬はたんまり出すとか。上目線は我慢できるが、舐められるのはそりはいかない。

どうしてくれよつか、と思い始めた時、サイードの態度に痺れを

切らしたのか、リーダーの横に立つ男の一人が口を挟んだ。

「聞いているのか？」

「悪い。あまりにくだらなくて、危うく寝そうになっていた」

明らかな挑発。ここは流石というべきか、それに乗つてくる者はいなかつたが、全員がサイードの物言いに拒絶を示した。

「俺は、見下されたり利用されたり、ましてや騙されるなんて我慢ならない性質でね。いつになつたら、この無意味な時間は終わるんだ？」

腕を縛られ、敵と見なされれば逃げるのも難しい状況だというのに、リーダーに引けを取らない上目線だった。

口元を隠していても、小馬鹿に笑っているのが雰囲気で分かるだろ。さすがに、本人も無意味な時間とは言い過ぎたと思っているようだが。それでも、怯えも一切無く、それは只の旅人であれば聊か不自然な態度だ。何かしら、情報や自信が無いとそんなことは出来やしない。

反乱軍は、直ぐにはサイードを殺さない。いや、殺せない。

何故なら、アジト内部を少しではあるが観察し、メンバーの動きを見る限り、彼等は近々大きな何かをしでかそうとしている感じたのだ。さらに、切迫している気がするから、それは先延ばしには出来ないんだろう。そんな状態で、タイミングで、外部からの駒を必要としていて、尚且つサイードが選ばれたということは、他に誰も捕まらなかつたことを意味するのではないか。

そして、そこまで求めるところとは、計画の重要な部分を担っているはず。

まあ、サイードは大体の見当をつけているのだが。

「くつ、くはははは！……何が言いたい？」

本性を晒したらしいワーダーは、テーブルから立ち上がりて鍛え抜かれた体を近付ける。至近距離で見た瞳は、サイードには腐つてるとしか思えなかつた。

「失敗した時の保険にしたいのなら、すればいい。但し、逃げないのを約束するかわりに、俺も好きなようにさせてもらう。此方は命が掛かっているんだ。こんな妥協案ぐらい、呑めるだろ？」

利用させてやるかわりに利用させる。暗に、それとも自信が無いのか、とこう挑発を潜ませながらの、驚く程に直球な交渉だつた。

自分でも自覚しているのか、感情的になるのをどうにかしなければならないなど、それがいつか命取りになってしまつだらう、と危惧した様だ。

「信用がならないな」

サイードの要望を聞いた彼等は、挑発に対してもなく、本人に自分達が考えていた用途を悟られたことで、今まで一番警戒を強め、臨戦態勢に入った。それが、肯定を意味すると氣付かず。

しかし、リーダーだけが面白そうに薄ら笑いを浮かべながらも動かない。サイードも動けなかつた。今指一本でも動かせば、すぐさ

まその首は飛ぶだろ？。

「信用する必要は無いだろ。お互いの目的が明確な分、単純に考えれば良い。お前等は万が一の際に俺の命を使い、俺はお前等が城を落とそうとする際の混乱に乗じて精石を調べる。後はそうだな、力がものをいうだけだ」

相手の表情や動きで、自分の予想が当たつていると確信したサイードは、自信ありげに自らの考えを述べた。

この国は、どう頑張って見ても限界だった。そんな国に潜む反乱軍という存在。その目的が、王の首と国の再建以外にあるだろうか。そして、実際に見て感じ、考えた結果、サイードは彼等が王を討とうとしていると判断した。そして、保険を欲していると。

万が一、それが失敗したとしても、^{サイード}保険をリーダーの代わりに差し出すことで、再び戦えるようにする為に。

身元不明の旅人であれば、いくらでも素性を偽装できるからだ。

正義を掲げながら、やろうとしていることは王と何ら変わりがないことに気付かないまま。そのせいで、サイードはここにいる。

「成る程な。まあ良い、その話に乗った」

「リーダー……」

誤魔化しが効かないと判断したリーダーは、先ほどとは打って変わって不機嫌になりながらも答え、仲間に抗議される。それを無視して伸ばした手がサイードの首を掴み、ダンツと大きな音を立てな

がら壁に叩きつけた。

その攻撃が”見えていた”サイードだが、敢えてそれを甘んじて受け入れる。

衝撃により零れた咳は、布に吸収されて気付かれない。動じないサイードにリーダーは動搖することなく、傷跡のせいで若干形の崩れた唇を動かした。

「ただし！ 全てが終わってどちらも生き残っていた際は、こちらも好きにさせてもらひ。こんなに腹の立つ奴は久し振りだ」

そう言って、彼は笑った。ひどく歪んだ瞳で、サイードにとつて吐き気がするほどの正義を翳して。そして、サイードが陽の魔王と同列だと吐き捨てた。

「お前の瞳は、死を招く光を持つてるな？ 吐き気がするねえ。」

あまりに自分勝手な感性ではあるが、それを察したのだけは褒められるだろう。たとえ、自分までその光に呑まれているのを気付かないとしても。

決行は、3日後。最後にそう告げたリーダー達は、用はもうないとサイードを部屋から追い出した。

強い光は時に毒となる

サイードは無意味に考え方をしていた。

今までは教科書やニュースの中の出来事である反乱と、そこに属しながらもどこか希薄な感じであった国。実際に目の当たりにするなんて思つていなかつたという気持ちも当然あるが、それ以上に抱いたものがあつた。

反乱が愚かな行為だとか、戦争はいけないことだとか、自分は思つてもいないし誰かに叫んで訴えかけるつもりもない。

ただ、だからといって、そこでの罪は正義になり得るのだろうか。そういう疑問を持つっていた。

名誉の死。尊い犠牲。

お綺麗に謳おうが、地位を授けようが、何も変わらないのではないか。

その肉を糧に変え、命を繋ぐのであればまた別だらうが、結局そこにあるのは死と、殺したという事実だけだ。

だからといって、自分が殺した人間を忘れないとか、罪悪感を持つといったこともないだろう。ただ、だからこそ認めるのだ。殺したという事実と、殺すという行為を。人肉を食べる必要も趣味も

無いし、やういった願望すらもないのだから。

ひけらかすこともなく、誰かに分けることもなく。淡々と自分で処理をしていく。

しかし、唯一他人に対しても言えるものがある。

それは善では無い、と。

価値観の違いだ云々言つ者は勿論いるだろうが、それを善と偽る奴を絶対に認めない。

自分の家族を守る為に、襲ってきた盜賊を返り討ちにする。

何十人もの罪なき者を快楽を理由に惨殺してきた者を、これ以上の犠牲者を出さない為に討伐する。

忠誠誓った王に仇なす敵を、騎士が殺す。

人が人を殺す理由は千差万別、様々あるが、結局そういう理由は、牛肉、鶏肉、豚肉、鹿肉、種類はあれど、どれも同じ肉であるといふのと変わり無い。

サイードは、ベッドと小さなテーブルと椅子があるだけの部屋にいた。当然、地下なので窓は無い。ベッドに顔を隠したままで寝転んでいるその瞳は、何も無い天井を見つめるだけだ。

リーダーとの駆け引きの後、即効この部屋に引きずり込まれ、それからずっとその状態である。様は、暇で仕方無いのだろう。だから、無意味なことばかり考へるのだ。

テレビや携帯があるわけもなく、本も何も無い。部屋に備え付けられている蠅燭の消費具合から、恐らく1日が経過していた。

「これが後2日続くなんて、挫けそう。ていうか無理！」

あまりの暇さに、我を忘れて転がりながら叫んだ言葉は、捨てた箸の人格の口調だった。言って直ぐ気付いたサイードは、慌てて外の気配を窺つてホッと胸を撫で下ろす。

「……危なかつた」

聞かれていたら、決して軽くはない心の傷を負つていただろう。だが、今度は別の恐怖が脳裏を掠め、サイードの視線は扉に向かれた。

そう、そもそも監禁されているんだろうかという、恐るべき疑念。反乱軍からしてみれば、我が者顔でアジト内を歩かれるのは当然困るが、それ以上に、サイードが保険であると仲間に知られる事が避けたいものなのだ。万が一それが明るみになれば、統率が乱れる原因になってしまうだろう。

全員が全員、同じ感性を持つなど不可能は話なので、自信が無いのかとトップを疑う者が出てきてしまつ。

国をひっくりかえすかもしれない計画が、実行間近で内部分裂により失敗に終われば、何の為に彼等は命を賭けているのか。笑い話にもならない。

と、サイードは恐る恐るだが、扉に向かう為に身体を起こしていった。

地味に眼が据わっていたのは、ここで鍵が掛かっていなければ自分が間抜けな事に落ち込むし、開いてなければいけないで、また暇を持余すことになるという葛藤からだらう。一步一步、着実に近付いていくその距離に、「クリクリと喉が鳴り緊張から額に汗が滲む。そしてサイードは、震える手でノブを触りつとした。

「サイード、まだ寝てんのかあ？……ひょ、びっくりたー！」

「絶対、あのマッショーブルのめじでやる」

寸前で開いた扉に、絶望と理不尽な怒りが芽生えたサイード。田の前にサイードがいるとまは思つていなかつたティルダが驚いていた。

まさか、こんなところでベタな展開とオチがあるとは、流石の神様でも予想できなかつただらう。とはいっても、神様のキーワードで真つ先に浮かぶのはデルなので、彼なら腹を抱えて笑うだらうが。

きょとんとするティルダを置き去りに、心のままに壁を叩いたサイードは、苛立ちながら大きな動作でベッドへと戻り不貞腐れた。

暫くして、状況を察したティルダが、何度も瞬きをして吹き出す。

「ぎゅはははははー、やつべ、サイード最高すぎるー。」

サイードを指差し、腹を抱えながら部屋に入ってきたティルダは、ベッドに向かい合つ形に椅子を移動させて座つた後も、暫く笑つていた。

「……悪かったな」

誰だつて、無理矢理部屋に押し込まれて、逃げるなよと釘を刺されたら監禁されたと思うだる、とぶつくせ呟く姿は、ティルダの抱いていたサイードに対する印象をかなり変えたのだった。

「なんかクールで取つ付きにくいと思つてたけど、意外に天然なんだな。いやー、笑つた！」

「て！？俺、天然なのか？」

椅子を傾けながら、楽しそうに笑うティルダは年相応に見え、相手をするサイードもその反応だけは可愛らしい。

「天然だろー。後は、顔を見せてくれたら最高なんだけどな」

「断る」

しかし、ティルダのお願いを聞いた途端、そんな雰囲気は紛散した。金の瞳には、きつぱりとした拒絕が見て取れる。

それに押されたティルダは、それ以上追求することは無い。それでも、ティルダはどことなくサイードに懐いている気がする。本人は、そうなる理由が分からず、単純に面倒くさいという感情しか持たない。

このままティルダの相手をするかどうか、暇つぶしと面倒くささの究極の選択である。

「にしてもさ、サイード。めちゃくちゃリーダーに嫌われてるけど、何したんだよ」

「別に、交渉しただけだ」

しかも話題がリーダーの話になり、絶対零度の微笑みをおもわずティルダに向けていた。この部屋全体が凍りそうな程の冷たい瞳を見た彼は、ヒツと小さく悲鳴をあげ、口元をひくつかせる。

「で、何の用だ？ 大好きなリーダーに、俺の見張りでも命じられたか？」

それに気付ながらもフォローせず、結局サイードは暇つぶしを選ぶ事にした。

その言葉は、どうやら図星だったようだ。さつきまでの雰囲気はどうこへやり、ティルダは目を泳がせて暗い表情を浮かべる。

壁に寄りかかり、ベッドの上に片膝を立てる形で座つてくつろぎ、それを眺めるサイードは、言うなれば獰猛な獣。哀れティルダは、その獣に狙われた小動物つてところか。

昨日の店から何も口にしておらず、ここでは満足に食事を『えら』れることもなさそうで空腹なので、言い得て妙だ。

「悪いな。俺があんたを選んだばかりに」

「別に構わない。俺にもメリットはあるからな」

サイードに視線を合わせず俯いて言つティルダは、この荒んだ国では大分優しい心を持つた青年だつた。そんな彼が何故、反乱軍にいるのかは謎であるが、サイードにとって今回のイベントには、結果助けられている。

精石がある場所は、事前に全て知つている。

しかし、だからといって、いくら崩れかけている国といえど、そのトップが居る場所に忍び込んで精石を壊すのは難しい。一人で実行するのと、反乱による混乱に乗じてするのでは、成功率にかなりの差がでてくる。

「サイードってさ、掴めない奴だよな」

そうやって、思いの他自分が行き当たりばったりな行動をしていると気付いて失笑していると、存在を忘れていたティルダがいきなり咳いて現実に引き戻された。明らかに愚痴とか告白とか、そういう類のものを吐き出しますというオーラを滲ませながら、彼はサイードを見ている。

その気配を感じたサイードの眉間に皺が寄るが、彼はまったく気付いてくれない。

「俺、無駄に強い精霊と契約してるから、力だけは半端無いんだよ。だから、副リーダーの地位を与えてんの。でも、実際は本当の副リーダーがちゃんといて、いいように使われてんだ」

純血種が強い魔法を使える、というのは以前説明したが、その理由は力ある精霊に好かれやすからだ。何故そうなのかはつきりとは分からぬが、恐らく精石と関係しているんだろう。

純血ということは、其々の恩恵を多大に受けてきた祖先の血が1種類だけで、精石から授かっている力の純度が高いということになる。

精霊にとっては、自分の属性の王に近いものを感じるから、純血種をより好むのだろう。

「俺、何がしたいんだろ。このまま良いのかな？」

「……」

サイードは、精靈と純血種の繋がりを考え、予備知識と照らし合わせて色々と思案していた。その間にも、ティルダは胸の内を吐露し続ける。

「……聞いてる？」

「あ、終わったのか？」

しかし、相手が相談に乗ってくれている素振りを見せなかつたので、半ば中断する形で問い掛けた。するとサイードは、親身のしの字もない態度で、やつと終わったのか感を前面に押し出した。

まさに、睡然。

ティルダにとつてしてみれば、かなり暴露したんだりつ。馬鹿にされる覚悟で、勇気を振り絞つて吐き出したのだ。

流石にこれは哀れである。サイードも、彼の悩みよりも重要な考え方をしていたといつても、可哀想だなと思う部分はあった。
事実に気付かなければ楽だつただろうつし、気付いてから気付かない振りをするのも乐じやないだろうから。

「で、それを俺に言つてどうする？ 慰めて、同情して、賛同して欲しいのなら、他を当たれ」

しかし、それ以上でも以下でもない。他人事の可哀想の領域から出ることはない。それに、楽かどうかが重要ではないだろう。

『陽は満ち溢れる勇気を』

良く言つたものである。やはり、腐つているなとサイードは呆れた。

国も、民も、精靈も腐つてゐる。

「いや、別に、なんか聞いて欲しかつたといつが……」

尻込みするティルダに対しても、腐る原因だなと思つた。サイードより遙かに場数を踏んでいるだろうに、何の身にもしていらない点では、その意見に反論できない。

「俺にお前を語られたところで、何の為にもならない。耳障りなだけだ。そんな下らないものだと尙更なかど。

サイードは、何故自分に相談をするのだろうかと甚だ疑問であつた。テルにしろティルダにしろ、そうして一体何を求めるのだろうか。

「使われるのが嫌なら、使わせてやるか使えばいいだけだろ。何かしたかつたから反乱軍にて、このままでは良くないと分かっているからやつ思つんだら?」

しかも今回は、答えがでまくつな愚痴で、見下すことすら出来ない程だと思っていた。そもそも愚痴とはそういうものなのだが、無駄なことが嫌いなサイードにとっては理解し難いものだった。

サイードはティルダではない。だから、感情の類を知る必要は無いのだ。求めるのは常に、情報や策略。サイードにとつてそれ以外は、全て無価値でしかない。

「俺に他人は決めれない。そんなんめんどくさい事、誰がやるか^{お前}」

ただ、白か黒の感性しか持たないからこそ、相談した相手は決まつて言つてくるんだろう。内容にもよるが、求めてもいないので、突き離しているというのに、それが結果的に背中を押す形となる。

「……俺が、俺を決める?」

思いもしなかつたというよりは、心に刺さった言葉を復唱しながら、ティルダはサイードの金に釘付けになる。

そして、暫く自分の赤を揺らしてぶつぶつ咳き。そして。

「そう、だな……。サイード!」

どこかすつきりした顔をして、消えていた光を再び瞳に宿したティルダは、清清しい笑顔で言つた。

ありがとう、と。

それを見たサイードは、あまりの眩しさに目を細めて、嫌いな言葉を投げられたことに苛立つていた。

誇りが無い、それが誇り

あれから、ティルダは何か思うところがあったのかすぐさま部屋を飛び出し、サイードは再び暇を持余すこととなつた。その背中を眺めながら、振り出しに戻るのであれば最初から暇を選べばよかつた、と後悔する。

しかし、監禁されとはいひない分かつてはいるので、先ほどまでと違ひ、部屋で何もせずに時間が過ぎるのを待つ必要はなかつた。

なのでサイードは、部屋から出てアジト内を見回る事にする。リーダーも、サイードがそうするだろうと見越したから、ティルダを見張り役にしようとしたのだろう。まあ、結局彼はその役を放棄したのだが。

アジト内は、2日後に迫つた決戦への緊張感に満ちていた。間際に表面上仲間と紹介されたサイードに対しては、視線が突き刺さつてくるが。

それを鬱陶しそうに流しながら、無意味にぶらつくと見せかけて、サイードは発見した食糧庫から少しばかり自分の分を失敬した。

シャワーらしきものも見つけたが、さすがにそれは我慢するしかなく、他にも計画の全貌と、城の見取り図までも手に入れていった。

当然そのようなものがある場所は、交代で見張りが付けられているのだが、サイードは自分で見なくても知る手段を持っているのだ。

さらに、その場にいなくても聞く事が出来る。

魔法にもそれに近い術はあるが、サイードのはまた別の、特別な固有の技であった。何故そんな力があるのか、それはルシエが”救世主”だからとだけ説明しておこう。今はまだ、知る場面ではない。

とにかく、その力でサイードは様々な情報を仕入れていった。

有益なものからそうでないものまで、本当に多くを手に入れたが、何よりこのアジト散策により、2日後の計画はほぼ失敗するということが判明する。

そしてサイードは、ティルダが感謝を抱いて懐いていてきたのが、結果的にプラスになつたことを笑つた。彼の決意も、だ。

なんだかんだで、アピスに来てからサイードはかなり運に恵まれていたのだろう。それに対し、少しつまらないと感じるのは褒められないが。

サイードにとつては取り巻く環境が変化しただけで、自身は何も変わつていないと思つている分、異世界も違つだけで普通に感じられて期待外れな部分があるので。

一気に冷めた気分になり、気付けばアジト内でも人気の無い場所に来ていた。

散策しつつも意識は違うところに向けられていたから、気付かずにはんな場所に来ていたのだが、何者かが自分に向ける視線により意識を戻す。

「ここで、何をしているの？」

既に、散策を始めてから2時間は経過していた。そこにきての、

突然の再会。目の前には、リーダーと対面した時にサイードの顔を晒そっとしたリルと呼ばれた女が立っていた。

腰まで流した赤い髪に、灰色の瞳。主張激しい胸に括れた腰はスタイル抜群であり、確かに美人ではある。しかし、瞳の持つ光はくすんでいて、目つきも鋭くどぎつい。纏う雰囲気から、ただの女ではないのだろうが、幹部よりもリーダーの女と言われた方が納得できそうだ。

リルは偶然を装っていたが、サイードには彼女が故意に近付いてきたのを悟っていた。

人の醜い部分が地球より率直に行動として表れるのは、サイードに楽しみをもたらしてくれる。

「いや、何か手伝える事は無いかと思つてたんだが、気付いたら迷つていてね。貴女は確か……」

「リル、よ。ふふ、昨日と随分態度が違うのね」

サイードは彼女に会えて、かなり好都合だった。しかも、本當は女であるので同じ女の気持ちや思考は分かりやすい。特に、自分の欲望を最優先させるタイプの女は。

口元に手を当ててクスクスと笑つたリルは、熱の籠つた視線をサイードに向けながら道を塞ぐ形で会話をする。

「昨日は少し、感情的になつてしまつたからね。普段は、こちらが素だよ」

口調も柔らかく変え、豹変したと言つてもおかしくない。サイー

ドを知つてゐる者がいれば、薄ら寒いと引くだらう。残念ながら、この男を知る人間は今のところまだ居ないのだが。もしかしたら、ティルダはいくらか会話をしてゐるので、そんな反応をしたかもしない。

サイードがそんな態度を取つて、嫌悪していたはずのリルの会話に付き合つてゐるのには当然理由がある。散策している間にサイードにも、彼女に用が出来ていたのだ。

自身の豹変は、楽しい楽しいお遊戯であり、最も大きな快楽のための前戯でもあつた。

今のサイードは、女に受けの良いもの腰柔らかな青年であり、かといって付き従うだけの軟弱とはまた違つ。弄ぶことを得意とする、少し危ない男。

元々サイードという”役”は、そういう定まらない人物なのだ。

「ねえ、私の勘だと、あなたかなりいい男でしょう？」

かといって、いつもあつさりとそれにのつてくるリルには、大爆笑して泣かせてしまいたくなる。それを我慢して、サイードは彼女の手を取つた。

「さあ？ それは貴女が判断してくれれば良いわ。」

耳元でそつと囁けば、リルは撫つたそこに身をよじる。それに合わせてわざとらしくクスッと笑い、すぐ傍の適当な部屋へと導いて行く。素直に従う姿に、彼女に拒絶の色は見えない。

可哀想に、リルの後ろにはある物が視えていた。

それこそが、死を招くと自覚しているサイードにのみ備わるものなのだが、何故偽りの人格に特技としか言えないようなものがあるのかは、本人にも不明だ。気付いたのは、昨日ごろつきと対峙した時だったのだが、これといって役立つともいえない力をサイードは持っていた。

未だ不確定な部分も多いので詳しい説明はまだできないが、少なくとも言えるのが、リルは欲に溺れたばかりに、欲張ったばかりに、それが見えるのだろう。

サイードが宛がわれているのと同じつくりの無人の部屋に入った2人は、ベッドにリルを押し倒す形で向き合っていた。体は密着し、彼女の足の間に自分の足を挟み、至近距離にある顔では互いの吐息が交じり合つ。

クスクスと笑うリルは、腕をゆっくりと動かして細い指でそっとサイードの顔を覆う布を顎下にずらした。

「えらく念入りなのね」

「焦らされる感がたまらないでしょう？」

布の下には素顔があると思っていたのに、現れたのはまた布。若干苛立つた様子で眉を顰めたリルにサイードは楽しそうに小さく笑つて、自分からずらされたマントと一緒に布を剥ぎ取つた。そうすると、彼女に明かされるのが髪だ。銀の髪が揺れ、その美しさに女として軽く嫉妬を覚える。

次に、サイードは、ピアスで止めているマスクを外した。手に持つたマスクをリルの横に投げれば、彼女は感嘆の息を吐き出しながら

ら釘付けになつていた。

晒された素顔、マスクの下にあつたのは、綺麗な鼻筋に傷のまつたく無いきめ細やかな肌。薄い唇は、女に劣情を抱かせる。

「貴女だけに、特別だ」

そんな顔が、そんな唇が、リルに近付きながらそう囁いた。瞬間、彼女は言い知れない幸福感に震える。それは、自分がサイードに求めてられているという勘違いな達成感でもあつた。

「ふふ、勿論。2人だけの、秘密ね」

リルは、初心な少女では無い。女の快楽を知り、女としての武器を使つて生きてきた。しかも彼女は、それが出来る美貌がある上に、絆されるより絆すタイプだ。当然、自分へのプライドも高い。しかし、彼女の知つたサイードという男は、それを捨てても求めたい感情を抱かせる。

「この男を自分のモノにしたい。リルの心はそれに支配された。

「ねえ、私が貴方を助けてあげる

「助ける?」

サイードが反乱軍にいる本当の意味を知つてゐるリルは、この瞬間リーダーに従う意味を失つた。時には、手に入れる為であればどんなことでもする節がある。

正直、彼女にそつさせている本人は、自分の顔がそこまでの効果

を持つてゐることに驚いてゐるのだが、その容姿は淫魔のごとく整つていて、尚且つ定まらない人格がもたらすミステリアスな雰囲気が相まって、破壊力抜群なのだ。

女の姿でも同じか、と聞かれればまた違つてくるのではあるが、そつすると性別を間違つて生まれてしまつたと思えてくる。

顔から離れ、リルの首筋につめて焦らしながら先を促せば、小さく嬌声を上げながら彼女はうつとりと惚けた。

「あんつ。反乱は失敗するわよ。そしたら貴方、殺されちゃうじやない」

どうしてリルがそんな事を言つのか。普通であれば、訝しむはずだ。しかし、サイードは彼女がそつと理由を全て知つていた。だからこそ、用があつたのだ。

確かにサイードは、反乱軍に利用されるかたちで此処にいる。しかし、何もせずに受身でいるわけではないのだ。最大限、最低の準備をし、異世界に^{ある}存在のだから。

「何故失敗すると？」

そして、利用できるものは全力で利用していく。目的のためならば、それがたとえ自分自身であつても。

「知りたい？なら」

「教えてくれたら、いくらでも君を喜ばせてあげるよ？」

首筋から顔を上げたサイードは、リルが全てを言い終わる前にそ

の口を短く塞ぎ、わざとらしくリップ音をたてながら頬にも口付けた。そして、主導権を自分に持たせる。

ただ唇を合わせただけだというのに、それだけでリルは興奮した。

とはいっても、サイードはリルを抱くことは出来ない。まあ、もし本当に男であつたとしても、彼女を抱こうとは思わないだろうが。ただ、

それでも、キス一つで自分に利益があるというのなら、相手が虫であるうがサイードはやつてのけるだろう。この男は、そういう奴なのだ。

「ふふ、意地悪ね。いいわ、教えてあげる」

馬鹿な女の頭にはもう、サイードとの情事にだけしか興味が沸かず、その魅力的な身体を差し出していた。

そして、必死にその胸に縋つて、我慢ならないと急かす。

もし、サイードに僅かでも女の膨らみがあれば、ここでバレる危険性もあるのだが、念のためサラシを巻いておけば焦る必要も無いぐらいに余裕で安心できる。それを意識的に考えないようにして、サイードはリルの髪に口付けを落とす。

そのまま再び首筋に軽い刺激を与えていた姿は、男女が睦み合つものそのものだ。しかし実際は、堪え切れない嘲笑を隠すためだった。

その焦らしに耐えかね、リルは考える事すら放棄して言った。

「私はね、陛下に愛されてるの。つまり、間者。だから2日後の計画はバレバレなのよ？お陰でたーんと」褒美が頂けたわ」

でも、私は貴方を愛してあげる

それが、愚かな女の最後の言葉となつた。

「残念でした。……俺の勝ちだ」

サイードの突然変わった口調に困惑する間もなく、リルの思考は痛みに支配された。首筋に埋まっていた簪の美しい顔は、いつの間にか抱き合つのからただの馬乗りに変わり、自分を冷たく見下している。そこに、感情の一切を映さずに。

そして、その右手はほんの数秒前まで無かつたはずの剣を握つていて、見た事の無い装飾が施されたソレの先を辿つていけば、切つ先は自分の胸の中へと埋まっていた。

愕然と視線をサイードに戻そうとする。しかし、その動きは緩慢で気だるさを伴い、それでもやつと視界に求めていた男が映つたとき、その顔はニヤリと歪んだ笑みを浮かべていた。

それすらも美しいと感じ、そしてリルの視界はシャットアウトする。

現実を呑みこむことも出来ず、把握も出来ず、死が彼女を喰らつた。

その力、特別

サイードが見下ろす先には、くすんだ瞳を濁つた瞳に変えたリルだつたものが映つていた。ほんの数秒、興味なさげに眺めていたサイードだつたが、そこからの動きは早かつた。

外していたマスクと布が、突然部屋に吹いた緩やかな風により舞い上がり、再びその顔と髪を隠して元の状態へと戻つて、風がそうしてくれている間に、手に持つ剣を死体から引き抜いて血を払つた。

そして、風が止むと同時に、部屋の扉が外側から蹴り倒された。リルを刺していくもの姿に戻る、この間1分も経つていない。

「つー？」

部屋に入つてきたのは4人。その中で一人、息を呑む者がいた。

彼等が押し入つてくるのを知つていたサイードは特に驚くことはなく、ゆつくりと視線をそちらに向ける。

ティルダは、死体とサイードどちらに息を呑んだのだろうか。

「リ、リル！？　おい、リルっ！？」

ティルダ以外、リーダーと2人の幹部は警戒して武器を構えつつも黙つてサイードを見るだけであつた。彼等は、一連の会話を全てを聞いていた。

ティルダまでいたのは、彼の精靈の力を借りて気配を消していたからだ。

では、何故そんなことをしていたのか。それは、サイードがそうさせたから。理由は、今から少し時間を遡って起きた出来事にあった。

サイードがアジトの散策をしている際、その耳に不審な動きをするリルの事が耳に入った。それを伝えてきたのは、精靈だ。精靈にとってサイードは、王に近い敬愛する存在である。その度合いは、純血種のソレとは到底レベルが違う。

そしてその力は、唯ルシエを特別にするもの。ただの女子高生を、アピスで特別にした力だ。

本来、精靈とは契約によつて繋がり、そしてその契約は精靈1体としか結ぶことができない。アピスの人間は少なからず魔力という、例えるなら生命力がより実感できる形になつたものを持っているのだが、その魔力は契約をした時点でその精靈の色に染まってしまう為に1体が限界なのだ。そして、精靈の力を自身のものに変換するのに魔力が必要になる。

しかしルシエは、救世主になることで人間の中で最も精靈に近い存在となり、それにより、全ての精靈と意思疎通を図ることが可能となつた。契約していようが関係無くだ。その上ルシエは、契約してなくとも精靈の力を分けて貰える。

この力は元々、デルが世界を渡るルシエに授けなければならないもので、救世主になるなら必要なものもある。

とはいっても、現在精霊の力は極限まで弱くなり、存在も少なくなっている。それでも、全てがいなくなつたわけではないし、そこにある精石に属する精霊しか存在しないわけでもない。先ほど、マントとマスクを着けてくれたのが風の精霊であるように、本来精霊とは、世界中にありふれてるはずだから。

しかし、精霊にも力の強弱があり、衰弱してしまつと自身の存在を保つていられずに消滅してしまう。そうさせるのが、穢れなのだ。

少し話が逸脱してしまつたが、サイードが城の見取り図を入手したりできたのは、単にそういうことだった。

精霊に呼びかけ、精霊に聞き、精霊に目を借つることで視ることができる。

当然、そうするにも魔力が必要であるのだが、異世界人であるはずのルシエもそれを持っていた。それは何故か。異世界に渡る際、一度体が構築し直されたからだ。

いくら地球とサイクルが似ているとはいっても、まったく同じでは無い。太陽が上り、沈めば月が輝く。そういうたモノは地球と同じであつても、世界を構成する要素が違う。なので、そのまま世界を渡つてしまえば、恐らくルシエの体は魔力を知らないことで、時間をかけて崩れてしまつただろう。所謂拒絶反応だ。

だから、身体を構築し直し、その際に魔力の芽を植えてその存在を直接体に覚え込ませた。

とはいっても、芽というだけあつて、それが発芽し成長しないことは、ルシエの持つ魔力は目覚めないし馴染まないはず。なのに、異世界に来てたつた1日で精霊との意思疎通を図るのは異常であ

る。仮に、疎通のやり方を予備知識として持っていたとしてもだ。

しかも、精霊との会話は、人間とのものとはまた違う。

力の強い精霊であれば、より人間に近い明確な意思を持つていたりするが、そこらにいる精霊は比較的弱い存在であり、持つ意思も弱い。

なので、人が何かを見て誰かに報告するとすれば、「城の見取り図がありました」となるものが、意思の弱い精霊に教えてもらう際には、「何かあったよ」だけしか得られない。いやはや、なんとも根気が必要なことだろう。

それをサイードは、アジトを散策しながら、存在を確認できた精霊と複数繰り広げたのだ。

結果、「変なのがいる」から始まってリルが裏切り者だと知った。そしてサイードは、すぐさまリーダーを探してそれを教え、嘘だと思つなら今から暴きに行くから聞いていればいいとのたまい、もしそれが本当であつた場合、リルを殺してもいいと許可を受けたのだ。同時に、ある約束を結ばせた。

それが、リルを殺してすぐさま彼等が部屋に現れたことと、サイードの所業に激怒しなかつた理由である。誰もが信用しなかつた中、真実はサイードに微笑んだ。

そうして現在の状況が出来上がり、部屋は緊迫した雰囲気で満たされていた。

「殺す必要があつたのか！？」

もう一度剣を振つてついた血を落とし、残つたものを死体が着ている服で拭つているサイードに向か、ティルダは怒りを込めて叫ぶ。その姿にサイードは晒い、呆れる。誰もが、その目が笑っているのに気が付いていた。

「答えるー。サイードー。」

馬鹿にされやうに怒りの増したティルダは、サイードを死体から離すように突き飛ばしながら食つて掛かつた。反撃しなかつたのは、その価値すらなかつたからだ。

「俺が許した」

代わりに、視線だけでリーダーに対しこいつをどうにかしようと訴え、受け取つた彼は言葉でティルダを止めた。

「なんでだよー!？」

「裏切りは大罪だ。餓鬼なてめえでも、それぐらいわかんだろ? が

今度はリーダーに食つて掛かるティルダと、そのやり取りを、サイードはぼんやりと眺める。まるでフィルター掛けた感じでそれは映つた。

反論の余地も無い事実に、可哀想なティルダは、リルだった死体を抱き締めて泣いた。しかし、リーダーはそれを無視してサイードに視線を注ぐ。

その表情に、出会つたときの偉そうな雰囲気は無い。どうやら彼

は、色々なことが気になつて仕方がないようだ。

本来であれば、サイードにはその疑問に答える義務はないし、その気も持たない。しかし、リーダーとこの件で話をして許可を取り付けた際に、彼はとある条件を提示していた。

「その剣は、どこから出した?」

リーダーが知りたがつたのは、サイードの能力である。この裏切りを暴いたこともそうであるが、彼には今更ながら、サイードが得体の知れない人物に思えていた。

今だと、手に持つ剣がそうだ。サイードは見る限り丸腰であった。彼等のように常に帯刀してはいないし、弓を背負っているわけでもない。

当然、ティルダの報告で、マントの下に小剣を忍ばせているのは知っていたが、その剣は隠せる程小さくは無かつた。

刃は平均よりも若干細く長く、銀色に美しく輝き、鐔^{ガード}の中^央には地球でいうところの華奢^{かしゃ}なセレスタイトがはめ込まれている。握^{グリップ}は黒く、柄頭^{ボタル}には、そこに繋がれた白と黒の翼を模した手のひらサイズの大きなダイヤのストラップが揺れていた。

剣の形自体、リーダーは初めて見るものだった。加えて、派手ではないが豪華な装飾。宝剣と言つてもいいぐらいのその剣に視線が縫い付けられる。

しかしそれは、今浮かんだ疑問である。

リーダーが出した条件はサイードの能力を晒すというものだったが、それに答えるのに出した条件が、質問は3つに限るというもの。

裏切りを教えた際には、知つた方法に答えていない為、現時点で2つの質問をしてしまつていた。

「質問は3つまでの約束だ。残るは、後1つだが？」

剣に関しては、思わず口にしてしまつたんだが。僅かに苦渋を潰した顔をしたリーダーは、暫く思案した。
さて、彼はどう出るのか。そこにサイードの興味が向く。果たして最後の質問は、反乱軍のリーダーとしてのものか、一個人としてか。

ある意味、力量が問われるものだ。サイードはリーダーを嫌悪はするが、散策の間でついでに知つている彼の思惑には、感嘆した部分があつた。

少しばかり期待していれば、リーダーは口を開く。

「お前は敵か、味方か？」

傍らの幹部が剣と弓をサイードに向け、いつでも動ける状態で待機している中、部屋に響いたのはそんな質問であつた。

「じゃあ、最後の質問からこいつか」

サイードは、どんな印象を持ったのだろうか。その質問は、反乱軍としてのものに聞こえた。しかし、一概にそうとは言えない反応をサイードは示す。

馬鹿にするような、興ざめしたような感じがした。

「まあ、断言してやるよ。敵では無い。とはいっても、味方でも無いがな」

それは、反乱軍がどうなるかと関係無いといつてもある。だが、サイードにしてみれば、当然なのだ。

やはり、どこか拍子抜けしたのだろう。返り血が付いていないか全身をチエックしながら答える姿に、緊張感はなかつた。

「んじゃ、次だな。この剣は少し特別でね、知り合いから貰つたんだが」「だが」

あつさつと言つてのけ、今度は万が一にでも攻撃されないように、右手に持つた剣の切つ先を下に向か逆手にしながら、腕の高さを彼等がよく観察できるように上げた。

「なつー!？」

すると、剣は一瞬にしてその手から消えた。そして、手のひらを分かりやすいように広げる。サイードの右手の中指には、セレスタイトが一つはめ込まれた黒い指輪が光っていた。ちなみに裏側には、白と黒の剣と同じ翼を模したダイヤもはめ込まれている。どの石も、剣を飾つているのよりは小さい。

泣きながら様子を見ていたティルダも含め全員が驚きに声を上げる中、もう一度その手に剣が現れた。その時には、中指の指輪が消えていた。

それは、魔法でも不可能な現象だった。故に有り得ないと凝視してくれる彼等に、現実だと思わせる様に何度もその動作を繰り返した。

ちなみに、これもデルに無理やり用意させたものだ。剣を持つた事の無いエルシエでも扱えるよう、羽の様に軽く錆びもない剣。精靈の力が乗るようにもされている。デルに出来るかと聞き、出来ないと言わなかから造らせた。装飾は、彼の趣味にまかせてある。

「さて、最後だ」

未だ、その現象を受け入れられないリーダー達を放置し、サイドは進めた。部屋は本当に血の臭いが充満しており、それに酔つて気分が悪くなっていたのだ。

最後の質問は勿論、どうやって裏切りに気付いたのか。

「俺は、こう見えて精靈とオトモダチでね。だから、教えて貰つたつてわけ。ソレが、不審な動きをしているとね」

真実全てを言つはずはない。ちらりと死体を一瞥して言つた言葉は、それでもアピスの人間にとつて特別なものではあつた。とはいっても、彼等は、意思疎通が可能な程強力な精靈と契約している、と勘違いをしたのだが。

しかし、それだけで特別になれる程、アピスの人間と精靈は密接した関係なのだ。それを考えたら、穢れにより精靈が少なくなつているというのに自覚をしない人間達は愚かとしか言えない。

この瞬間、リーダーにとつてサイードは、ただの身代わりの駒から戦力に変わつた。聊か状況についていけずに固まるが、ここでしつかりと働かなければ、サイードは即効見限つて別の行動へと移るだろう。

時間を無駄にする余裕が、サイードには無いのだ。

それに、ティルダがまだみつともなく抱いている死体^{リル}を無駄にで
きるほど、彼等も余裕がある訳ではない。

「……明日、城に攻め込むぞ」

リーダーの決断に、そうこなくては、とサイードは笑った。それ
が、サイードと彼が結んでいた約束だった。

明日はよろしくな、と告げて部屋から出て行くサイードに、彼等
が抱いた感情はどういったものだったのだろうか。疑惑、驚愕、畏
怖、困惑。どれかなのか、それとも全てなのか。部屋には言い知れ
ない空気が漂っていた。

力への信頼

リルの体を貫いた瞬間、フラッシュバックした記憶。デルの言った、あんな事になるとは思っていなかつたの本当の意味。あの、人の体が貫かれる光景を、“私”は知つていた。

それは、高校に入学したばかりの頃。去年の4月の事だ。

新しい制服、新しい環境、誰もがそれに心を躍らせていた。だけど私は、その頃にはとっくに捻くれた性格が完成されていたから、友達も作らず日々を過ごしていた。

そんな中、やたらと絡んでくる男が居た。中学3年の後半から始めたバイトの先輩で、少し年上で、優しいと評判だった。何故か彼は、出会って数週間で私を好きだと言った。

軽い男では無かつたらしく、周囲も不思議がっていたのを知つている。

しかし、断る理由も無く、だからって好きでも無かつたが、その告白を受けた。

ただの、気紛れ。

付き合ってからも、やたらと好きだと言われ、デートを繰り返し、たまに寝た。愛情は、幾らそれらを重ねても沸くことはなかつた。

だけど、何故か別れようとは思わなくて、もしかしたら好きではなくとも、彼との時間は楽しかったのかもしれない。

でも、突然別れは訪れた。しかも、永遠に。

その頃には、毎日のようにトラブルに見回っていて、それもその一つだったのだろう。デート中に遭遇してしまった通り魔により、彼は私を庇つてあっけなく死んだ。

リルのように前から刺され、無駄に長かった刃渡りの為、背中からそれを飛び出させる形で。それを私は、至近距離で見ていた。皮肉な事に、他にも被害者はいたが、彼がたつた一人の死亡者となつた。

彼は最後に私に向かい、無事で良かつたと言つて息を引き取つた。

でも、リルに対しサイードが笑つたのは、それを思い出して悲しかつたからではない。そもそも、その事件を忘れてなんかない。

リルを刺した瞬間にある事に気付いていて、それが可笑しくて笑えてきたのだ。リーダーとティルダのやり取りがフィルター掛かって見えていたのも、そのせいだった。ああ、本当はこういったやり取りが正解なのか、と今更ながらに知つたから。

私を底い死んだ人間がいたのは事実。

彼は明らかに、デルが与えてきた神の試練のせいで死んだ。

なのに私は、彼の名前と顔を思い出せなかつた。出来事は忘れていないというのに、最も覚えているべきことが欠けていた。

まだ、たつた一年しか経つていないのに。
だから、この女を、リルを殺した事など、一週間もすれば大して覚えていないんだろう。

そう思うと物凄く愉快で、だから笑いを抑えられなかつたのだ。
そして、正解なやり取りを知つたからこそ、自分の異常さが見えてくる。

無事でよかつた、と刃物を引き抜かれたせいで盛大に血を吹きながら倒れた彼に対し、私は何て言つたんだろう。

「何してんの？」

そう、確かにそう言つて泣きすらしなかつた。感謝も、贖罪の念すら抱かなかつた。葬儀に参列したかどうかも、定かではない。

「……くつそー！」

夢見の悪い一夜だつた。突然飛び起きたサイードは全身汗だくで、酷い頭痛に頭を押さえる。

あまりの息苦しさに、思わず顔を覆う布を剥ぎ取った。

襲つてくる鈍痛に耐え、大きく息を吐き出す。そつして無心に、

それが治まるのを待つた。

いくらなんでも、顔を隠したまで寝るのはきつかったのだろう。もしかしたら、リルを殺した一件で何かしら抱いたものがあつたのかかもしれない。

でも、それは仕方の無いことだ。何せルシエは、異世界に来てまだ3日目なのだ。慣れるこのほつが遙かに難しい。

「まさか、これ、精霊使ったからじゃないよな？」

中々引かない体の異常に、サイードは心当たりを口にしていた。それは正解で、やはり魔力が馴染んでいないというのに精霊と通じるのには無理があったのだ。そもそも、複数と対話する時点で魔力以外にもかなりの精神を使うので、身体が悲鳴をあげないのは有り得ないこと。

それに、サイードはまだ魔力が発芽すらしていない状態だ。使いこなせるわけがない。

「……使えねえ」

なんとかなるだろ、という安易な考えの結果に打ちのめされたサイードは、何をそんなに苛立つか、壁に拳を叩きつけた。

しかし、とにかく現状としては、今日を乗り切るのが先決である。例えティルダだろうと、それ以外の誰であろうと、サイードは彼等を盾にしながら精石を壊すつもりでいた。

「準備はいいなつ！？」

リーダーの声が、荒れた広場に高らかに響く。数も戦力も決して強いとはいえない反乱軍は、太陽が頂点に達する少し前に、その意を武器に込め城に進み出した。

リルの裏切りとその死は、僅かなメンバーにしか知られなかつたらしい。

それもそうだ、それを知らせたところで志氣が下がるだけである。突然の決行日変更については、相手側に悟られていたと事実を言つてゐるが。

駒から戦力に変わつたサイードは、まるでリルの後釜とでもいうように、リーダーと共に行動することを命令された。心情では苛立ちはしても、実際に願つたり適つたりなので素直に従つている。リーダーと共に行くということは、必然的に王の場所に向かえるということ。従つて、精石の破壊がより楽になるのだ。

「俺は、納得しないからなつ！」

唯一の難点と言えば、リーダーと行動するのがサイードだけじゃなく、ティルダもだということだろうか。他の幹部は仲間の統率に徹し、王を討つのはこの3人。しかしティルダは、未だに怒りを顕わにしたままだつた。

「好きにしろ」

大勢の人間に踏み荒らされ乾いた大地が細かい砂埃を上げ、思わず布の位置を確認しながら、サイードは関係無いという態度で返した。悔しそうに唇を噛むティルダの姿など、既に映つてはいない。

怒号を響かせながら、反乱軍は駆け抜けていった。

途中で、その熱気に中てられた市民までもが加わっていくが、サイードだけは重要なポジションにいながら傍観者であった。

この国は、終わる。こつして反乱する民も、それに対抗する国も、そもそも数が少なすぎる。

これまでしてきた事で他国に救いを求めることができず、今までの無意味な戦争で戦力もほぼ無し。

だからこそ反乱なのだが、その涙ぐましい覚悟も努力も、無意味となるだろう。国を国として成り立たせてくれている精石を、その根源が、サイードによって破壊されるのだ。

だからこの戦いは、さらに大地を血に染め、精靈を苦しめるだけの戦いとなる。それでもサイードは、この反乱を利用する。

何故なら、何を守りたいのかと問う、デルは世界を守りたいと言つたから。だから、僅かな犠牲より大きな成果を求める。

命を天秤にかけるなど傲慢極まりないが、何の犠牲も無しに救えていたら、当の昔に世界のバランスは元に戻つているだろ。

「サイード、ティルダ！ こつちだ！」

偉そうに怒鳴つてくるリーダの背中を眺めながら、サイードは城門を突破する。兵士は、大した防衛もできず、簡単に反乱軍の侵入

を許していた。

あちらこちらで、金属が打ち合う音がする。火の手が上がり、城にしては少ない使用人達が逃げ惑い、呻き声が耳を刺激し、断末魔が体に絡み付く。

反乱軍と兵士、どちらともつかない血が大地に染み込んで、サイードにしか聞こえない精霊の悲鳴の渦の中、3人は場内を進んでいった。

周りを観察する暇は無い。邪魔者は容赦なく切り、屍を踏みつけ、必死に精石の気配を探つた。

城の見取り図を元に彼等は進んでいて、2人は王を目指して玉座へと向かう。

「変だ……」

しかし、田的の違うサイードは違和感に気付いて立ち止まつた。風の精霊の補助を受けた身体は、全力疾走を続けても疲れことは無い。体力があるリーダーとティルダも、興奮に目を血走らせてはいるが、今のところ無傷であった。

「精石は本当に玉座にあるのか…？」

サイードは当然その気配を知らないわけだが、そこは最も精霊に近い存在である。城に入つてから、全身にピリピリと訴えかける何かがあった。違和感を持つたのは、その何かが玉座に近付いていくほど、薄くなつていくからだ。

「ああ、恐らく王が肌身離さず持つてるはずだ！　こんな時に、玉

「座の間に居ないほうがおかしいだらうが！」

足を止めればその分、敵を呼び寄せてしまつ。しかし、リーダーが厳しく捲くし立てれば、やられた、とサイードは苛立つた。その感情のまま、襲い掛かつてきた兵を小剣で仕留め、来た道を戻ろうと踵を返す。リーダーとティルダ、2人はぎょっとした。

「くそつ。なら、玉座に王は居ないぞ」

しきりに周囲に気を張るサイードは、敵を警戒するのとはまた違つていて、2人はさぞかし疑問に思つただろう。しかし、その言葉は俄かには信じられない。敵国の襲撃であれば逃げることもあるつが、この騒ぎで玉座に居ない、即ち反乱に対して王が尻込みすれば、それはもう負けを認めるようなものだ。

その戸惑いをサイードも理解はできたが、何故そう思うのかは説明しなかつた。代わりに、リスク承知で近くにいた精霊から情報を得る。

「……畏か」

その精霊から得られたのは、玉座の間には王を狙う不屈き者に対し、かなりの兵が待ち構えているということ。尚且つ、王は私室にて守られているということだった。

幸い、1体と通じただけでは僅かに体力を持つていかれただけで、支障は感じない。

「悪いが、俺は玉座には行かない。信じるかどうかは、自分で判断しない

先程の囁きに警戒したリーダー達であったが、それでもサイードによる説明は得られなかつた。さらに、あつさりと行き場所を変えられ、静止をかけるが聞く耳は持たれない。困惑し指示を待つティルダと、どうしたものかと悩むリーダー。だが、サイードには信用に値する実績があつた。

「そこに行はるのか！？」

「ああ、いるようだ」

それならば、彼等もついて行かないわけがない。ティルダに対し頷いて返したリーダは、すぐさまサイードを追つた。目指す私室は最上階。

まさか逃げることはないだろうが、それでも立ち止まつてゐる時間も、悩む時間も惜しい。

いつもあつそりついてくるとは思わなかつたサイードだが、視線は上へ上へと急いでいた。

「……私室か」

「ああ」

右にリーダー、左にティルダ。サイードを中心置く形で走る3人は、一見すれば仲間である。

「リルの事は許せないけど、俺はサイードの力を信用する」

さらには、ティルダのこの言葉。もしかしたら、信用や信頼とい

つたものは、築くこと 자체はそれ程難しくないかも知れない。それ自体よりも、難しいのは保つことや継続にあるのだろうか。

「はっ、有難いと言つておこうか」

ただし、それに対し感謝したり喜んだりするのは人それぞれ。残念ながら今のサイードに、余裕なんてものはない。この先には重要な仕事が控えており、尚且つそれは方法が不確定なものなのだ。

デルは精石の破壊の方法を、詳しく説明してくれなかつた。簡単に、それぞれの解放の詩^{うた}を唱えればいいとだけしか言わづ、その詩は精石に近付けば自然と頭に浮かぶだろつと。

実際、それは本当のことで、最上階に近付き精石の気配が濃くなるにつれ、少しづつ鮮明に何かの言葉がサイードの頭を支配し始めた。

ただ、せめてタイミングぐらに教えて欲しかつたと、デルに対して苛立ちを抱く。

唱えるだけで破壊できるのであれば、それはいつだつて良いだろう。だが、ただの言葉が力を持つとは思えない。

それに伴つて魔力を使うのであれば、そうほいほい唱えるわけにはいかないし、精靈王に呼びかける効果があるというのであれば、目の前になければ無意味かもしけない。

サイードは迷つていた。

しかし、その間にも最上階へと近付いていく。

そして、入り組んだ廊下を走り階段を上り、不審に思つぽび兵の

数が減つていいると感じた時、彼等は目的の階へと辿り着いた。

「突つ切るぞ！！」

階段を上りきった時、視界に映つたのは、大人が5人横にならべば一杯という広さの廊下を埋め尽くす兵士だった。

罷として玉座にて待ち構えている数がそれ以上だとしても、目の前の兵士は多く、しかも全身を鎧で包んだ者もいれば一見軽装に見える者までいることから、近衛兵から護衛兵と手練ばかりだらう。

当然、そうなると精霊の情報通り、王はこの階に居ることになる。しかし代わりに、サイードは迷つている余裕が無くなつた。

ティルダは魔法で、リーダーは剣術で立ちふさがる兵を突破していく中、サイードは一か八かの賭けに出る事を決めた。

精霊に加護を掛け直して貰い、剣を構え直したサイードは、デルが必ず口に出して唱えるとは言つていなかつたという、そこに賭けるしかなかつた。

戦いには集中力が当然必要だ。そんな中別のことをするとなると、かなりの不利に追い込まれる。

それでもサイードは、いくらか精靈に補助してもういながら、それを実行した。

(その心に眠りし誓い)

頭の中で、声に出してこらかのよつて意識しながら、浮かんでくる言葉を復唱していく。

(それはさながら焰の如く)

勿論、田の前の敵はサイードを無視したりはしないので、その間も迫りくる剣や槍を払いながら、自らも剣を振るひ。

(司るは勇ましき意志)

リーダーとティルダも、猛者の如く戦っていた。ティルダは魔法

を使うのだが、大きな炎で戦えば味方まで巻き込みかねず聊かやりにくそうではあつた。

よくよく考えれば、この2人がいなければ、サイードは堂々と詩を唱えられただろう。しかし、1人でこれだけの兵を相手取るのは難しかつたはず。近衛はともかく甲冑兵は、関節を狙わなければ崩せない。

不便さと幸運との狭間、サイードは自分の仕事を真っ当していった。

(立ち塞がりし壁を砕き)

心で唱えていけばいくほど身体から力が抜けていくので、恐らく賭けには負けていない。もしくは、精石が反応する範囲にあったのか。

判明すればこの先楽になることではあるが、知らなくても問題は無い情報にまで意識を向けてはいられなかつた。予想以上に、体力が消耗されていく。

「サイード！ 何してんだ！？」

「…ひ、悪い。」

寧ろ、これ以上は命取りになりかねない状態にまでなつていていた。ティルダがいなければどうなつていったことか。

身体がよろめき、その隙を狙つての背後からの攻撃へ、対処が遅れたサイードは危つくり刺されかけ、咄嗟に気付いた彼がそれを救つた。

まだ半分程度だというのにサイードの動悸は激しく、足はふらつ

き、視界が歪む。幸い、リーダーとティルダのお陰で、兵はほとんど残つていなかつた。

元々赤かつた絨毯が、気付けばかなりの血を吸い赤黒く変色している。歩く度に水気を含んだ音が響き、廊下にはあまりに濃い鉄臭さと死が充満していた。

(救いの手を差し伸べ)

サイードの剣も服も、同様に血で真っ赤に染まっているが、何時、何人ぐらい刺し切つたのか、本人はあまり覚えていない。息をする命は3人のみで、気持悪く不気味な静けさがあつた。

(その火を燃え滾らせ)

そんな中、身体の悲鳴を感じても、サイードは詩を唱え続ける。激しさを増す息遣いも、リーダーとティルダもそうである為怪しく思われず、そもそも2人は、あと少しで王の前に辿り着ける緊張感でそれどころでは無い。

(その陽で照らし)

先にあるのは、王の私室への扉だけであつた。

この時点で、サイードは立っているのもキツくなり、加えて、どうしてか眼球までもが鋭い痛みを訴えている。リーダーの後を必死についてはいくが、壁の支えなくしては歩けないほどだ。

2人は、扉に意識が削がれていて、最早隠しきれ無いサイードの異変に気付いていない。

(道を示さん)

後1文。陽の精石の破壊まで、とうとう目前となつていて。

同時に、ティルダが私室への扉に手を掛け、リーダーが警戒しながら待機し、王の命運もこれまでのところ今までできている。

国も、王も、終わるつとしていた。

国を再建する為に王を討とうとしている者。世界のバランスを戻す為に、国を滅ぼそうとする者。

そんな者達が手を組み共に行動してここまで来たのだから、皮肉なものだ。

両者とも、目的が達せられようとしている。しかし、片方はその先の希望も一緒に壊そうとしているのだ。

反乱軍は、一体どれだけの犠牲の上、ここまで来たのだろうか。反乱に至るまでに、多くの民が死に、苦しみ。軍を結成してからも、数え切れない仲間を失つたことだろう。

そうしてやつと王を討て、新たな時代、新たな国へと進もうとしている。

当然、その先に必ず幸せが待つては言えない。しかし、希望となるものがあり、何より精石がある限り民の豊かさは補償されている。それでいて、はずだつた。

しかし、彼等の気付かない所で、自身の人生と世界を犠牲にして歩み始めた者がいた。破壊することでどうなるか、分かりながらも決して歩みを止めないだろう者が生まれていた。

手に掛けたるのは、希望と再建への扉だと信じ疑わない者達。

全身を襲う異常に油汗を搔き、壁によりかかつて痛みに耐え、胸

を押さえながらもおぼろげな視界で見据えるのは、終わりへの扉だと晒う者。

それぞれ、相対する心を抱きつつ共に走り剣を振った彼等。そのことを知っているのは、破壊する者、サイードだけだ。

サイードが見つめる中、とうとう矛盾の扉は開く。

瞬間、リーダーとティルダは怒声を上げながら中へと駆け込んだ。

サイードが黙って眺める大きく開いた扉の先には、威厳が微塵も感じられない人間がいた。霞む視界にその人物の詳細な容姿は映らず、しかし、その者が持っていたかなりの長さのある杖と、その先端で輝く宝石らしきものだけはひどく鮮明に映った。

燃えるように赤いルビーのよつな石　陽の精石。

それを見てニヤリと晒つたサイードは、『苦勞様とリーダーとティルダに皮肉の労いを心の中で掛け、終わりの言葉を口にする。

限界だと瞳を閉じ、まるで最後を見るのを拒否するよつて、そして身体をすり落とし横たえながら、震える唇を動かした。

「再び、その姿を現し、知らしめよ……」

パンッ、と何かが割れる音がした。

しかし、その時には既にサイードの意識は、深い深い奥へと沈んでいた。

『その心に眠りし誓い
司るは勇ましき意志
立ち塞がりし壁を碎き
救いの手を差し伸べ
その火を燃え滾らせ
その陽で照らし
道を示さん

再び、その姿を現し知らしめよ』

『とうとう、この時が来てしまったか』

声が聞こえた。

指先すら動かせない、初めて感じじる重い身体に凹凸感にながらサイードは覚醒した。

何が起きたのか、どうなったのか、此処はどうなのか。

様々な疑問が沸くが、目を開けるどころか喋るのも不可能な状態だった。例えるならば、漂つているような、そもそも意識は本当に覚醒しているのか。

またか、序盤も序盤でゲームオーバーではあるまい。

そういうたまご持ちで落ち着こうとするが、まさかと想ひ血分がいるのも確か。命に執着するつもりは欠片もないが、さすがにそれはプライドが許さなかつた。

ナラすると、血ずどナルに対する文句が後から後から沸いてくる。こんなこと聞いていない、また会うことがあれば必ず殴つてやる、とい。

ここまで頭がはつきりし、思考が出来ることで、ルシエはやはり覚醒はしているようだと判断した。しかし、尚も体は動かず、回復もしていない。

だから仕方なく、どうとか気配だけでも探れないかと行動の方向

性を変えた」とした。

勿論、自分の身体の状態の再確認も忘れない。
身動きは出来ないが、先ほどから思考はできぬし呼吸もしている。
つまり、生きているところのは分かった。

『無茶をした結果です』

そうして気配探知をしようと意識を集中すると、突然耳からではなく頭に直接声が響いた。決して、澄んだとは言えない、頭に鈍痛を与えるような声。低いような、ただ単に威厳を持っているだけのよつな、どうやらこじるルシHにとってあまり好感の持てない声だった。

(誰?)

『あなたに解放されたものです。名はありませんが、そうですね、陽の王と呼ばれております』

声は出なくとも、その者との会話は成立した。

同調というのだろうか、共有だろうか。陽の王と名乗ったソレは、ルシエに敵意は持っていない様子だった。ただし、この陽の精霊王が敵意は持たなくとも、友好的だとは限らない。

(初めてまして。で、何か用?)

ともかく、まずは上手く解放出来た事を喜ぶべきだ。何故、王がルシエにこうして接触しているのかは不明だが。

なので、会話をしながらも、救世主としての力を用いて王の感情を感知できないかどうかを探る。

本能が知るなと警笛を出しているが、それでもルシエは悟られないと强行した。

『まだ知る必要はありません。焦らなくてもいすれ、明らかになつていいくでしょう。なので、探るのはやめて頂けませんか?』

しかし、たすがは王だ。あつさりとばれてしまい、内心舌打ちをする。

口調はかなり丁寧ではあつたが、明らかに剣呑さを含んだ言葉に危険が感じられ、ルシエは黙つてそれに従つた。

『まずは、世界……デルでしたか。彼からの伝言を預かつてあります』

(あー、いいよ、いらない。大体予想つくし、従う氣はさらさら無いから)

今はその名前を聞くだけで苛々すると言つて、今度はルシエが不機嫌になつた。恐らくその伝言とは、今回の賭けに対するお小言か何かだ。

何故、デルと陽の王が解放直後に接触しているのかはかなり怪しきはあるが、恐らくこれに関して今はまだ答えてくれないだろ?。

しかし残念ながら、ルシエの態度は陽の王に対し何か墓穴を掘つたようだつた。

『そつはいきませんッ! まったく、あなたは……。下手をすれば死んでいたのですよ! ? 寧ろ、生きていたのが不思議なぐらい。』

いいですか？ 物事には順序というものがあるて 『

突然怒り出した陽の王は、そこからは延々とお説教をし始めた。ルシエとしては言い返したいのが山々なのだが、まず口を挟む暇がない。それに、陽の王の言葉は正論であり、地味に心へ刺さつてくる。

(なんか、姑に怒られてる嫁な気分だわ)

『何か仰いました！？』

(いえ、何も)

会話が成立しているというのを思わず忘れ、心で呟くルシエ。今回ばかりは、デルに従うべきだったのかもしれないと激しく後悔していた。

ただ、無駄に長い説教からは、いくらか新しい情報を手に入れることが出来た。

口調からして彼女が言うには、物事には順序があり、デルは破壊の難易度だけで場所を指定したわけではなかつたらしい。

精霊に力の差があるように、当然精霊王同士でも優劣が存在し、難易度は破壊の困難さと解放する王の強さを基準にして判断していく。

そしてやはり、解放はデルに与えられた魔力が鍵となり、だとうのに、それを無視して高レベルから挑んだ結果、ルシエはそのリスクを受けていたのだ。

ただ、それは元々承知の上であつた。しかし、予想外だったのが、ルシエが精靈に干渉できるように、精靈側からもルシエに干渉できるということ。

それは強い精靈 王であれば、下手をすればルシエを乗っ取ることも可能とれる。

『異世界の空氣にも慣れておらず、しかも精靈の力に今まで触れたことのない人間が、いきなり私のような王の中でも高貴な』

高飛車な言葉は無視するとして、つまりは、初めてアルコールを飲んだ者が、自分の限界も知らないというのに、馬鹿みたいにがぶ呑みした結果と同じようなものだろう。陽の王が言うに、ルシエの潜在能力が生まれながらの体質かがなければ、解放した瞬間に体内から発火し死んでいたそうだ。

『まったく、信じられませんね！ それだけでも、呆れて物も言えないというのに、あまつさ剩え詠唱破棄とは！ いいですか？ 魔法というものは』

そして、あの時の疲労感の原因は、生命維持に必要な分の魔力すらも消費しかけていた、要するに魔力切れを起こしていたからだつた。詠唱とは、精靈の力を契約者の魔力で引き出し具現化する為のもの。通常でも、それには相応の修行と才能、年月を必要するというのに、王の解放でするとは、ただの馬鹿としか言えなかつた。

説教をされるのも、ここまで暴挙が続けば領ける。しかしルシエは、そもそも解放に際し魔力を使うと聞いていない。自分に魔力があるのは、世界を渡る際に身体が作りかえられると言っていたので、ある程度予想していたから納得出来たが、それでも結局、デルは隠し事ばかりしていたことになる。それが一番気に食わなかつた。

『私の精神に連れてこなければ、最低でも1ヶ月は動けなくなつていたのですよ?』

(それほど一も)

長かつたお説教は、最後の最後で自分の今いる場所を知ることで終わった。

その頃には、ルシエの精神的疲労がかなりのものとなつていた。高飛車な言葉は、流すのにも相当の労力を使うらしい。疲れた、トルシエが泣き言を言つぐらいだから、かなりのものだったのだろう。

『……何か?』

(いえ、何も)

このやり取りも、一体何度繰り返したことやひ。

それにしても、毎回いつもなつてしまつのであれば、ルシエは今更ながらデルに従わざる負えない。力が無いというのは、本人が一番自覚している。

となれば、デルが最初にと指定していたのは水の国だつた。記憶を手繕り、それを思い出したルシエは一気にげんなりとなる。

(うつわ…。陽から水だと、地球でいうとこの正反対じゃん)

『ああ、その件ですか』

地球より文明が発達してないアピスで、それほどどの移動となるとかなりの日数がかかる。手間と時間を考え、その非効率さに嘆ぐルシエだったが、それは次の陽の王の言葉で無意味となつた。

『水の王との相性が最悪なので、風から先にしてもうれます?』

恐らく、今のルシエがいつもと同じ状態であつたら、考えるよりまず殴つていただろう。あれほど魔法と精霊、魔力について説教をしていたというのに、王は個人的な理由でルシエに無茶を要求した。

(……「めん、もう一回言つて?」)

『ですから、水は嫌いなのです。風から先に解放なさい!』

聞き間違いかと一応思つたルシエだが、再度問い合わせたら命令が下された。精霊同士、相性というものがあると分かつたからよしとしよう。そう思わなければ、やってられなかつた。

(分かつた、分かつた。じゃあ、早くここから出してよ)

結局、陽の王が友好的かどうか以前に、ルシエが彼女に対する苦手と意識してしまつたのだが、それは余談だ。

どういう仕組みかは不明だが、ルシエは王の精神内に身体」と連れて来られているらしいので、恐らく自分の意志で戻るのは不可能。長居したくないと思い言つたが、またしてもそれは予想を裏切るかたちで返つてくる。

『私と契約すれば戻れますよ? デルから聞いてませんか?』

(はあ！？ そんな事しなきや駄目なの？ もしかして、10の王全部と！？)

デルは、あまりどころか重要なことの殆どを説明せず、ルシエの質問に答えていただけだったようだ。

『…………』

(…………)

さすがにそれは陽の王も予想外だったのか、暫し2人は無言となり、それだけでデルに対する怒りを静めることに集中した。

『とにかくですね、デルには私からしつかりと言つておきます』

(可能だつたら、最低でも5発は殴つといで)

ここにきて初めて、2人は親近感を味わいつつ団結していた。それにしても、10の精霊王と契約とはどういうことだろうか。王と言えど精霊ではないのか。そうすれば、1体としか契約出来ないのがこの世界の理である。その点を踏まえて考えれば、精霊といえど王と考えるのが正解なのかもしれない。それでも、リスクが無いとはどうしても思えない。

力を得られるということだけを考えれば、それはとても魅力的な話だろう。しかし、ルシエは一気に興ざめする自分を感じた。

精霊からすれば、ルシエは純粹に救世主なのだ。

だからこそ、無償の奉仕をしてくれるのだがその点をすっかり失

念しており、そしてそれは、ルシエにはとてもつまらないものだった。

『まさか、私と契約するのが嫌だと?』

(滅相もございません)

救世主なのに悪。その響きに囚われていたルシエにとって、まさに寝耳に水だつた事に気付いて唸つて居る姿は、どうやら陽の王には拒否していると思えたらしい。より一層低くなつた声色に、ルシエは命の危機を感じて即座に否定した。

未だに目は開かず、動けずではあるが感覚は戻つて居る。そして皮膚が焼けそうな感じがしたところから、先程の本音を悟られでもしたら、ルシエは跡形もなく焼かれていたかもしれない。

精霊に殺されたとなつては、最早笑うしかないだろう。

『まあ、契約といつても、低級のとはまた違います。私も私で、世界が安定するよう役目を果たさなければなりませんので。言うなれば、私の力の一部を好きに使えるようにするためのものです』

精霊に関しての知識が、現時点ではまだ豊富とは言えないルシエにとって、陽の言葉は疑問を増やすだけ。ここまできたら、デルの言葉の信憑性すら怪しい。これが彼の策略なのか、ただ間抜けだったのかは残念ながら微妙ではあるのだが、結局なるようにしかならないのだろう。策略であれば、乗つかつてやればいいだけで、嵌らなければルシエはそれでいいのだから。

『それでは、契約を済ませてしまいましょう。言っておきますが、力を貸すだけですので、これから先いくら私に呼びかけようと助け

を求めようと、一切応えませんのであしからず。』

(それで十分)

少しばかり刺々しさを含んだ言葉。しかし、精靈王は人間に裏切られた立場であり、ルシエは人間だ。少なくとも、陽の王やデルはそう思っている様だ。ただ単純に、ルシエが世界を護る立場であるからか恨みきれないだけなのか、それで接していただけなのかもしれない。

「この先全てが、いつやって簡単に精靈王と対話が出来るとは限らないのだと、心にしつかり刻んでおく。恐らく王は、ルシエのようには自業自得とは思わないであろうから。

(痛つ……)

そうして、契約が結ばれた。身を任せしかねないルシエは、ただ身体を委ねるだけであり、陽の王に任せていれば、額に強烈な熱と痛みを感じた。

その熱は全身へと巡り、再び額へと収束する。同時に、身体の自由が戻っていくを感じた。

『力が馴染むまで容姿が僅かに変化しますので、気を付けることです』

まず、手を握って開いて確認をし、身体を起こす。次に、急激な光に目をやられないとも限らないので、ゆっくりと瞼を開いた。しかし、視界には何も映らない。それこそ、手を目の前に掲げても、それすら捉えられない闇にルシエはいたのだった。当然、陽の王の姿も分からぬ。

(……そつちもまあ、頑張つて)

『「武運を。くれぐれも、無茶だけはしないよつ』
ルシエは氣付いてしまった。もしここが、本当に陽の王の精神ならば、彼女の心は光の届かない闇に埋もれてしまっているのだと。しかしそれは、本人の問題であり、ルシエごときが干渉できることではない。

得体の知れない何かに引っ張られる感覚がして、別れがきたのだ
と悟つた。

『何が、悪かつたのでしょうかね……』

その際聞こえた言葉は、ルシエに笑いを誘つた。

(そんなに、善がいいもののかねえ)

答えが届いたかどうかは、陽の王だけが知るところだ。
ともかく、ルシエは現実へと戻ろうとしていた。その際には、全てが済んでいくのだろうか。

目的は達せられ、その上姿が変わつていると言つていたので、早々に立ち去らなければならない。そして、得られた力を試すのも必要だらう。

今回積めたのは、殺しの経験と数、投擲技術の確認ぐらいだらうか。結局、期待していたほどではなかつた。

さあ、次に目指すは風の精石。

陽は、昇つた。

「……戻つたか」

気付けば視覚が光を捉え、サイードは王の私室から少し離れた廊下にいた。丁度、階段の前で、廊下全体が見渡せる位置であり、死体が一面に広がっている。

それに対してもこれといった反応は示さず、ただ、足元で奏でる湿った音にだけ僅かに眉を顰めた。

「そういうや、何処が変わったんだ？」

元々、目と手ぐらいしか外にでていない風貌だ。確認しようにも、普通でも鏡が必要だろうが、サイードにはその術がない。

ただ、首の後ろで今までに無い違和感があり、不思議に思つて周りが静かなのを良い事に布を剥ぐ。

すると、案の定まず長さが変化していた。しかも、肩下まで伸びていた髪の色までがシルバーから深紅になつており、明らかに陽の

王の影響を受けてい。

流石に皮膚が赤くなるということは無かつたが、他で色素が変化しているとなると、後一つしかないだろう。ただ、そこを確認するとなると鏡がなくては無理だ。

とうことで、サイードは手に取った布を持ちながら、すぐ傍にあつた適当な部屋に足を進めた。

「瞳まで赤い……。これは、マズイな

そこは側近の私室だったのか、家捜しするまでもなく鏡は見つか
り、サイードは自分の姿を睨み付けながら呟く。

髪だけであれば、いつもの格好で誤魔化しが効いたが、瞳までも
となればむしろそっちの方が仇となるだろう。どうしたものかと思
案しながら、結局クロザットを漁る。

ついでに、髪もそのままであれば邪魔にしかならないので、綺麗に
並べて片付けてあつたリボンの中から、黒を選び結んでおいた。

この部屋の主は、大分几帳面な者だったようだ。

形の似たものに分け、綺麗に服が並べられている。そこから上着
を選び着替え、ついでにいくらか服を拝借しておぐ。

なんとか、女っぽい男で通用するだろう。ルシエから見た自分の
評価はそうであつたが、どこをどう見ても麗人。陽の純血種より濃
い赤は、人の雰囲気を逸脱していた。

「まあ、これでいいか。ここで、さうとおひそかでもない
おつかねえ」

反乱も、最初の目的は達せられているだろつ。精石がビのような形で壊れたにしる、この先の彼等の行動に興味は無い。

例え、どちらか一人とは永遠に会つ機会が無くなひとつも。

「なんで、なんでだよ… やめろよ、リーダー…！」

すぐ近くの王の私室から聞こえる、悲鳴にも似た叫び。それに気が付きながらも、サイードは最上階から地上に向かう為、窓の端に足を掛けた。

「万一、この国が再建できたとしたら、今度は敵として会つだらうな」

まつたく危惧していない、しかしごりとなく楽しみにしているという風体で、サイードは笑つ。

「さてと、荷物を回収して行きますかねえ」

そして、サイードはそこから地上へと飛び降りた。かなりの高さがあるところに、躊躇する様子もなく簡単にそれが出来る度胸が理解できない。当然、精霊の補助で無傷で着地はできるが、それでもだ。

背中で遠ざかる声に対し、サイードは届かないと分かりながら呟いた。

「意外に嫌いじゃなかつたぞ。ムスイム国王位第一継承者、ティルダ殿下？」

軽やかな足取りで城から遠ざかるサイードと、この国の未来を左右する戦いの結果は分からなかつた。

反乱軍リーダーの作戦。それは、王を討ち、手元に引き寄せていた王子も消し去ることで血らが王となること。そして力を蓄え、再び諸国に戦いを仕掛けることだった。

この世界では、精石があれば何でもできるという概念が深く根付いている。

サイードにとって、リーダーの思想自体は好ましいものだ。ただ、愚かで笑えるという点でだが。

もし、リーダーが勝ち、再びサイードの前に現れることがあれば迷わず剣を向けるだろう。

しかし、ティルダが生き残つたとしたら。彼の考えは、サイードにも予想が付かない。2人で過ごしたあの時、彼は彼なりに国の再建を心に誓つたようだが、果たして優しいだけの彼にそれが出来るのか。

今の優しいだけの青年では、おそらく敵対するビリルカ武器を向けることは出来ないだろうが。

それでも、継続的に楽しめたとしたら、ティルダが生き残つたほうが断然である。

じりじりせよ、再び相見えることがあれば、その時は恐らく、世

界中にルシエの存在が知られてからだ。

「残る精石は、後9個」

アピスに降り立ち、僅か3日での破壊達成であった。

陽の王（後書き）

「陽の国編」終了です。

次からは、「風の国編」がスタート。

「意見」「感想」よりしければお待ちしております。

その戦い、不穏

ムスイム王の死は瞬く間にアピス全土に広まつたが、王の死を嘆く者はおらず、寧ろ歡喜された。これから陽の国がどうなつていくか定かでは無いが、精石の喪失だけはどこにも伝わらなかつたようだ。

今はまだ、暗躍する時だといふことか。もしくは、自身でその時を選べといふことか。

「んー、気持ち良いー！」

ルシエは、あれから風の国の領土へと渡り、道中で見付けた泉で気持ちよさそうに水浴びをしていた。村も何もない、砂漠同然の道のりを延々と歩いた身体は泥だらけである。

さらに、どうしてか静かであつて欲しかつたこの移動では、無駄にファンタジーでファンシーな生物と頻繁に遭遇し、望んでいた経験値と実力の確認はできたものの血に塗れてもいた。

「さすがに、ドリゴンが3連ちゃんで襲撃して来た時は死ぬかと思つた」

静かな泉は、人のいる場所より精霊の気配を濃く感じる。それに囲まれながら、ルシエは思う存分冷たい水で体を清めた。頭の中で、ここまで来る間に遭遇した生物を思い出しながら。

ルシエにとつて、精靈は意思疎通が出来るので存在は実感できる
いたが、世界自体が弱つてその姿を見たことが無く、異世界にいる
という自覚を強く持てていたわけではない。しかし、実際にあり得
ないモノを見て、やつと漠然とながらも分かつてきた。

精靈も元は姿形を持つてゐるということなので、精靈王を解放し
ていけば力のあるルシエも視覚で捉えることができるようになるだ
ろう。

大小あれど契約を結べる程の魔力を持つ人間は、誰でも精靈を見
れるのだから。

そう考へると、これだけ顕著な変化が起こつてゐるといふのに、
何故この世界の人間は気付かないのだろうか。

「お風呂、入りたいなあ……」

身体が冷えてきた為、泉から上がるしかなかつたルシエは、足裏
の草の感触を楽しみながらも呟く。

異世界に降り立つてから今日で1週間程度なのだが、そうすれば
恋しさも生まれてくるのだろう。

文明は魔法というものがある分地球程発展しておらず、風習だつ
て違つてくる。

湯船に浸かることが出来ないのが、今のところ一番の不満だろう
か。この世界では、身体を拭くか湯を浴びるだけなのがほとんどだ。
湯に浸かれるのは、限られた富裕層のみである。

それ以前に、この1週間、まともに風呂に入れて無いからこそ
不満かもしれない。

「なんかもー、一生懸命とか必死とか、柄じゃなさすぎやん」

ぶつぶつと、独り言は続いている。荷物を入れている麻袋を漁り、ムスイムの城で拝借していた服を適当に着て、予備のマントを巻いていく。あの時変化していた髪と目は元の色に戻っていた。

手に、服としてはもう使いだらう汚れ切った布を持ち、ルシエは心で燃えろと念じた。

すると手の平から炎が生じ、一瞬で灰と化す。その炎がルシエを傷付けることは無い。

授かっただ陽の精霊王の力。炎が出ている間、ルシエの瞳は真っ赤に変わっていた。

大分コントロールが効くようになつたと満足げのルシエだが、困った事にこの力、使っている間は髪と目の色が変わってしまうのだ。さらには使う力の大きさに比例して、髪が伸びてしまう。

今程度だと色が一瞬変化するぐらいなのだが、そう簡単に人前では使えないだろう。本人も、当然それは分かつていた。

「さて、旅を再開しますかねえ」

砂漠地獄から解放され少し回復したテンショーンで、ルシエは再び歩き出した。

「の先で、大きな出会いが待ち受けているとも知らずに。

「砂漠の次は森、ですか……。いや、別に良いけど。良いけど、なんていの？ 適度にいけないかな、適度に」

ルシエは、深い森の中を汗だくになりながら進んでいた。時折精霊に手助けはもらうが、基本自力でだ。鍛錬を兼ねているのだろう。泉で回復したはずのテンションは、急降下している。

太陽を遮りてしまふほどの木々が生えた、薄暗い森。田印となるものは無く、方角もあやふやになってしまふだろう。

しかし、この旅に地図など不要で、精霊に案内してもらえばいいだけだ。

ただ、精霊と人間の感覚は同じではないので、いつもして過酷な道を歩くことになっているのだが。

「あー、焼き払つてしまいたい」

今なら出来そうな気がすると、ルシエは上がった息を木に手をつきながら整えた。

目指しているのは、風の国を中心、首都「ウエントウス」だ。アピスで最も気高い騎士と、最強の魔術師団を持つ最大の国。

恐らく、そんな国の精石を壊すとなると、ルシエは暗躍出来なくなるだろう。他国との国交も盛んだというから、陽の国のようにはいかない。

疲れ以外では重くならない足取りに、ルシエはその事実を理解しているのだろうか。陽の国はあつたとクリアできすぎたということを。

風の国からは、人間との戦いが避けられないということを。

「とりあえず、野宿できる場所を探して」

近くにいた精霊に頼み、ルシエは指示された方向を進む。その時、不自然な風が緩やかにその鼻を震めた。

「……信じられない」

それは、風の精霊の知らせ。鉄臭さを含んだその風は、ルシエの進行方向から流れてきた。

「当然、迂回しますよねー」

明らかにトラブルだと分かり、ルシエは回避を速断した。精霊が知らせてきたということとは、関係せよつとしていること。

ルシエの進行の邪魔になる、といふのであれば、そこを避けた方向を指示して導けばいいだけだ。

しかし、それをしないといふことは、精石以外の内容であれば面倒事でしかない。

精霊は信頼できる。ルシエを貶めることは決して無い。つまりは、今の知らせは精霊のお願い事であるということだ。

それを即効拒否するとは、本当にルシエは非人道的な性質である。

「痛つ！ 痛いって！」

しかし、精霊も引けないらしい。風や枝がマントをひっぱり迂回させないように引き止める。

一人で騒いでるようになしか見えない奇行も、薄暗く寂しいこの森

の中では空しさしか醸し出してくれなかつた。

「……わかつた、わかつたつてばー。」

その攻防は、ルシエが早々に折れる形で終わつた。耳には遠くからではあるが、さつきから剣の打ち合ひやら声が微かに届いている。

深く溜め息を吐き、蹲り、暫し顔を俯かせたルシエだつたが、諦めて立ち上がつた時には、手に剣を握つていた。

「行けばいいんだろ、めんべくせえ」

ぼやきながら姿勢を低くした”サイード”。草木に紛れるようにして進んだ先にあつたのは、小さな小競り合いといふ規模のものは無かつた。

膝裏の位置で裾が舞う薄緑の上着は、風の国の騎士のもの。それを着て剣を構える人間が、15名程。地面に伏せているのも含めてだ。

対して、サイードと同じように全身を黒で包んだ人間も10名程いる。

その2組が、激しく戦つていた。

「うわ、絶対に闊りたくねえ……」

心の底からそうぼやく。

恐らく精靈は、どちらかを助けて欲しいのだつ。もしくは、この中の誰かを。ただ、サイードはまったくもつてやる気が起きない。

精靈の味方になつてゐるつもりが、毛頭無い。

「俺は使いつぱしりかつづーの」

中々動かないことに焦れ精靈は抗議をするが、ここで先程のようにそれを表現するとサイードの命まで危ぶみかないので、無理矢理動かすことができなかつた。

それを良い事に傍観に徹したサイードだが、目は状況を見極めようと真剣。見る限り、数は若干勝れど、騎士が圧されていると思われた。

「どう見ても、敵だと思われるだらうしねえ」

格好も似ていて、怪しさ満点。騎士側を助ける理由も無い。サイードにとつては、無駄に敵を増やしたくもないし、義理すらなかつた。

そうして、観戦すること数分。騎士の中に、一際目を惹く人物がいた。

優男にしか見えない風貌だが、優雅な剣術で彼だけが黒尽くめを軽々と切り倒している。仲間を助けながら。

彼の殺氣はすさまじく、敵もそれに圧倒されていた。

少し離れた場所にいるサイードが隠れる茂みでも、その殺氣に中でられざわめいている程だ。

「あいつ……いいね……」

戦つてみたい。思わずその欲望に支配されたのがいけなかつた。

「あつぶね！」

欲望と共に漏れてしまつた氣配を感じたのか、一瞬にサイードのいる茂みに向けて黒刃くめからの攻撃が飛んでくる。

それ自体は伊達に経験値を上げたわけではないので、少し身体をずらすだけで回避できた。しかし、騎士だけに集中すればいいものを、黒刃くめはサイードへの攻撃の手を休める事が無く、暗器だろうか、針のようなものが耐えず茂みに投げられ続けた。

せりには、騎士までもが警戒して殺氣を飛ばしていく。止む事の無い地味な攻撃と殺氣に、サイードのほうが我慢しきれない。

「せつせと決着つけろー。それと、針づぜえー。」

やつてしまつた、とすぐさま後悔するサイードだが後の祭り。懷に忍ばせていく小剣を黒刃くめの一人に投げ、大声と共に立ち上がつてしまつた。

その小剣は見事心臓へと命中し、その場の視線が全てサイードに集中してくる。

ひつてしまつては仕方がない。サイードは田の前の人間全と自分、精靈に苛立ちながら、ガサガサと茂みから出でていった。

「ヤ！」の騎士、加勢する

突然の乱入者、しかも騎士からすれば敵と同じような格好をした者からの言葉に、混乱する。素直に助かつたと思つ者がいたら、ただのお氣樂者だつ。

期待されるとは思つていのサイードは、答えを聞かずに行動した。大分、地味な攻撃に苛々していたのだろう。

黒尽くめの人数は、サイードが最初に見た時より僅かに減つて8人。

「これ、返すぞ」

目の前にいた一人に迫りながら、手には先ほどサイードを苛々させた針が5本ずつ握られていた。一度体の前で腕を交差させ、すぐさま放たれたそれは、弧を描いて黒尽くめへと向かう。

素早い攻撃を避けきれなかつた3人が、まず倒れた。その全て、頭に針が刺さつている。

啞然とする騎士と、慌てる黒尽くめ。それを気にすることなく、サイードは迫つていた一人の心臓に小剣を突き刺し、背後から攻撃を仕掛けてきた者を剣で縦に一閃。

一度、リズミカルにバックし距離を取り、背後に回り込んだ者は即座に小剣を投げ、前から果敢に攻めてきた者は足でこめかみを蹴つて怯ませてから同様に殺した。

そして、最後の一人がサイードの頭上から剣を振り上げてきたのを片手のみで剣で受け止め、残していた小剣をこめかみにめりこませる。

あつという間だった。

「こんな奴等に手こずつっていたのか？」

最後の一人の身体が崩れ、小剣が抜け血が噴出す。それを避けながら拍子抜けしたように、騎士へと振り返った。

騎士の誰もが、言葉も出ない様子で固まっている。

そんな空氣でもマイペースでいるサイードは、手に持ったままの小剣の先が欠けていることに気付いて文句を零していた。

カラーン。

使い物にならなくなつたそれをあつさりと地面に捨て去れば、静かなこの場では必要以上に音が響く。びくりと屈強な騎士が大げさに反応する様子に、サイードは間抜けだと晒つた。

「礼ぐらい、言って欲しいもんだがな」

吹き出すことは必死に抑えたが、喉の奥でクツクツと笑い声が漏れている。それでも反応を返さない騎士に肩を竦め、サイードは何を思ったか、今し方自分が殺した者を漁り始めた。

回収した小剣は物の見事に全て欠けてしまつていて、代わりにだろつか、死体が持つ暗器をごつそりと拝借している。時折、使えなさそうな物を放り投げ、好みの武器があれば機嫌を良くし。

ドラゴン等と戦っている間に、血の臭いにも肉を断つ感触にも慣れてしまつたのだろうか。

リルの時のように、血に酔う素振りが一切無い。

サイードの行動は、騎士が倒していく分もちやつかりと漁り終わるまで止まらなかつた。

その背後では騎士の中でただ一人、優男だけが剣を構えて警戒していた。

絶望を撒ぐか、招ぐか

「おっし。……礼は言われても、剣を向けられる覚えが無いんだが？」

思う存分死体を漁り、予想以上の収穫に大満足なサイードが振り返った時、そこには固まっていたはずの騎士達が向ける剣の輝きがあつた。

その目には、感謝の念など毛頭無い。

「何者だ？」

代表してサイードが興味を持った、絹の様に細く滑らかな襟足が少し長いクリーム色の髪をし、ピーコックブルーの瞳の色青緑した男が言葉をかける。物腰の柔らかそうな雰囲気が、世の女性達を魅了していそうだ。

だが、姿に似合わない低い冷たい声がその場に響く。

「別に、何者でも構わないだろ？助かったんだから良いじゃないか」

ただし、当然サイードにその魅力は通じない。

相手側からしても、怪しまない理由が無いだろう。躊躇せず軽々と人を殺す精神と技術をとっても、格好を見てもそうだ。

「やつはいかない」

お堅いねえ、とぼやいたサイードは、睨んでくる優男を意味も無く見つめた。

暫く、無言の状態が続いたが、変化は無いと語ったのか、仕方なもやうにおどける感じで両手を上にあげたサイードは、剣を指輪へと戻した。

その光景に、騎士達が僅かに驚きで体を揺らす。

「ただの、ふらふらしている旅人さ。怪しい者ではないよ」

「どう見ても怪しいだろ」

「あー、やっぱり?」

だよねえ、と分かつていて聞いてくるサイードに、優男はなんだこの男はと思つていいのだろうか。内面を欠片も掘ませない、何を考えてるのか察する要素すら見せない。戦いというものは、相手を見極めてこそである。動きを予測し、考えを察知し、どちらがより上に立つか。

ただ、それはそこに誇りがあればこそである。

「こつちは、戦う気が無いんだがな」

優男に映るサイードは、そこにいるのにいないと思わせる不可思議さがあった。まず、口調が定まらない。砕けていると思えば柔らかくなり、しかしぬには冷たくもある。

思わず、人間かと問いたくなつた。そんな時だった。

「ん?」

「お待かれていい!」

優男の直ぐ脇の茂みから、まず騎士が一人飛び出してくる。かなり慌てた様子で何かを必死に押し止めようとしていたが、次には暗い森に似つかわしく無い鮮やかな塊が飛び出してきた。

「皆、剣を納めなさい!」

サイーダと騎士達の間に転がった塊。それは、この場に居るには相応しく無い少女だった。

成る程、先ほど黒死くめに騎士が圧されていたのは、この少女を守りながら戦っていたからなのだろう。

気持ち程度に動きやすい作りにされた、小奇麗なドレスに身を包んだ10歳程度の少女は、透き通る緑の髪と瞳をした風の純血種だった。

純血種、と言えばティルダを思い出す。彼は陽の純血種であり、そして王子でもあったのは記憶に新しいだろう。そうすれば、必ずと少女にも抱くものがある。

「姫様! お下がりください!」

サイーダは、やつぱりと眉を顰めた。純血種は、1滴も別の種族の血が入っていない者。しかし、人間が存在し始めてからのアピスの歴史は、そう浅くは無い。

その中で純血でいるには、只の人であれば難しいことであると想像に難く無いはずだ。となると、その身が持つ地位は、精石を重んじる人間の中では高いものになっていく。

めんどくさいことになりそうだ、と出てきたフレーズにサイードは感じた。

その間に、優雅な仕草で立ち上がったお姫様らしい少女は、周りの言葉を無視してサイードの目をじっと見つめる。この世界で、ゴーレドの色は珍しくないはずなのだが、彼女は何を考えているのだろうか。

「悪いが、俺はこれで失礼をせてもう！」

「お待ちなさい！」

騎士がサイードにかまけてる暇が無くなつたことを良い事に、視線を気にせず早々と背中を向けると、その背に透き通つた高い声が投げられた。しかし、サイードは、お姫様を無視すると決めた様子。振り返る素振りもを見せない。

「私を無視するなど、なんと無礼な！」

お姫様はその行動が癪に障つたのか、さらにもう一歩。甲高い声が頭に響き、サイードは深い溜め息を吐いて振り返つた。

自分の声だとお姫様は勘違いをするが、サイードの目はその小さな体の奥で警戒を続ける優男に向けられている。

「行つても構わないだろ？」

「待ちなさいと言つていままでしょー？」

「……悪いが、姫様がこう仰つておられる

まさかの展開。

優男であれば、安全を最優先してお姫様の命令を無視するだろうと踏んでいたサイードにとって、今の言葉は予想外であった。

思わず出た舌打ちは、布に阻まれ届かない。

「なら、勝手に行かせてもらいつ

優男に確認を取ったのは、出来る限り戦いを避ける為だった。背中を向けて黙つて歩き始めれば、そこに攻撃が仕掛けられるとも限らない。

だから、承諾を求めていたわけでは無かつたのだが、理不尽に自由を拘束されるのが我慢ならなかつたのだろう。

その場から去る際に死体の横を通りた時、突然動くはずの無い黒死ぐめの内の1体が飛んだ。

「ひつー！」

それは近くの木に強か打ち付けられ、再び地に横たわる。お姫様が驚愕と怯えに小さく悲鳴を上げ、騎士達が剣を構え直す中、サイードはもう一度小さく舌打ちをしていた。

あまりに苛立つた時、何かにその気持ちをぶつけたいと思う感情自体はよく分かるものであるが、今のはあまりに無情で非情すぎた。何の罪も無い、とはお世辞にも言えないが、いくら殺人を生業にしてきたような者であつても、死を迎えたのであれば失われた生に対する敬意を払うべきだ。自分が断ち切つたのであれば尚更。

案の定、騎士達はその行動に嫌悪を抱き、怒りに震えた。

「あの者を捕えよ！」

そうして、誰もがサイードが早く立ち去つてくれるよう願った中、空気を読まない声が命令した。

条件反射というべきか、忠誠を誓つた相手の命令に忠実であれと染み込まれた騎士の身体は、考える前に行動する。囮まってしまったサイードの近くには、さらに大きく膨らんだ苛立ちをぶつけられるものは無い。

「ヒメサマ含め、全員アレと同じになりたいか？」

低く、ただ低く漏らされた言葉は、狼の唸りにも勝るものだつた。サイードといつ名の黒狼は、先ほど自分が蹴り飛ばした抜けた死体を視線で示しながら警告を発する。ヒメサマといつ単語には、思いきり馬鹿にした雰囲気が込められていた。

「忠実なのも結構だが、守りたいのであれば通せ」

ただの護衛なのか、言葉通り主であるのか、細かいことはどうでも良い。

大事なのは、このままではどちらにせよ全員の命が危ぶまれるとのこと。サイードからすれば、騎士達との戦いは極力避けたくはあるが、だからといって別段恐れることでは無いのだ。どうせ、後々追われる身であり、姫の一人や二人殺したところでの精石の破壊に比べればその罪は小さい。

「ヒメサマも、我儘が通じる相手を見極めるぐらいは出来るようになつた方が良い。これ以上は、痛い目を見ることになるぞ」

金の瞳は、手加減なく10歳の少女に殺氣を向けた。お姫様は今度は言葉も出せず固まり、その場に緊張が走る。

誰もが顔を青くさせ、サイードの一挙一動を見逃すまいとその体に視線を縫い付けた。

しかし、お姫様への睨みは、優男が体で防いだことによって無くなる。すると今度は、瞳がスッと細まり、殺氣とは違うものが彼に注がれた。

サイードは未だ、戦いたいという願望を持つていたようだ。

最早それは、戦闘狂バトルジャンキーといえるのではないだろうか。精靈王の力を授かることには抵抗を示していたはずなのに、本当に一体何を考えているのだろう。

「……しかし、まあ」

そこでふと、サイードの顔色が変わった。

視線をこの場の誰でも無い森の奥に突然移し、今度は楽しそうに笑う。いや、実際ははしゃいだのだろう。

「流石にその歳で殺されるのは哀れではあるな」

心にも無い事を呟き、理由を作り、サイードは再び剣を出現させて僅かに身体をずらした。

「まだ、終わってなかつたみたいだぞ」

「がつー?」

その数秒後、突然サイードを囲んでいた騎士の一人が首から血を吹き出しながら倒れた。

「姫様を！」

サイードの仕業かと疑い、攻撃を開始しようとする騎士。しかし、その視線が生い茂る木々の奥に向けられていることに気付いた優男が、お姫様の警護を指示しながら制止をかける。そして、サイードと同じように周囲に神経を張り巡らせた。

「20人ぐらいか？ 向こうは躍起だねえ」

今度は、言葉と共に剣を振れば金属音を響かせながら何かが弾かれる。それは、先程の黒尽くめ達が使用していた暗器に似た刃物。それを見たところでやつと、敵がサイードの他に居ると騎士達は察した。

「と、こいつことで。悪いが俺は関係無いから、立ち去らせてもらひつ」

「……は？ ふざけるな！ 敵で無いならその腕だ、助けようとは思わないのか！？」

誰がどう見ても20人を相手取るのは、今の騎士側には荷が重い。それが分かりながらもあっさりとそう告げるサイードに、優男は憤りを顕わにした。しかし、サイードの反応は、呆れたとも身体全体で冗談じゃないと言つている様にも思える。

「警戒されてた相手を助けようと思つ程、人間できてないんでね」

「人の死を何だと思つてる！」

「レ、レイス！」

この間にも、騎士は次々と地に伏していった。最早その数は、先程の戦いも含め出会った当初の半分以下になっている。中には、サイードが弾いた刃によつてそうなつた者もいる始末だ。それを怒つたところで、不慮の事故だとそこに居るのが悪いとサイードは言うのだろう。

それでもどうにかサイードを引き込もうとする優男の耳に、綺麗なドレスを血に染めたお姫様の切羽詰つた声が響いた。

目には涙を浮かべ、縋る視線をサイードにも向ける。それでも何も感じないのか、気付けばサイードは徐々にだが騎士達との距離を広げていた。

「どれだけ薄情なのだ！」

「人が人にもたらす死程、無意味など無い。そもそも、手を貸す義理がないだろ」

刃が飛んでこないエリアまで遠ざかり剣を消したその瞳が、今の一言葉が本心だと物語つていた。人が人にもたらす死。お互いの生への価値観の違い。

“ルシエ”の思う生とは、それこそ人にとっては極論にも近く、とても動物的なものだった。

種の存続。その為の生。その上でその役割を放棄したと、自らをイレギュラーに定める。

人はそれぞれに価値を求める、意味を探り、そうして生きているだろうが、ルシエにはそれが無かつた。

故に、人が人にもたらす死に対しても無感情となる。本来生物にとって同じ種は番候補、ライバル、仲間、同族であり、他の種は糧か障害、自己の存続の為の共存対象でしか無いだろう。本能で生きているのだ。

その全てに於いて、敵は敵でありながら敵で無い。

同種であつても、なわばり争いでの死闘の先は糧であるし、弱肉強食の世界では糧にならないよう生に工夫する。そこに、生への執着があるかどうかは定かでは無いが、人間のように生に繋がらない死をもたらす争いが果たしてあるのだろうか。

自己の矜持や理念、正義を掲げたところでルシエにはただの言い訳にしかならない。

「薄情は、俺にとつて褒め言葉だね」

手をひらひらと振りながら背を向けて立ち去る姿は、かなり浮いていた。痛みに呻き苦しむ者の横を見ることもなく歩く心は、騎士達には悪魔に感じる。

絶望を招く点では、否定が出来ないだろう。

「……ん？」

しかし、突然その足を阻む何かがあつた。

サイードは気付いていなかつたのか、不思議そうに視線を下に向ける。そこには誰かの手が足首を握る光景あり、先を辿れば口から

血を吐き虫の息な騎士の姿があった。その者は、気迫に満ちた瞳でサイードを見上げていた。

「どうした？」

「この妨害に苛立ち、機嫌を損ねるかと思つたサイードだったが、一体何をしようというのだろう。その騎士に対し穏やかに笑いかけ、氣味が悪い程緩やかな声で問いつつしゃがみ込む。ただ、そうしながらもそつと騎士の持つ剣を奪つているところを見るに、碌な事では無いだろう。

サイードの服に、血が染みていた。

「た、たの、むつ。姫様を、たす……っ！」

忠実な騎士の死に際の願い。彼は、その言葉を言い終わる事が出来なかつた。

「お断りだ」

勇敢な騎士は、全てを言い終わる前に事切れた。サイードがその背、丁度心臓の真上の位置に、奪つた剣を落としたせいで。

「あ、貴様あああああああああつーー！」

呆然とする仲間達。その残虐な所業に我を忘れるレイスと呼ばれた優男。

レイスは、我を忘れてサイードへと迫る。

しかしその瞬間、大事なお姫様が無防備となつてしまつ。それを、姿を隠した見え無い敵が見逃すわけがない。

瞬間、お姫様の可愛い心臓に刃が迫つた。

舞台がなければ役者はいない

「大事なんだろ？」「

「何なんだ、お前は……」

くつくつと、至極楽しそうな笑い声が響いた。

お姫様に刃が迫ったのに気付いた瞬間レイスがハッとしたが、その時にはもう手遅れで。しかし、それが彼女を捉えることは無かつた。

サイードが、寸でのところで死体から奪っていた針の暗器で弾いたからだ。

「気が変わった、助けてやる。ただし、ヒメサマだけだ」

「どうしても！ もう助かる可能性の無い者を、わざわざ手にかける必要はないだろう！」

ホツとしたのも束の間、レイスは先程の件の怒りが治まっておらず蒸し返す。

サイードの助ける発言を得たからとしても、短絡にも程があった。それぐらい、許せない行いだという事でもあるのだが。

それにしても、何故サイードは急に態度を変えたのか。気分屋だからといわれても納得できるのが悲しいが、今回はそれが理由では無い。

お姫様が死の危険に晒された瞬間、精霊が大きく騒いだせいでサイードはそうせざるを得なかつたのだ。どうやら、精霊はお姫様を死なせたくないらしい。それが、この状況に陥らせた最初の騒ぎの原因にも繋がるのだが、さらに精霊は言つたのだ。サイードの為にも、と。

お姫様が風の精霊と契約していることは、気配で気付いていた。なので、それをその契約精霊が言つたのであれば、サイードは無碍にしただろう。だが、大きく騒いだというのはどどのつまり、無関係な精霊までもがその感情を抱き訴えたということ。それは、普通であればあり得ない現象であった。

精霊が人を愛したのは昔の話。今や、個人個人を好む事はあれど、人間という種族に対して精霊は何も抱いてはいない。むしろ恨みすら抱き、王の解放を望んでいる。

サイードを説き伏せる為にその利益を仄めかしたのだろうが、漠然でも精霊の感情が伝わるので純粋な助けたい想いも感じ、少女が精霊に愛される者なのだと察した。

この世界において精霊は絶対。人間にとつても精霊は必要不可欠。そして、それに愛される者とくれば、ある言葉が思い浮かんだ。それこそ、ファンタジックで貴重な存在。

面白くなつてきたと再度笑いながら、サイードはレイスの訴えに答える為に彼を見据えた。

「死を感じながら、怯えながら死ぬほうが良いか？ 痛みに苦しんだ末に死んだほうが、良いか？」

助かる可能性が無いと言ったのは、お前だろ。正論を突きつけるかのように言い放つたサイードだが、その答えを持つ者はいない。なにせ、どっちにしろ感情論なのだから。

ただ、サイードは感情だけでそうしているわけではない。

血は、大地を汚してしまう。血そのものでは無く、そこから伝わる未練や憎悪、そういうものが大地を汚してしまい、そしてそれが精霊を穢す原因になってしまつ。

だからサイードが人を殺す際は、心臓や頭、そういう箇所を狙つて可能な限り即死になるようにしているのだ。

「それは……」

レイスは反論したかった。しかし、言い返せない。生への冒瀉ともされるし、苦しみからの解放ともとれる。納得は出来ないが、サイードの絶対の自信を持った傲慢な態度に対抗できる程、心にも状況にも余裕は無かつた。

「別に、同意は求めない。ただ、これが俺の考え方で、それをどうかく言われたって煩わしいだけなんだよ。で、助けは必要か？」

それに対し、レイスはグッと唇を噛み頷いた。恐らく、考え方と行動を受け入れは出来ないが、助けてもらわなければ乗り切れないと判断したのだろう。

血のプライドより、騎士を取つた。

「なら、ヒメサマを抱えて向こうに走れ。真っ直ぐだ。俺が全員食い止めてやる」

「仲間を！」

「言つただろ？ 助けるのはヒメサマだけだ」

レイスの背後を指し示し促したサイードは、まだ何かを言いかけ
る彼を無視して反対側、敵に向けて走り出した。

視界の隅で、レイスがお姫様を抱き残つた仲間に指示をだすのが
映る。

その間誤付く様子に苛立ちながら、茂みへと入つた。

「さて、人間相手に陽の力を使う良い機会だ」

独り言はさやかな警告。力を引き出していけば、布の下で髪が
伸びる感覚がした。

「振り返らずに行け！」

走り出したレイス達に叫んだのは、恐らく敵の意識を自分に集中
させるためだろう。

数を増して飛んでくる刃を剣で弾きながら、サイードはタイミング
を見計らつた。その身体の周囲には、1つ2つと火の矢が形成され
ている。揺らめくそれは、相当の熱を持つていた。

敵が全員射程圏内に入ると、矢がその数に達するのはほぼ同時。

「悪しき魂を、勇ましき火で滅せ！」

契約の詩と共に矢が放たれ、森はただ静寂に包まれた。

「よし、大成功」

その炎は、断末魔すら許さない業火だつた。大きさは肘までの長さぐらいの小さなものが、そこには凝縮された濃い魔力が込められ、まさしく王の力。

僅かに肉の焼ける臭いが風に乗つて森に走り、空氣となつて消えていった。

ここにきて、ドラゴンがどれだけ有難いものだったのかサイードは実感する。

死が近くなるほど、培われる力が洗練されるのだろうか。サイードが戦闘を求めるのは、そう思つたからなのかもしれない。代償は命、得るのは経験。もしかしたら、"ルシエ"には理由が必要なのかもしれない。言い訳ともいえるが、始めに遡つて考えてみれば、いつもいつも物事に理由を付けているのでは。

初めて、ルシエが人間だと思えた。

「さて、漁るか」

性質の悪い追い剥ぎだが、わざわざ茂みに入つて行つたサイードは、誰もいないのにまるで追い払つようにひらりと一度手を振つた。

「我ながら、なんて悪役」

何故かくつくつと笑い、視界に入った黒焦げで原型を留めない程焼けてしまつた死体に、再度違つた笑いを零す。

「だけど、まだまだ抜けてるんだよな」

やり過ぎた攻撃が敵の所持品まで壊し、自分に呆れながらもそこまで残念がつてはいないのだろう。すぐに気持ちを切り替えたサイードは、何故かどさりと荷物を下ろした。

そして、徐にマントを外し服を脱ぎ、森の中で死体を前に全裸になる。

誰もいらない場所で羞恥などいらないと荷物を漁り、必要な物をどんどん取り出していく。まず足首までの地味なスカートを着て、サラシの中に詰め物をする。その際、何とも言えない顔をしていたのは触れてはいけないだろう。そして、胸元に黒いリボンがあしらわれた地球のブラウスよりは生地が厚く荒い触りのトップスを着た。さらに、用意していたこの世界には存在しないだろうカラコンを装着し、最後に肩にぎりぎり触れるぐらいの長さのカツラを被る。

すると出来上がるのが、地の純血種とは違った茶色の髪に赤交じりの薄茶色の瞳をした、どこにでもいそうで、それでいて少し気の強そうな女だつた。

何故だろう、男装している際には日本人特有の童顔さは欠片も無く、むしろ実際の歳より上に見える美青年になるといつて、女になると確かに可愛くはあるが普通の印象を抱いてしまう。

「えーっと、なんだつけ。……そろそろ、リサーナー！」

本当に不思議だ。声も心なしか高く聞こえる。今の“リサーナ”を見たところで、誰も殺しの技を持ち精石の破壊を目的としている者だとは思つまい。

何度か咳払いをし、自分の姿を見る範囲で観察して頭の中で作り上げていた人格を復習したりサーナは、軽やかな身のこなしで荷

物を纏め死体を飛び越えて、可愛らしい笑顔でレイス達に指示した方向を見つめた。

「『めんね、お姫様。私、面倒事は嫌いなんだよね。だから、後は自力で頑張って！』

そして、まるで悪戯が大成功したようにカラカラと笑い声を上げたりサーナは、示した方向とは真逆の方向へと歩き出した。

精霊がいうに、目的地は近いらしい。何故、お姫様という身分の者が無用心にこの森に来ていたのか謎は残るが、それは知る必要の無い事。むしろ、知つたら駄目なのだろう。そうしたら最後、言葉どおり面倒事に巻き込まれるのは目に見えてる。

鬱蒼とした森に消えていった後ろ姿にサイードの影は微塵も無く、その切り替えの良すぎる様は役者という一言で片付けることは出来なかつた。

鬼事か、隠れ鬼か

「リサーナ、これ頼んだよ！」

「はーい」

「リサーナ！」

「リサーナちゃん！」

「はーはーいっ！」

風の国の首都ウェントウスの一角にある店、「光風の便り亭」は連日活気に満ち溢れていた。こじんまりとしたその食堂は、旬のものを使った家庭的な食事を売りとしていて、首都の知る人ぞ知る隠れた名店である。

しかし、最近では、普段の何倍もの人間が訪れる人気店になつていた。十数席しかない店内は連日満員となり、客の足が中々途絶えず、店のスタッフにとつてはさながら戦場。

テーブルの間を縦横無尽に走り回るのがたつた一人となれば、その苦労はかなりのものだろう。

客からも店の人間からもしきりに名を呼ばれる少女は、すばらしこ働きっぷりを見せていた。無駄に絡んでくる客に対しても機嫌を

損ねないよう上手くあしらい、素早く注文を聞き、手には何枚もの皿を乗せて料理を運ぶ。

終始笑顔で働くその健気さと見た目の愛くるしさが、確実に客の胸を掴み、女将が渾身の力を込めて作り上げた料理が胃を掴む。素晴らしき連携プレーである。

今までも十分に経営できていたこの店が急激に繁盛し始めたのは、その少女が店で働くようになってからだった。

茶色の肩につくぐらういの髪に、赤が混じった大きな薄茶色の瞳。名前はリサーナ・ルシエである。

なぜこんなことになつているのか。それは、10日前に遡る。

首都が近いと教えられリサーナの姿になつたのは良かつたのだが、人間と精霊の感覚の違いが誤算となり、女の格好で深い森を歩くことになつてしまつたのが全ての始まり。今思えば、面倒であれもう一度サイードになつていればよかつたのだが、やつと首都に着いた時には、リサーナは強姦を受けたかのようなボロボロな姿になつていた。

当然、首都へ入る際に通らなければいけない関所で兵に止められ、事情の説明を求められた。

そして、さてどうしよう、と苦笑いになりながら必死に誤魔化そうとしていたところに、偶然近くに居合わせた光風の便り亭の女将が乱入してきたのだ。

女将は、まずは身なりをどうにかしてあげるのが先決だろう、と兵を怒鳴り付け、可哀想にその兵は自分の服を剥ぎ取られリサーナに献上するしかなかつた。そうしてそのまま、どうしてカリサーナ

を気に入つた女将によつて、半ば強制的に店で働くことになつたと
いうわけだ。

その豪快さには、リサーナも為す術が無かつたのだろう。気付いた時には、男に襲われたショックで記憶を無くし、それでも気丈に振舞う健気な少女というおかしな設定が出来上がりてしまい、最早修正不可能となつていた。

またもや、思わず隠れ蓑を手に入れられたと手放しで喜べればそれでもよかつたのかかもしれない。
しかしさすがに、毎日毎日働きづめではそもそも言つていられないだろう。

「いやー、リサーナが来てから、店が大忙しで嬉しいねえ！」

陽の国と同じようにいくとは思つてはいなかつたが、この10日の成果がこの通り、店の看板娘として売り上げに大貢献してゐるだけとなれば、本人は焦り以前に呆れを感じる。
しかし、女将は裏のまったくない純粹な善意でそつしているのだから、責めることも出来ない。

リサーナは、笑顔の仮面を貼り付けたまま大きく溜め息を吐いた。

何が楽しくて、こんなにせつせと働かなければならんのだ。それには、そんな気持ちが籠つている。

いい加減どうにか手を考えなればとは思うのだが、身動きできない今の状況ではどうしようも無いのかもしれない。勿論、何もないわけではなかつた。精石の場所は当然分かつてゐるのだ。

ここに来てから3日経った深夜、ルシエは城に偵察も兼ねて侵入を試みていた。

風の精石は、王の証として代々受け継がれている。しかし、最早崩壊寸前であつた陽の国とは違い、風の国は他国との国交も盛んで色々な出身者を受け入れ、制度も設備も最大で素晴らしい整つたところだ。しかも、大きな力を持つということは、その戦力もかなりのレベルとなつてくる。

騎士は当然の事、様々な属性の精霊との契約者によつて構成された魔術師団を有する風の国は守りも強固であった。

城の敷地に侵入した途端、何かしらの探知に引っかかってしまつたルシエは、四方から魔法がビュンビュンと飛んできて危うく死にかけた。

慌てて契約している精霊達に呼びかけなれば、火だるまになり氷付けになり、何が死因か分からぬ状態になつただろう。

ならば、リサーナでいるのを止めて、再びサイードになつて行動すればいいのではと思うかもしれない。当然、本人もそれは考えた。しかしそれも、今のルシエには難しいことであつた。

何故なら、その手はもつと前、女将に引きずられて店で働くことになつてしまつた初日に封じられてしまつたからだ。

その日はまだ、今とは違つてちらほらと客がやつてくるだけのこれまでの光風の便り亭だつた。昼も過ぎ、客足が途絶えていた店では、リサーナが奥で遅めの昼食を取つてゐる最中で、女将は夜に向けての仕込みに精を出していた。

そんな時、入り口に備えられているベルが店内に響く。

「いらっしゃい！」

店にはクローズの看板が出ていたはずなのだが、女将は別段気を害することもなく大きな声で相手を迎えていた。

それが耳に入りながらも、リサーナはもぐもぐと口の中のトルッテと呼ばれる野菜をパンで挟んだサンドイッチもどきを咀嚼する。よくよく考えれば、アピスに来てまともな食事を取ることが今まで無く、昨晩から地味に感動したりしていた。

遠くでは来訪者と女将が何か会話をしいたが、業者か何かだと思つて気にしない。

「リサーナ！ リサーナ、出いで！」

しかし、突然の呼び出し。仕方なく食べかけのトルッテを置き、首を傾げながらパタパタと走つていく姿は本当に普通の少女だつた。

そんなりサーナだつたが、謎の来訪者を見た途端、ギクリと顔を強張らせて固まる。その視線の先にいたのは、風の騎士だつた。

「君が女将の言つていたリサーナか」

しかも、見覚えがありすぎる者である。綿の様に細く滑らかな襟足が少し長いクリーム色の髪をし、^{青緑}ピーコックブルーの瞳の色をした、そう、森で出会いお姫様の護衛をしていたレイスがそこにいた。

「先程の話では、大変な目に合つたそつだな」

リサーナの驚きと焦りは相当なものであった。しかし、表面にはおぐびにも出さず、驚く程素早く頭を回転させて自分に出来る最上級の笑顔を浮かべる。

「初めてして。新しくここでお世話になつていい、リサーナと申します。大変な目に合つたと言つても、私には記憶がありませんので。それよりも、こんな誰とも知れない私を拾ってくれた女将さんに感謝しています。きっと、私以上に幸せ者などいないでしょう」

「……そうか。一応、こちらでも君の身元を調べておいつ。親御さんが心配していたら大変だ」

どうやら、レイスが怪しんではないようだ。役者顔負けの演技以前に、サイードヒリサーナの共通点が何も無いというのが大きいのだろう。

ただし、ただの娘にしては言葉遣いや動きが良すぎた為、別の意味で興味を引かれてしまった。

「あつがとうござります」

「一言言わせてもらひうど、記憶が無くても衛兵に相談するべきだ。君の為でもあるし、他に被害がないようにも。私達は頼りないか?」

困ったように、諭すよりそつとレイスは騎士であった。リサーナとしても、女将の迫力に負けてここにいるのだが、ここでそれを言つたところでどうにもならない。素直に謝罪を述べ、記憶が無くて状況を掴むのに精一杯だったと言つただけで留めた。

「それで、あの。どうして騎士様がこちらに？　私の件ででしたら、お話出来る事が何も無いのですが」

存外に早く出ていけ、という気持ちを込めてそう言えば、どうやらレイスは元々別件で店を訪れていたらしい。それを伝えようとしたところ、女将にリサーナの話を持ちだされたそうだ。

女将め、と思つてしまつてもまあ、立場的に仕方ない。善意とお節介の境界線というのは、中々に曖昧だった。

「こここの女将は、なんというか、強いな。こちらの話は仕込みがあるからと、君に伝えるよつこと言われてしまつたんだよ」

「ふふ、力は男性に適いませんが、内面は女性の方が何倍も強いですからね」

クスクスと悪意の無さそうな笑みの下、耳が痛そうなレイスにしてやつたりと笑うのは良いのだが、リサーナの余裕はそう長くは持たなかつた。

レイスが元々の用件を伝える為、懐から一枚の紙を取り出しさしてきて受け取つた瞬間、気付かない程度の時間ではあつたがその目が大きく見開かれる。

「それを用立つ所に張つておいてくれないか?」

「……なんですか、これ」

レイスを見た時とは比べられないほどの冷や汗が背を流れ、啞然としかけながら精一杯問い合わせる姿は、相当な一大事だったのだろう。

レイスはここに来るまでも何度も何度か訝しまれたのか、少し居心地が悪そうにしているだけだ。

渡された紙は、人探しの張り紙であった。ただし、一見手配書にも思える様なものだつたが。

「そこに書かれている者に少し用があつてな。旅人らしいのだが、この街に立寄つてはいるはずなんだ。もし、客の中で見かけたりそういう話を聞いた者がいたら、君でも構わない。詰所に知らせて欲しい」

「分かりました。女将さんにも伝えておきますね」

無意識にしつかりと返事をし、対応したリサーナは最早プロだろう。

私用だから、普通のものと違つて強制は出来ないけれど。そう言って、よろしく頼むとレイスは店を出て行つた。

リサーナの件でも別の騎士にもう一度事情説明を求めて来るかもしれない、とも言つていたが、今は張り紙に釘付けで返事が出来たか自分ではあやふやである。

最早氣を付ける必要のなくなり、紙を持つ手は小刻みに震えてい

た。

「あんの、クソ騎士がつ

グシャリと苛立ちに潰された紙には、どんな絵描きに頼んだのだと文句を言いに行きたいぐらいの粗末な似顔絵があり、その下にはその者の特徴が可能な限り書かれていた。

『黒のマントに同色の布で顔を隠した、ゴールドの瞳の男の旅人。剣術に長けており、身体は比較的細身で年齢は若め。人との関りをあまり好まない様子。見かけた、若しくはそういった男の話を聞いた者は、ウイーネ騎士団もしくは城門番に知らせたし。 ウィーネ騎士団団長レイス・アレフィィセー・アランドル』

つつこみ所満載の紙であるが、とりあえずまず言えるのは、探し人はどう考へてもサイードであった。

「見事に手を潰してくれやがった！」

美味しい食事を堪能し、即刻この店を立ち去りうつと考えていたりサーナにとつて、それは大きな痛手であった。

レイスの去つた扉を睨み付けた目は、か弱い少女からかけ離れた獰猛な肉食獣。一瞬で治めはしたが、リサーナはこの店を拠点にすることを余儀なくされ、安易な行動を取れなくなる。

何せ、ウイーネ騎士団とは、王直属の近衛も勤めるエリート集団である。

同国他の騎士からも一目を置かれ、他国からは恐れられる。しかも、あのレイスが団長とくれば警戒せざるをえない。

そんな騎士団の長ともなれば、真つ当な者の中では確實に最強か

それに近い腕なのだ。

ただ、そうなればいくつか疑問が出てくるのだが、それはバレなければなんとなるだろう。……バレなければだが。

「リサーナ？ リサーナ！ 騎士様のお相手が済んだのであれば、早くご飯を食べ終えちまいな！」

「……はーい」

何とか怒りを静めたリサーナであったが、その代わり頭の中は様々な事が巡っていた。

そうして、結局のところ、うまい策が浮かばずに焦りだけを募らせる日々を送るのだ。

「リサーナ、か。おい、今の少女について可能な限り調べておけ」

「はっ！」

影で、避けようの無い面倒毎に巻き込まれながら。

レイスは優男ではあるが、綻びだらけの設定と細かな観察力、やはりそこは騎士団長であった。

一人しかいない役者の舞台

焦りだけを募らせて働き続けていたリサーナ。

夜も更け、光風の便り亭は女将からその息子にバトンタッチし酒場へと雰囲気を変え、男達で賑わっている。

夜の料理も仕込みは女将なので、酒よし料理よしの店はやはり人気だ。ただ、突然現れた看板娘は、流石に1日働き続けるのは無理なので、夕食も兼ねてテーブルでまつたりとしている。

時たまそこに酔っ払いが絡もうとしてくるが、この10日間で酒場には、食事をしているリサーナには話し掛けないという不思議なルールが出来ており、それは別の客が嗜めて防いでいた。つまりは、抜け駆け防止策といふところか。

身なりは全員が美人と評価するわけではないが、可愛らしくて独り身とくれば、放置されるわけがないというのが世の常である。

そういうたわけで、喧騒の中静かに食事をするリサーナであったが、内心では爪を噛んで苛立ちを抑えたい衝動に駆られていた。

昼間の焦燥が引き金となつたのか、どうやら我慢の限界が来ている様子だ。たつた3日で一つ目の精石を壊した身としては、これ以上は陽の精石の喪失が公に出るまでの猶予も消費され続けている上、10日も収穫無しで自分自身が許せないのだろう。

ただ、言わせてもらえば異世界に来てまだ3週間も経っていない

のである。しかしまあ、ルシエからしてみれば、地球を消させない
為に来ているわけで、その現状を知る術が無い分募るものもあるの
かもしれない。

それに、苛立ちの理由はまだあった。レイスと一方的な再会をして2日程経った頃から、どうにも監視されている気配がしていたのだ。バレている可能性というか、何かを疑われている可能性が考えられ、落ち着いてもいられない。

そういうたストレスの限界が今日だったということだ。

最早、顔を晒すのを躊躇つている場合ではないのかも。リサーナは密かにそう唇を噛み、勝手に出そになる殺氣を全力で鎮めた。

「マスター、『馳走様』

「おひ。今日は直ぐに部屋に戻るか?」

食べ終えた食器を厨房へと片付け、息子へと声を掛ける。豪快な女将と違い、とても柔らかく静かな印象を与える息子に、腹の中で女将にはつらしさを吸い取られたんじゃなかろうかと思ってしまう。ちなみにその女将だが、元気の秘訣は早寝早起きらしく、食堂の営業が終わると早々に寝てしまっている。

息子の問いかけに首を振つたリサーナは、今日も少しお密さんと話をしていくよと、再びテーブルへと戻つた。

それを今か今かと待つていた飢えた狼共は、我先にリサーナを呼ぼうと躍起である。

何故、面倒が嫌いなルシエがそんな事を自らやつてゐるのか。そ

れは、何時の時代も酒場は情報の宝庫だからである。

進展は無くとも、そういうことだけはしていたのだ。

客の輪に入つていくりサーナを温かく見つめる息子は、よもやその少女がそういった打算を企てているとは思つまい。

ちなみに、これまで得た情報の中には、ティルダのその後も含まっていた。

彼はどうやら、リーダーとの戦いに打ち勝つたらしく、今は”ティルダ王”として生きているらしい。

これに対しても、ルシエは純粹に楽しみを抱いていた。もし次に会つた時、彼がどのように成長しているのか。

会わない方が良いとは思うのだが、汚い世界にお優しい少年が揉まれ、果たしてどうなるのか。そこに興味を惹かれて止まない様だ。

そんな他国のことに関しても知ることが出来るのが酒場なのであるが、実際にリサーナが知りたいのは風の国の、しかも中心に関する事である。当然、レイスについてもそうだ。

どうやら風の国は、現在王位継承権でかなり揉めているらしい。王が3人いる子の内の誰にするのか決められないという。とはいっても、全員が女というわけでも無く、王子が2人と王女が1人。

普通こういったものは、長子が必然的に第一位になるはずなのだが、その長男は病弱で1年の大半をベッドで過ごし、なら代わりの次男はというと、民から馬鹿王子と呼ばれる程に浅慮で傲慢。王女にしても我僕娘だと専らの噂だ。

王の苦労がそれだけで理解できそうだ。民としても、国の先行きが不安だろう。特にリサーナは、その我僕王女と会った事があるので

で尚更である。ただ、あのお姫様がただの我侭娘だと思えなかつたりもするが。

そして、風の国自慢の騎士団ウイーネの団長であるレイスについてだが、彼は民に慕われる大人気の騎士だった。

生い立ちとしては、平民の出でありながらその剣の腕を買われ、アランドル伯爵家へと養子入りしたそうだ。とはいっても、所詮は元平民で伯爵の中でも下の家。肩身の狭い想いをしながらも、それを感じさせない堂々とした立ち振る舞いと、分け隔ての無い優しい性格が老若男女問わず受けている。

ルシエの持つイメージとは大分かけ離れているが、ここは黙つていてやるのがレイスの為だわ。

と、いうわけで、様々な情報を得てるので無駄とは言い難くあるので、状況的にもそろそろ潮時である。これ以上は、レイス側も何かしら監視だけじゃない行動を起こすだろう。

「ほり、リサーナ。騎つてやるから一杯どうだ？」

「ありがとう」

リサーナは、今日が光風の便り亭で過ごす最後と決めた。常連のおやじの勧めで一杯あたりながら、一度、今夜の監視役へと目をやる。視線の先に居た平民を装う青年は、恐らく報告か何かで知つているのだろう、リサーナが今まで初めて酒を飲んだ事に一瞬驚き、笑顔で自分のグラスを持つて席を立つ。それを確認しながら、直ぐに視線は騎つてくれたおやじへと戻つた。

「めずらしげな、リサーナが酒を飲むなんて…」

「どうか、初めてじゃねーか？」

常連客達も、今までに無いその行動に不思議そにはしながら、それでいて嬉しそうである。リサーナは、楽しそうに笑いながらグラスを傾けておどけた。

「だつて、飲んでみないと分からぬじゃない。賭けてみる？ 飲めるか、飲まれるか」

「いいねえ、だけど、どう賭けるんだ？」

その提案に、客が沸き立つ。そんな中、先程の監視役もいつの間にかその輪におり、值踏みするようにそう言った。リサーナはグラスに残った半分程度の中身を一気に飲み干し、ダンとテーブルに打ちつけた。

「やうね、1賭け1杯。全部飲み干したら私の勝ちで、潰れたら一番多く奢つた人が私を1晩独占できる。もしくは、奢られた分全部、奢り返す。これでどう？」

どっちがいいか、といつリサーナの問いかけは、酒場に響いた雄叫びにかき消されてしまった。2杯、3杯と次々に客がマスターへと注文し、目の前のテーブルは直ぐに酒だらけとなる。監視役の青年は、まさかこう返されるとは思わなかつたのか、ヒクリと頬を引きつらせた。しかし、田の奥で自らも狼を臭わせる。

「大丈夫かい、リサーナ」

「たぶんいけるよ。ちょっとしたお礼みたいなものだから、マスターは気にしないでね」

次々と「チップを空け、平氣そつに言つリサーナに肩を竦めたマスターであるが、その顔は楽しそうでそこまで心配している様には見えない。実際、精靈の力を軽く使えば、治癒の要領でアルコールなど簡単に分解できるため、この賭けは既に勝敗が決まっているようなものだ。

女の姿であるからこそ小悪魔といえるが、腹の内は悪魔。可哀想な客達は、この10日で少し荒れてしまつた手に転がされていた。

「ふふ。まあ、飲むだけじゃあ楽しくないし、いつもの様にお喋りしながらでいいよ。騎士様は、皆が賭けた数の記録をよろしくね。たぶん全員、字書けないだろ？」

どちらが接触しているか分からなくなりそうな状況で、リサーナは上手い具合にベースを自分へと持つていく。指示を受けた青年は、懐から自然に紙を取り出して従つていた。その影で、こつそり隠されていたリサーナの報告書が精靈の風により取られているとも、そして、今の言葉が相手のレベルを計る為のものであつたというのも気付かずに。

騎士だからといって、字が書けるわけではない上、この世界での識字率はそう高くは無い。字が書けるというだけで、平民であつてもそこそこの地位や立場、環境の中に入る人間だと考えられるのだ。それに、そもそも青年は平民を装つており、一言も自分が騎士だとは言つていない。このあからさまな値踏みに気づかないということとは、経験が浅いか実力がたかが知れているということだろうが、リサーナの作る場の空氣に呑まれているせいなのかもしれない。

「あー、でも念のため、限界決めとくよ？ 30杯が限界ねー！」

「おひよー。」

「まかせとけ！』

ノリに乗った客達。この世界には、地球上に比べ娛樂が少ない。だから、こういった小さな賭けは日常茶飯事で、誰かが取り締まるつていうことも無かった。さらには、いつ死ぬか分からぬ瀬戸際な日々を送つてもいるわけで、人に残る数少ない本能も手伝つて、男女の情事というものにもモラルが薄いというか、寛大というべきかとにかく、リサーナぐらいの歳であれば、既に咎められたりすることも無い当たり前な事なのである。

こうして、今夜の光風の便り亭はリサーナの独壇場となり、舞台が開幕する。

ここで何かしらの活路を見出せなければ、状況は悪くなる一方。それだけ切羽詰つているのだと実感できるのは、当然本人しかいなかつた。

「お、おい。流石にペースが早すぎないか？」

「余裕余裕。まだまだいけるよー？」

「そつだぞ小僧！ 地味に自分が一番賭けてるくせに、格好つけるんじやねーよ！」

「リサーナ！ 30じゃなくて40杯にしてくれねえか！？」

ガヤガヤと盛り上がる店。サイードの似顔絵に見つめられながら飲む酒は美味しいとは言えないが、周りが次々と出来上がりしていく姿には笑いが抑えられない。

「風の国の栄華にかんぱーいつ！」

「乾杯！…」

「ウイーネ杯の盛り上がりも祈って、だな！」

そうして、周りに合わせ心にもない音頭を取った時、リサーナの望んだ活路への光がひとつ灯った。誰が言つたか、ウイーネ杯といふ単語。それは、下手な詮索が相手の漬け入る隙となりかねないリサーナにとって最近最も知りたかった情報そのものであった。

「ウイーネ杯？」

相手が零した単語を拾い聞くのと、自ら進んで質問をするとのは与える印象が違う。街に出る暇も無く働かされていても、皆が浮き足立つてゐる事はずつと前から気付いていた。後はその根源を辿りたかつたりリサーナであるが、吹つけれたその頭には慎重というものが欠落し、デメリットが多くあつたとしても斬新な手が浮かんでくるのも事実である。

結果、その糸口を掴んだのだ。

「ウイーネ杯は3年に1度ある、武道大会のことさ。騎士団や魔術師団所属の新人の奴等や貴族も出るが、腕に自信のあるそれ以外も参加可能な大会でな。そこでお偉い方の御眼鏡に適つた奴は、栄光への道が開けたり、特別に入団が許されたりする。つまり、風の国

最大の娯楽であり、出場者にとっては経験を積める良い機会で、国からしたら貴重な人材発掘の場つてわけだ」

「へー。それっていつあるの？」

知らなかつたのか、と周りが苦笑するが、だつてお店で忙しかつたものと答えれば納得し、3日後だと教わつた。

「3日間の日程で行われるんだが、今年は結構魔術師が多いらしいな。エントリー期間も終わつて、総参加者数は190人だつたか。今年は俺、予選担当だから忙しくてさー」

この場で最も重要な情報を握つていそうな青年は、酒のお陰でかなり口が緩くなつてゐる。次から次に、リサーナに利益のあるものが飛び出てきて、真っ白だつた^{プラン}計画が次々と築かれていつた。

客は誰も気づかなかつたが、青年の言葉に危うくクツクツとサイード寄りの笑いが零れそつになり、目の前のカップの1つを一気に飲んで誤魔化す。まだまだ平氣^{フラン}そうな様子に、客達は残念そうな悲鳴を上げた。

「だから街が浮き足立つてたのね。それだけ大きかつたら外からも見物客が来そつだし、良い書き入れ時だわ」

「おつよー。」

「リサーナも、さりに忙しくなつちまうんじゃねーか？」

「コリ、悪意の無さそなその笑みが、舞台の終わりを告げた。十分必要な情報は集まり、活路がいくつもの光で明るく灯される。

贅沢を言えば、レイスがどういう目的で自分を監視していたのか探りたくはあつたが、酒が入つて緩くなつたといつても騎士は騎士。しかも、ウイーネ騎士団団長が送つてきた人間だ、これ以上の危ない橋は渡れない。

それに、精石を壊すことに比べれば大抵のトラブルは可愛いものだ。ある程度アルコールの回つた頭で、リサーナは自信あり気にそう思った。

「あー、肉屋のおじさん潰れちゃつてるし。奥さん呼んでくるから、皆で楽しんでおいて」

そして、後は舞台を降りるだけとなる。不審に思われない様、客の1人だけを故意に眠らせていたリサーナは、自然な流れを装つて店を出ようとした。その際の、賭けはどうなるんだという猛抗議に対してはテーブルを指差し。

「じゃあさまでした！」

じゃあ行つて来る、という声は、マスターさえも唖然としていて誰も聞いてなかつただろう。皆の視線は、いつの間にか空になつていた30のカップに釘付けだ。

ケタケタと笑う高い声は、そうして闇に溶けていく。

この後、暫くしても戻つてこないことに疑問を抱いたマスターが酔っ払いの尻を叩いて動かし、慌てて女将も起こして総出で探すのだが、リサーナが光風の便り亭に戻つてくる事は2度となかつた。

当然、見張り役の騎士はレイス直々に手痛い仕置きを受け、悲しみに暮れた女将に息子は責め立てられるのだが、本人がそれを知る由が無い。

こうして、突然現れ1つの店を大繁盛に導いた少女は風の様に消え去り、それは大きな街の小さな行方不明事件として処理された。勿論、表向きとして。

さあ、歴史に名を刻もう

城の近くに造られた、専用の闘技場。かなりの広さを持つその存在 자체が、いかにウイーネ杯が国にとって重要で歴史あるかを物語っている。

そして本日、街の人間の半分以上が集つていると言つても過言では無いぐらい、そこは人で溢れていた。

至る所に出店が立ち並び、時折迷子になってしまったのか子供の泣き声が混じりながらも、喧騒と熱気に満ちている。ただ、観客は朝早くから会場で我先にと場所取りをしているので、外に居る者達のほとんどが会場入りが叶わなかつた者が出店担当の者だ。

それに、全員が全員、純粋にウイーネ杯を楽しむかと聞かれればそうでは無い。貴族達は出場者を対象に賭け事に精を出したり、他の國の間者が紛れたり。こういった大きな行事では、どこでも何かしらの思惑が付き纏つてくるのだから、仕方が無いのかもしれない。

それを踏まえて開催し続いているのでなければ、最大の国と豪語は出来ないだろう。

「ふあ～」

そして、参加者の控え室にも一人、ある思惑を持った人物が大きな欠伸をしながら暢気に構えていた。

シルバーの短髪を無造作に立て、ゴールドの瞳を潤めるその者は、様々な雰囲気を醸し出す集まりの中、壁にもたれてひつそりと佇みながらも一際目立った容姿をしている。体つきが成長途中なのか、周りに比べ細く軟弱そうだというのも理由の一つなのだろうが、何より形の良い薄い唇と長い睫に縁取られた切れ長の瞳、すっきりとした鼻筋をした顔が、つまりは整った容姿がむか苦しい「武」の控え室で異質に見えるのだ。

何を隠そうサイードである。

「くつや、めんどくせえ。いつまで待たせんだよ」

サイードは、寝不足なのか肩を解しながら一人ごちる。それを、他の参加者はちらりちらりと横目で盗み見て、こいつは警戒に値しないなど嘲笑うのだ。

どうやらウィーネ杯には、素顔を晒して参加するらしい。服装も、簡素なシャツに黒のパンツ、機能性を重視した少しごつめのブーツという姿である。誰もが防具や盾を装備しているので、それがさらに小物臭を漂わせているのだが、本人は全く気にしていなかつた。

そもそも、何故サイードが“参加者の控え室”に居るのか。リサーナとして光風の便り亭でウィーネ杯の情報を入手した時には、確かに参加エントリーは終了していた。

それが寝不足な原因なのだが、どうやつたって不正参加をしている。

リサーナの行方を晦ませサイードとして取った行動は、まず参加者名簿を入手することだった。そして、その中でも予選敗退しそう

な者を探し出し、選ばれた哀れな生贊を出場出来なくさせ、名簿を摩り替える。無名の者も参加する上に、その人数が190人と多いからこそ欺けたのであるが、何とも卑怯である。

ただ、参加すればサイードの思惑が成功するわけではない。言つなれば、これは下準備の段階なのだ。その目的の最終地點は、城に入城する権利を勝ち取る事にある。そうすれば、例え精石を目の前にしなくとも、場所を探せば恐らく詩を唱えられるだろう。

なので、大変なのはこれから。それははずである。

しかし、その本人が欠伸を何度も噛み殺すことが出来ず、更に腕を組んで俯いて眠り扱けようとしていれば、どうも寒感しづらい。

他の「武」部門での参加者も、あまりのだらけ具合に始めは眼中に無いという雰囲気を持っていたというのに、苛立つてている様子だった。

ちなみに、先程から「武」と言つているがそれが何かといふと、この大会は武術を力とする者と魔法を力とする者が入り乱れる試合となつており、その使い手の区別も兼ねて武術専門を「武」と、魔法を主とする者を「魔」としているのだ。

ただ、それぞれで競うわけではなく、予選以外は武であれ魔であれ関係なく戦わなくてはならない。イメージとして、ほとんどの者が魔法を使う^{「イコール}後衛と思つかもしれないが、魔術師だからといって魔法のみで戦うわけでは無いのだ。でなければ、1対1の戦いになり相手が武術の使い手な場合、魔術師は簡単に死んでしまうだろう。

そうならない為にも、魔術師は自主的にウイーネ杯に参加し、己の力を高めようとるのである。それは、武術を専門とする者も同

じだ。めったに魔術師と戦う機会が無い分、この機会に経験を積もうとエントリーするのである。

実戦に近い試合。それは訓練で鍛えられないものを『えてくれる』。だからこそ、サイードの気の抜けた態度は、向上心に満ち溢れる参加者にとって勘に触つてしまうのだろう。

どこの貴族のぼんぼんが、親に言われるがままに適当な気持ちで参加している。恐らく、ほとんどの者がそう思つたのではないだろうか。褒めるべきか、上辺だけならサイードは気品があると勘違かい出来る。

独り言を聞けば、その口調からまた違つて見えるのだろうが。

「早く終わらねえかなー」

本気で寝てしまいそうになり、カクンと身体の力が抜けた反動で、隕気に覺醒したサイードは、周りがそう思つているとも知らず呟いて、結局綺麗とは言えない床に直に横になり寝息を立てるのであった。

当然、精霊に出番になつたら起こしてくれと頼むのを忘れず。

「これよつ、ウィーネ杯を開催するー。」

外では丁度開催宣言が行われ、すぐさま「魔」の予選が開始されており、歓声と衝撃音が響いていた。

ウイーネ杯のスタートは予選から始まる。今年は、「魔」で登録した者が110名、「武」での登録が80名の計190名による戦いが繰り広げられる」となった。

得意分野関係なく力を競うこの大会であるが、予選のみ「魔」と「武」を分けて行うのが通例。集団で、しかも狭い範囲での戦闘においては範囲攻撃を持つ「魔」が有利となってしまう為にそうなっているのだ。

毎年、均等に人数を振り分けたブロック毎に予選が行われるのだが、今年は「魔」が18ブロック、「武」が13ブロックに分かれ本戦出場者を決め、午後からその本戦が始まる。つまり、本戦に進出できるのは全部で31名というわけだ。

そして、見た目が派手な「魔」から予選がスタートし、勝ち上がった者から順に本戦トーナメントの抽選を行っていく。

会場の広さの関係で、一度に3ブロックが限界の為に生じる待ち時間は、個々の精神集中を高める時間として使われていた。

「あ、う、寝たら尚更疲れた」

なので、それを寝不足解消に使うというのはただの馬鹿か余裕があるのか。しかも、文句まで言つのだから、余裕があるからじゃなければ一生の恥にしかならないだらう。

精霊に容赦無く叩き起されたサイードは、「武」の予選1ターンの終わり間際に凝り固まつた身体を解していた。集合時間が陽

が昇つて直ぐだったのと、地球だと8時程になる今の時間を考れば、恐らく2時間程寝ていたことになる。

会場は、大分熱気が高まっているだろう。そして、予選「武」の部4ブロック目に位置するサイードは、案内役の騎士の指示で会場へと歩くのだった。

周りの剣呑な雰囲気もどこ吹く風、マイペースに首を解す姿はいつもより柔らかい印象を与える笑顔を貼り付けている。

薄暗い控え室から外へ出れば、久しぶりの光に自然と目が細まつた。

取り敢えず足を止めずにいれば、次第に目が慣れていく、視界には普通では気負ってしまう程の人、人、人。

円形に作られた闘技場の戦闘エリアには、中央に造られた土台を中心にも左右にも同じものがあり、そこでそれぞれ予選が行われる。

大きな歓声に迎えられたサイードは、その内の左側へ行くように指示を出された。他にも6人が同じように促され、全員で7人が4ブロック目の参加者なのだろう。

サイード以外の皆が防具を装備し、気合十分だ。

「それでは、ルールは同様、各ブロックエリア内に最後に立つている者を本戦進出者とし、武器は登録したもののみ使用可、致命傷は厳禁とします！ エリア外に出たり、急所に武器を添えられたら敗退。膝を付いても負けと判定しますので、各自全力で誠意を持って戦う様に！」

どういう原理か、進行役の説明が喧騒の中でもしっかりと参加者の耳に入ってくる。事前に説明を受けてるので、再確認の意味も込めてなのだろう。

各ブロックに監視と判定の審判役を務める騎士が3名づつ付き、お互いに額き合う。サイードのいるブロックには、光風の便り亭での最後の夜に出会った監視役の青年が居た。心なしかやつれている気がして、思わず慰めてやりたくなる。サイードは、隠れて笑っていたが。

「それでは、「武」の部予選2セット目、始め！」

そうしている間に、進行役の合図と共に戦いは始まった。

サイードの相手となる6人だが、其々が持つ武器を見るに剣を使うのが3人の斧が2人、弓が1人である。

「真面目に頑張るねえ」

皆、一斉に構え、近くに居る敵と素早く打ち合っていく。人数的にも1組は必ず混戦となるこの状況で、サイードは開始と共に軽快にバックステップや側転をしてエリアの端へと移動した。上手い具合に全員の意識外を移動するのだから、その根性に最早脱帽である。

そんな行動に客席からは幾つかブーイングが上がるが、それは甘いマスクを利用して、ワインクをしたり唇に人差し指を当てたりして静めていった。

その際、女性の何人かが額に手を当てクラリとよろめいた気もしたが、恐らく氣のせいだろう。……氣のせいであつて欲しい。

と、一人だけ明らかに可笑しい者がいる4ブロックのエリアであるが、早々に1人がリタイアしていた。サイードの様にエリアの端に位置取つた弓使いが、別の相手に氣を削がれている中で一番身近

に居た者の脛を器用に射たのだ。

それにより、相手を失くしたもう一方が弓使いへと標的を変えるが、予備動作と素早い矢の補充で、次を射るまでのタイムラグが少ない卓越した技術により餌食となる。

「へえ

傍観に徹していたサイードは、素直にその腕前に拍手をした。

このような作戦は、外せば自滅しかねないものだ。下手をすれば、敵同士がその場で協力し、弓使いを倒しにきかねない。それを気配を消してこなす様は、純粹に褒められるものだった。

「」も使えるようになつた方が便利そうだ、と新たな発見をしたサイードであるが、別で対峙していた内の1人もいつの間にカリタイアし4人となつた状況では、傍観し続けることは叶わなかつた。

たつた3人減つただけで、エリアは格段に広くなる。サイードの登録している武器は剣なので、それを含めて剣士が2人、斧が1人、弓が1人。さて、そうなるとどういった組み合わせになるのか。

残り2つのエリアでも、早くも進出者が決まつたり1対1になつていたりと進展が見られる。

「と、なると。俺が一番場違いつてなるかなー」

周りとの温度差を自覚しているのか、サイードが苦笑を浮かべながら気を張ると、2本の矢が放たれるのはほぼ同時であった。

「まずはお坊ちゃんにご退場願おうかねえ！」

しかも、斧使いまで標的をサイマーに決めたのか、せつかぐの偶数となつたといふのに混戦である。この流れからいけば、残りの剣士もそれに加わるだろう。

『』と違い、剣士が背中から切るのは、このような場では侍じやなくとも褒められたものじゃない。

「俺は残念ながら、つと、お坊ちやんじゃない、うお！ ちょっと、全員でとかひどくない！？」

今回のサイマーは、今までと比べフランクでおしゃらけた青年でいくようだ。矢をサイドステップで避ければ元々居た場所に刺さり、それに反応を返す前に斧が横から振り下ろされる。下手をしなくても当たれば脳天からぐしゃりとなつそうな攻撃に、観客からは悲鳴が零れ、審判は慌てた。

それも、少しづれた反論をしつつ前方に2回転して避けるが、今度は着地地点で剣士が待ち構え素早く仕掛けてくるので、少し驚きながら再び側転してやつと体制を落ち着けることが出来た。

まるで曲芸のような身軽な動きは、大いに会場を沸かせた。

「劇団にでも所属してたのですか？」

「いや、俺はあんたみたいに纖細なだけだよ～」

攻撃を見事に全て避けられた3人は、サイマーがそんな動きをするとは思つておらず驚き、弓使いは戦いの最中だが思わず問い合わせる。残りの2人は言外に貶され、弓使いも皮肉を言われることになるのだが、剣呑な雰囲気をものとせず、サイマーはその場で軽く

跳ねてやつと臨戦状態になつたのだった。

「これは、武器は使わない方が良さそうだな」

力チャヤリ。この大会の為に用意した急^{いそ}しらえの腰の剣は、ハンデにはなれど相棒とはならないだろう。そんな理由での発言なのだが、それもまた挑発にしかならず、元々が好戦的なのか結局1対3の戦いでいくしかなさそうだ。

何故指輪の剣を使わないかというと、あれは森でレイス等に見られており、万が一発覚してしまえば計画が失敗しかねないからだ。

「甘くみないで欲しいね！」

恐らく、斧使いは傭兵で剣士は新人騎士、弓^{ゆみ}使いは物腰の柔らかさと仕草から貴族か何かだろう。本人達は気付いていないが、いつの間にかこのブロックに観客は釘付けである。

「取り敢えず、一番面倒そうな……」

剣士の抗議に笑つて返したサイードは、3人を見比べ、その視線を弓^{ゆみ}使いに定めた。今的位置から一番遠い場所に彼はいるのだが、距離は問題じゃないらしい。

「光栄な評価をありがとう」

「いやー、後ろからグサリが一番怖いからねえ」

お互^{たが}い上辺は笑顔なのだが、ブリザードが酷いのは氣のせいだろうか。どうやら弓^{ゆみ}使いも腹黒いタイプの人間の様だ。

「その前に俺様が場外にぶつとばしてやるよー。」

「いいや、僕が膝を付かせてやるね！」

ちなみに、残りの2人が無駄に張り合っているが、観客ですらそれを無視している。

「では、真正面から射抜いてさしあげまじょう」

「それは楽しみだ」

弓をしならせ番えられた矢は照準を定め、サイードは弦を引く左手に集中する。煩わしい外野の音の一切を遮断する集中力は、相手の僅かな動きも見逃さないだろう。

数秒の対峙の後、攻めを選んだのは弓使いだった。

ショットと矢が放たれ、それは的確にサイードの身体に迫る。それをまたもや側転で避けたのだが、間髪入れずに次々と、追い立てるように弓使いは猛攻した。

体勢を立て直すことも出来ず、4人も居れば広くなつたとは言え狭いエリアをじぐぞぐに走るサイード。

「ちつ……キー テか、君は。」

流石の弓使いも、その俊敏性に思わず舌打ちをしていた。

ちなみにキー テとは、ほとんど猫と同じなのであるが、尻尾が一般のしかもそれが蛇という、可愛さが半減しそうな動物だつたりする。しかも、本体というか頭というべきか、とにかくメインが蛇の

方。どっちにしろ害虫駆除をしてくれるの、家庭ではそれ目的で飼われたりするのだが、占める面積が少ない尻尾の蛇が食事をするのだから、想像するだけで珍妙な光景が浮かんでくる。

「お兄さんも、中々に鬼畜だねえ」

近付いて離れて、を繰り返すサイードは何が目的か、まるで矢を放つ場所を誘導するように走っていた。
会場の中にはその狙いに気付く者もいくつかいて、既にほう、と関心していたりする。

そして、サイードは大きく斜めから真正面に移動するように弓を使いへと迫った。

「甘い」

当然、卓越したスキルを持つているのだから、相手としては飛んで火に入る夏の虫。肩を狙つて1本の矢が放たれる。

「ぐあっ！！」

それは見事に命中した。

「なつ！？」

しかし、その的を変えて。崩れ落ちリタイアとなつたのはサイドでは無く剣士であり、矢は左太腿に刺さつている。

驚きに染まる弓使いだが、よくよくエリアを見てみれば、斧使いの右腕にも矢が2本刺さつていた。

「いやあ、まさかそんなに、お兄さんが俺と一緒に打ちしたいとは思わなかつたよ」

状況を飲み込んでいるのは恐らく、これを狙つていたサイード本人と審判、スカウト目的のお偉い方数人だろう。

しかも、剣士に矢が刺さつたのは今し方であるが、斧使いがそれを受けたのは2人の攻防が始まつて直ぐだ。

正方形に近いエリア内で仮に弓使いが立つてゐる場所を北側とすれば、サイードは最初南東の端に立つており、剣士は東側、斧使いは縦にも横にも西の端とサイードの中間ぐらいに居た。

そして、最初の1本を側転で西側に避けたサイードは、悟られず注意しながら矢を避け続けて、弓使いからは斧使いが隠れる様に、斧使いからは矢が隠れて反応が遅れる様にタイミングを図つて移動したというわけだ。

剣士に対しても同じ要領で、当たるよう攻撃を誘導した。弓術は驚くほど集中力を必要とする技である。それが仇となり弓使いは良いように動かされたのだが、こう言つてはなんだが、剣士と斧使いも大分間抜けだ。

剣士に関しては、サイードが走りながらブリッジをし、しかも精神に協力してもらい矢尻に少し力を加えて軌道を変えたので避けれなくて仕方は無いが、動きそのものに着いていけず、突つ立つていただけである。狙つてくれと言つてゐるよつなものだらう。

「今日の俺は、運が良いみたいだわ」

よつ、とブリッジの体勢から起き上がつたサイードは、してやつたり顔をしながらしらばつくれ、ニヘラと笑つてゐた。

「抜け抜けと……っ！」

「小僧があああああああ！」

『弓使いの顔には余裕が無くなり、使われていたといつ事実が屈辱を生む。当然、斧使いもそうだ。利き腕をやられ、重量のある斧を満足に扱えないだろうに、それでも怒りまかせにサイードへと突進した。

「おつと」

それはさながら猪、体格からすれば闘牛かもしれないが、直線的で単純な攻撃だということは同じだ。ひょいっと身体をずらすのみで避けた際、サイードは片足をその進行方向に突き出して、まんまと引っ掛けた斧使いは大きく跳んだ。

「おお、飛んだ。すげー」

「うぐっ！」

そして、盛大に地面に落ちて顔から数メートル滑った。ケタケタ笑うサイードだが、他は睡然である。しかし直ぐに、周囲から悲鳴があがつた。

「ん？」

サイードとしては、この後会場全体が爆笑に包まれると予想していたので、これは予想外だったのだが、弓使いまで同じ位置にある皆の視線を辿れば、そこには、このまま落ちは持ち主の背中一直

線である「つ斧」がクルクルと回っていた。

「おー……。あ、タンマね」

流石にこれは、審判役の騎士が剣を抜き救出する為に動こうとしたが、サイードがそれを止め、よつと眩いで軽やかに跳躍。驚く暇も与えず、なんとそれを足で蹴ったのである。当然足は精霊により保護されているのだが、「武」でエントリーしている者が魔術師でもあると考える者はいない。魔術師は貴重で重要な戦力であり、自身もその才能に幸運と誇りを持つのが常識なのだ。

なので、単純に蹴ったと思った会場はどよめいた。

「アックスシユート。あ、いや、トルネード?」

そして、蹴られた斧であるが、それは方向を変えただけでクルクルと飛び続け、サイードの緊張感の無い適当でノリだけの技名と共に、「使いに狙いをえていただけである。まさかの展開に、弓使ひは目を限界まで明けている。

殺しは厳禁で、あくまで試合の戦いだ。どう転ぶか分からぬこの攻撃は、当たれば一大事なので、標的は変わつても当然審判が力バーするべき。サイードも、万が一に備えて構えなければいけないだろう。

しかし仕掛けた本人は、相手が避けられると見越した上なので、一人場違いに暢氣であった。

「お兄さんなら大丈夫!」

キラキラした笑顔で所謂グーサインを弓使いに向ける。これは流石に、モラルがなつていない。

「どこまでも人を馬鹿にして！」

ノリが良い、というわけではないが、弓使いも避けなければ死もあり得るので、期待に答え優雅なステップを魅せるのであった。そして、その後ろでは一次災害を防ぐ為、結局審判が斧を剣で叩き落とすのであるが、彼等はあくまでサポート役なので影に徹してもらおう。

「良い加減、お遊びは終わらせてましょつか」

そろそろ予選も佳境である。冷静ではあるがかなりの怒りを蓄えた弓使いは、避ける為に逸らしていた視線を戻した。

しかし、そこにはサイドの姿はない。

「やうだね。そろそろ飽きたし、後ろがつかえるもんな

端と中心付近で相対していたはずだったが、その声は弓使いの直ぐ耳元でしていた。

慌てて視線をその方向に向けたが、時既に遅し。

「おやすみー、お兄さん」

弓使いが斧を避けている一瞬の隙に急接近したサイドは、横側から迫つて飛び、後頭部を狙つて華麗な蹴りを繰り出したのであった。

驚くのが精一杯の弓使いは、声を出す暇もなく地に伏す。

今まで最高の歓声が鳴り響く中、少しの間を置いて、本戦進出者決定を示す白旗を審判役が揚げた。

一連の戦いに有した時間は凡そ15分弱。しかしサイードは、かなりの人間に衝撃を与えたことだろう。当然その中には、お偉い方も多い。

「サイード……ですか」

そして勿論、思惑も動き続ける。

敗者となつても勝者の如く

「本戦進出者は、ここで抽選を行つてくれ」

「ほいほーい」

一つのショリーにもなりそうな戦闘で勝者となつたサイードは、案内役に従い、今度は本戦進出者用の控え室に入つた。
そこには既に23人の今後の対戦相手があり、視線が一斉にサイードに注がれる。

「へつ、坊ちゃんかよ。金で進んだか何かだろーな」

その中の一人、大斧を持った男の言葉が部屋に笑いを誘つた。先に駒を進めた者達はサイードの戦いを見ていないので、認識の改め様が無かつたのだろう。同じ2セット目の「武」の進出者も、サイードのブロックが一番試合時間が長かつたので、中途半端にしか見ていない。

「君の名は?」

「サイード」

まったく相手にしていない様子のサイードであるが、抽選を行つている騎士の指示に従いながらも僅かに眉を顰めている。騎士は一度手元の参加者名簿を確認して、小さな箱の中から中身を一つ引けと差し出す。

吟味する事も無く、適当に選んで取り出した石には、白い線で四角い記号が書かれていた。

「一回戦、4試合目だな」

「おや、私の相手ですか」

それを見た騎士は、部屋の壁に大きく貼られたトーナメント表の同じ記号が記された場所に名を書き込む。反応したのは、一人の魔術師であった。

「じてんぱんにして、社会の厳しさってのを教え込んでやれよ」

「勿論ですよ。貴族だからと、甘えが許される場所ではありませんしねえ」

まじまじとトーナメント表を眺める横で交わされる、本人を無視した会話。「これはさすがに、サイードでなくとも苛立つだろう。本戦からは「武」も「魔」も関係ない組み合わせではあるが、「魔」が多い分バランスは悪い。

4試合目であれば、今日に一線交えることになるだろうな、と考えたサイードは、そこでやつと室内の連中へと視線を向けた。

「見た目だけは強そうな人ばっかだから、舐めた口利くなとかは言わないけど。さっきからさ、坊ちゃん坊ちゃん煩すぎ。俺、貴族じゃないんだけど」

「そうなんですか？」

これは意外だと魔術師は驚き、サイードは頷く。周囲も、だつたら実力で勝ち取ったのかと信じられないながらも、まじまじと田の前の青年を踏みました。

見た目だけは、といつのはさり気無むな週回して気付かない者ばかりだった。

「がはつは！ お前等、そんな身構える必要あるか？ 所詮運だろ、運」

「だけど、運も実力の内と言ひしねえ」

「だつたら、私がその運を上回つてあげますよ」

確かに本人もさつきの試合は運が良かつたと思つているが、他人に言わればただの嫌味。今後、別の意味で素顔でいるのは控えようとした。そして、じつなつてしまえば、これから展開を簡単に察する。

だがまあ、今回は牽制も出来るので愚直だとは言い切れないのもしれない。

部屋にひしめく人間をぐるりと見回したサイードは、抽選係の騎士が文句を言つてくる前に一旦扉から離れ、無邪氣な笑顔で口を開いた。

「少なくとも、あっちの人とこの人」

さあ、どう毒を吐くのか。そう思えば、サイードは突然、壁に凭れかかっていたロープを来た性別不明の者とレイスに似た優男を指

差す。

何を言つてゐるんだと笑つていた者達が静まり、全員がサイードと指を差された2人に視線をさ迷わせた。

その2人もサイードを笑つてはいたが、殆ど空氣の様に気配を消していた為、まさか自分に意識が向けられるとは思つていなかつたのだろう。

ピリツとした雰囲気が部屋に満ちていく。

「俺なら、あの2人の方を怪しむよ？一人は、女なのに男の格好してるし」

それが分かつていながら、自分の事は棚に上げて言つた。案の定、係りの騎士を含め驚いた面々は、一斉にロープの者を凝視する。それでたじろがない所からして、ロープの人物も大分肝が据わつていいそうだ。

しかし、皆の反応に反して、サイードはやれやれと肩を竦める。

「違う違う。そっちの人は、魔術師みたいな大剣使いさんでしょ。あんまりガタイが良い訳じやないのに、身の丈大の剣を振り回すなんて俺も吃驚だけどさ。女は、剣士みたいな魔術師さんの方」

ピクリ。サイードの標的にされた2人の肩が同時に跳ねる。ここまで他人の手の内を晒すのは戦いに身を置く者としてルール違反であるが、ニコリと笑うその顔が、馬鹿にしたお返しだよと威圧していた。

2人以外の他の面子も、気付かなかつた者は言外に格下扱いされ、気付いていた者も自分がだけの有利な情報を晒されたわけなので、結果的に全員がしてやられたわけだ。

「あらあら。可愛い坊やだと思つたら、とんだ策士ね。やられたわ

誰にも破れそうに無い沈黙を柔らかい雰囲気で突破したのは、クリーム色の長い髪を後ろで一つに纏め男の装いをした、サイードの言つていた剣士みたいな格好をした者だつた。ズボンは男の服装だと根付いているこの世界では、それを着ているだけで男装となる。

ちなみにこの間に、3セット目の中進出者が3名この空間に入つて來ていたのだが、騎士までもがサイード達に注目してしまつてゐる為、可哀想に扉の前でどうすれば良いのかも分からず戸惑つてゐる。これも見越して、サイードが扉から離れていたのであれば、男装魔術師ではないがとんだ策士というか、予想出来ていたのなら少しはこいつといったトラブルを回避する努力ぐらいして欲しいと思つ。

「そりゃあ、貴族じゃないのに、貴族だ、ぼんぼんだ、って笑われたらさすがに俺でも氣分悪いよ」

「ごめんなさいね。でも、場違いな感は否めないから仕方が無いわ。舐められたくないければ、それ相応の雰囲気を纏うのも強さのうちでしょ?」

男装魔術師は、開き直つたのか否定をしなかつた。声はどう頑張つても女にしか聞こえないのでは、誤魔化しは効かなかつただろうが。

背後の進出者が不憫だつたのか、サイードは騎士に顎で彼等を示し、スタスターと男装魔術師の横に移動する。その際に肩を竦め、ながら逆も考えよつよと呟つ。

「逆とは、油断させる為に弱いと思わせよつとするところ」とか?」

それに返したのは、ローブの人物だった。壁から身体を離し、サイードと男装魔術師に向かってくるところから、興味が湧いたのか。こちちは声から男だと分かつた。渋めなので、30代ぐらいだろう。

「皆の憧れ、ウイーネ騎士団団長なら説得力があるかもしんねーが。坊ちゃんみてーなのは、普通によわっちいだろ？ そんなひよろい身体で、剣もおもちゃレベル。口は達者みてーだが、所詮それだけだろ？」

けつ、と割り込んでくる大斧使には、今日もしくは大会後、闇に葬られてしまうのではないか。先程から、悉くサイードの苛立ちを誘っている気がする。一瞬、サイードの目が細まつたところから、強ち外れていなさそうで怖い。

「とにかく、ローブの人の言つてる通りだよ。まあ、別に自分の力はたかが知れてるから、俺が強いつことじやないけど」

「剣は使い手を映すからな」

「私は君の言う通り、魔術師だから分からぬけどね」

どうやら、大斧使は3人の輪に入れてもらえないようだ。全員から薄い反応しか示してもらえず、逆に彼が周囲に笑われてしまい、顔を真っ赤にしながら機嫌悪く部屋の隅に移動していく。それを、男装魔術師はクスリと笑い、ローブの男は無反応を貫き、サイードが肩を竦める。

3人で壁まで移動し、本戦開始までの時間を潰す事にしたのだろう。誰も名乗って仲良しグループを作ろうとはしないので、違った意味合いもあるのかもしれない。

「そんなにこの剣、安っぽいかな」

「値段云々じゃなく、グリップがまず使い込まれていない新品同様だ。鞘を見ても同じ。一度も戦闘で使っていないのではないか？」

サイードの思わずの咳きに、丁寧にロープの男が説明をしてくれた。ベテラン故か、人柄からか。ただ、男がサイードを軽視していたのは自分のタイプを暴露される前までなのは確かだろう。そしてサイードも、頷きながらこの男が他とは別格だと感じていた。

それは、男装魔術師も同じである。特にこちらは、精霊と誰よりも親密な関係であるルシエには分かりやすい。

勿論、自分以外が相手ならかなりの強者になるだろう、という意味でだ。

「え、でも待つて。そしたら君、剣を抜かずに予選突破したってこと?」

ザワリ。馬鹿にしつつも、余程サイードの事を皆気にしているのだろうか。男装魔術師の発言に、部屋がざわついた。

国を挙げてのこの大会では、新人といえど将来有望な者や傭兵として少なからず名が知られている者が出場するので、レベルとしてはかなり高い。

なので、予選であれ簡単に勝てるものでは無いのだが、その中で登録武器を使わず戦うというのは、相当難しい事だった。

それを、皆が馬鹿にする小僧がやっていたのであれば、今度こそ本当に認識を改め最大限警戒する必要が出てくるだろう。

答えを「口クリ、と待つ面々にサイードが取った行動は、一コツと

笑うことだった。しかし、それは僅かの時間で、すぐにその無邪気な笑顔は消え、全てを拒絶するような冷たい瞳と鋭い嘲笑が浮かぶ。両隣からはっと息を呑む気配を感じながら、その視線は先程の大斧使いに向けられていた。

「まあね。俺、運が良かつたみたいだし？」

ああ、怒っている。きっと、この瞬間、部屋の全員が感じたことだろう。

そして、大斧使いに、お前死んだなど哀れみを向けた者も何人かいたはずだ。

「でも、本戦出るからには、俺だつて優勝目指してるからね」

そんな凍りついた雰囲気の中、サイードはそうのたまうのだが、今まで一番笑いを誘いそうな言葉に誰も笑えなかつた。新たに視線を向けられた、サイードの初戦の相手となる魔術師に至つては、恐れ戦いた始末。

この時、丁度本戦出場者が全て出揃つっていたのだが、恐らく魔術師はサイードに歯が立たないだろう。魔法が精靈に頼らなければ使えない限り。

「……で、では、これにてトーナメントの組み合わせが決定。2の大鐘と1の小鐘が鳴つた後に本戦を開始する。本日は1回戦8試合目までを予定しているので、該当する者は必ず控え室に来る様に！」
明日は、1の大鐘と1の小鐘を合図に1回戦9試合目からの者と、2回戦出場者は集合。遅れた場合、容赦なく棄権とみなすので注意すること。それでは解散！」

係りの騎士も、この空氣の中告げるには大分勇気がいったらう。それが合図となり、其々がこの後の試合の前に腹^ヒしらえをしたり、明日の為に身体を休めたりする為^シこちない動きで部屋を出て行くのだが、その際誰もがサイードを遠巻きにするのだから可笑しい話である。

「んじゃ、俺はここで寝て過^{ハシ}ハラウフと」

「……予選控え室でも寝てたな」

そしてサイードは、また寝ることにしたらしい。ローブの男が呆れたように言えば、だつて育ち盛りだからと適当に返すだけで、即効床に寝転がつた。男装魔術師がそれを見て僅かに顔を顰めるが、機嫌があまり良くないサイードを相手にお小言を言つべきではないと分かつてゐるらしい。肩を竦めて出て行つた。

「これは、策士といつよつとんだ道化だな」

「おじさんも、堅気^{ハシ}ぶつてるけど、大分やんちゃしてゐる口でしょ?」

俺にはどうでも良いけど。背中を向けるサイードの言葉に、ローブの男は一瞬驚いた様子で身体を固め、この道化がと笑つた。

「久しぶりに本氣を出せそうな奴に会えたかもしけんな。今後の楽しみの為に、全力で鍛えてやるから精々勝ち上がり、若僧」

ひらり、と振られた手は了承か抗議か。試合とはいえ、質実剛健な者の集いではないのだから、気楽に寝るのは関心できないが、本氣で寝入った感じが気配で分かり、ローブの男は再びクツクツと笑いながらその場から去つていつた。

今日に試合があればまた会つことはあるだろうが、サイードが興味を持つていい限り次に接触するのは闘技場のステージだろう。

力サリ。サイードは耳元で聞こえた物音に目を覚ました。

「鐘、鳴ったわよ。それにしても、暢気なものよね」

敵意は感じないが、良い気持ちで落ちていたところを無理矢理浮上させられ、誰だよと鋭い視線を音の発信源へと向けた。

「私は1試合目だから行くけど、少しは何か食べ物を入れておきなさい。じゃあね」

「……あー、うん。頑張って」

そこにあつたのは茶色の紙袋で、声の主はあの男装魔術師だ。だ

が、のろのろと彼女に視線を移動する頃には、その身体は扉の外に消えている。

「どうやら完璧に寝入っていた様で、外では予選以上の歓声が響き出した。」

「トルツテか。お人好し、なのかねえ！」

既に集合時間となり、試合が始まるらしい。頭が覚めるまでぼーつとしていたサイードだったが、渡された紙袋を徐に確認した。すると、中身はお馴染みになつたサンディッシュもどきである。それを見て眩いたサイードだが、その内的一切れに目を細め。

「これは、お坊ちゃんから立派な敵と認識されたと、喜ぶべきかな」と、それが何を意味するのか。言つ必要は無いだろ？
戦いは既に始まつてゐるのだ。

声高らかに笑おひじりないか

1回戦はあっけなく終わった。

「勝者、サイード……。」

観客の喉はどれだけ丈夫なんだ。サイードはそんな事を考えながら、足元の対戦相手を見下ろした。

間抜けに氣絶しているその魔術師に向かい救護が駆けつけてくるが、腹部を殴られただけなのでそう焦ることもないだろ？

トーナメント形式の本戦で、サイードはあっさりと2回戦へのキップを手にしたのである。

「試合そのものより、氣使わなきゃいけないのに疲れるな……」

魔術師は、サイードにとつてただの凡人。それは、いい加減説明しなくともいいだろう。ただ、それを前面に出して試合をするのは、自分の首を絞めてしまうだけである。

仕方なく、精霊に対して攻撃を当てない様に攻撃してくれと頼むのであるが、こういった複雑な意思を伝えることがどれだけ苦労なものか。それが理解できるのは、極少数しかいないはず。

意思というものは、お互いが明確に持つていなければ、より複雑な方が伝わらない。ただし、複雑だから偉いとか、凄いというわけでもないが。弊害、とは何と便利な言葉か。

「まあ、そう簡単にいくわけないわよね」

ステージから、自分に向けられ続けた探られる視線の持ち主に笑えば、男装魔術師は観客席からヒラリと手を振った。
その余裕から、彼女も勝ち上がったのだろう。

「立ち位置というか、そもそも場所が違うのにねえ」

サイードは、歓声を無視して今日の仕事は終わつたと、ざわめく街の限られた静寂を探しに消えたのである。

そうして、2日目を迎えた。

「それでは、ウイーネ杯2日目を開始する!」

高らかな声と雄叫びになりそうな歓声。2日目も、初日と同じく爽やかな快晴だ。

「この世界の活動は朝日が基準である。夜もそれなりに蠟燭等の灯りで過ぐせ無くは無いが、普通の家庭で無駄に浪費しようとは思わない。」

ウイーネ杯も、平民のそのリズムに則つて進められる為、サイドは今日も欠伸を相棒に控え室に居た。そこは、昨日よりは幾らか

人数を減らして出場者で占領されている。

次々と、そして着々と1回戦の試合が消化されていく中、どうやら今日は誰もサイードに関わるとはしないようだ。男装魔術師も、大剣使いも、ついでを言えば大斧使いも。皆、自己の精神統一を重視したり、武器の最終メンテナンスをしたりと忙しい。

勿論、体力温存の為でもあるだろう。トーナメント形式ということは、勝ち上がれば上がる程、負担は大きくなっていく。しかも、相手のレベルも最初と比べれば格段に強くなるのだから、消耗戦であることは必須。強者の多いこの大会でのその条件は、終わりの見えない戦争にも近く感じる。

その中でどれだけ温存、コントロールが出来るか。ペース配分も、強者の必須スキルであるということだ。運はくじで、実力は勝敗で。そうして、即戦力になりそうな実力者を国が囲う。ある意味、純粹な奪い合いが凝縮されていると言つても過言ではないだろう。

「よし、これで2回戦進出者が揃つたな。ここからは、予選と1回戦目で使ったステージが撤去され、闘技場全てが戦闘エリアになる。作業が終わり次第、順に試合が開始されていくから指示を待つように」

そして、集合時間から2時間と少し経つ頃だろうか。僅かに息を荒くした魔術師が控え室に戻つてくると同時に、案内役である騎士がそう言った。

周囲が其々、室内の者達に視線を巡らせる。サイードだけが、「武」の出場者だけに限られていた。とは言つても、十中八九、決勝には大剣使いのロープの男が上つてくるだろう。後は、そこに自分もいけるかどうかだ。

国を挙げて、しかも3年に1度で行われるこの大会。サイードは、

決勝だけは毎回国王も観戦しにくるという情報を入手していた。その情報自体は、民にとつても周知の事実なのでそれ程重要では無いし、そう易々と国王が精石を持ち歩くと楽観しているわけでもない。

だからこそ、わざわざ出場して勝ち上がりうとしているのだが、果たしてどの程度まで力を隠しサイードとして動けるのかどうか。それが、ルシエにとって一番の難関であった。目標はあくまで入城であり、万一にでも陽の王の力を見られてしまえば、今の何倍も風の精石の破壊が困難になってしまいます。

「陽の精靈王がどれだけ無茶振りしてたか、もう少し考えて動きやよかつた」

ひつそりと、今更なことを呟いたサイードであるが、その言葉に自身の無謀さは含まれていない。

これから戦いの算段をいくつも考えながら、2回戦目はスタートした。

相手はまたもや魔術師。最早、その様子を語るまでも無い。今日は勝てばそのまま控え室、負ければ救護室へどが繰り返されるので、軽やかな足取りで退場するサイードであるが、本人の知らぬところで予想外にその名は民衆へと広がつていった。

本人からすれば、重すぎて持つていられない、持てても満足に扱えない。加えて、精靈に補助を頼もうにも素材がそれに耐えられないので、結果使えない。そんな理由で抜かないでいた剣であるが、他からすれば、武器を使わずに勝利する青年としてダークホース扱いされたのである。その拳に籠手でも装備していればまた違つていただろうが、軽装だから尚の事。

俊敏性は華麗な動きに、緊張感の無い構えは優雅さに、見た目の軟弱さは本質を隠す謙虚さに。聴いたら恐らく悶絶するであろう表現をされ、期待と娛樂を求められていた。

全ては精靈のお陰でしかないのだが、これもまた何度もかだらうが、観客が考えるはずもない。そもそも、今まで精靈の加護や保護、補助と様々語っているが、それが魔法とどう違うのか。

魔法と人の持つ魔力、精靈については2度も語らないが、短く言えばルシエのそれは取引では無く、分け与えられているということである。今までの人と精靈の契約は、好みだけが全てであった。

しかし、現在はそれに加えて精靈が自らを保つ為に取る手段の一つでもある。精靈も生き物なのだ。だとすれば、生存する為の糧が必要になつてくる。

精靈にとってのそれが魔力で、今まで世界に溢れる分だけで十分だったのが、穢れによつて蝕まれたことにより質も量も極減してしまい、生きる為に契約する。そうすることによつて、自らの力を人間に使わせてやる代わりに魔力を喰うのだ。

その過程で絆が生まれたら、それはそれで良いだろつ。ルシエは精靈を縛る存在では無いのだから。

ただ、それだけの理由で契約しているのであれば、精靈はルシエに従い、自らが戦えない代わりに力を分け与える。

混同してはいけないのが、精靈の力と魔法はまた別モノだということ。そして、ルシエの戦いは、精靈と人間との戦いでもあるということ。
戦争なのだ。

もし、精靈王を解放することでアピスにある程度精靈の力が増え、魔力も増えた時、今説明したような生きる為だけに契約している精靈は簡単にそれを破棄するだろつ。契約は力の大きい方が主導権を持つのだから。

といひことは、そういうた精靈達はスペイとも言える。

ただ、これは全面的にルシエが優勢とは言えない。個人を好いて契約している精靈は、その破棄を望まないだろうし、相手の意思を尊重しルシエに牙を向く可能性がある。しかも、万が一精靈の方が相手より力が劣ってしまった場合、その支配下に置かれてしまうのだ。

一対一であれば、区別をつけて対処出来るだろうが、遠くない未来、大勢と対峙することもあるだろつ。

そうなれば、一々精靈と意思疎通を図つてなどいられない。

風の精石を破壊する為に参加しているウイーネ杯だったが、気付けばそういう重要なことに気付かされ、ルシエは数少ない容赦の一つを消すに至った。

こんなことばかり考えているから、現在の自分の評判にまで気が向いていないのかもしれない。

「おいおい、次の相手はお前かよ」

無意識なのか、常に壁側に陣取っていたサイード。無表情を装つてその思考は複雑に働いていたのだが、それを邪魔したのは、昨日から何度も無駄に苛立たせてくる野太い声だった。

「どうやら、お互に運が良かつたみたいだねえ」

「あん？ 僕様は実力で、勝ち上がつてんだよ餓鬼」

ただ鍛えているだけ、と思える大柄な体つきの大斧使いは、しゃがんでいたサイードに実に好戦的な視線を浴びせる。

それに対し皮肉で返せば、直ぐにこめかみに青筋を立てるのだから、言葉にしなくとも十分に小物だと教えてくれているはずだ。

「今からそんなにハツスルしてたら、試合中に息切れするよー。ていうか、汗臭いからまず行水でもしてこいって」

どうやらサイードは、苛立つたというよりも関わる事自体無駄だと感じた様子だった。逆上させようが、嫌悪されようが、とにかく声を掛けてくるなと視線すら合わせない事でアピースしている。

しかし、だとしたら、もう少し言葉を選ぶべきだ。これでは、相手の性格タイプからして、無駄に逆上させるだけ。しかも、人数が減っている控え室では、現段階でそう大声を出さずとも全員に会話が聴き取られてしまう。

男装魔術師が一際大きく吹き出し、その通りだわと笑い、他の参加者も当然、あまり反応しなさそうなロープの大剣使いまでもが、壁に顔を向けて隠そうとしているが肩を震わせていた。

「てめえ、昨日からその口、躾がなつてなさすぎじゃねえか？」

「俺が不躾だつたら、あんたは凄腕の調教師もお手上げなぐらいの野性味溢れる猛獸だらつよ」

毒、毒、毒。筋肉馬鹿と言つてあげた方が、何倍も優しい心の持ち主なことだらつ。相変わらず田線を合わせずしゃがんだまま、意

味もなく傍らの剣を触りながら言つた言葉に、大斧使いは顔を真つ赤にさせた。

いや、顔だけじゃない。彼自慢の筋肉まで同じくそうさせて、わなわなと怒りに震える。その右手も小刻みに震え、必死に武器を取るまいと理性を総動員させているのだろう。

「ふふっ！ も、だめ、止めて……」

「これ以上は、流石に不憫だろ？ ……くふっ！」

しかし、世の中は無情なのだ。

そんな大斧使いの努力は、今までのサイード以外にも行ってきていた自身の傍若無人な態度と浅慮な発言のお陰で、部屋全体に笑いをもたらした。

全員が、なんとか笑いを沈めようと頑張るのだが、自爆の嵐である。

その中でも男装魔術師と大剣使いという勇者が、全力で止めようと間に入ろうとし、それも結局自爆に終わった。

爆笑の渦に、とはならないだけまだマシなのかもしねりないが、それでも自分は強いと感じている大斧使いにとっては十分な屈辱だろう。

ただ、彼は知らない。サイードにとつては、こんな侮辱はただの皮肉で序の口だった。

「俺が思うに」

大斧使いが口を開く寸前、サイードの声が再び響いた。抑揚が無いところから、そこまで本人は深く考えていないのだろう。

「まあ、全裸を見たわけじゃないから絶対、じゃないだろうし、いつもあんたの裸なんて無駄に吐いて体力消耗するだけだから大金積まれてもお断りだけだ。背筋はその武器を使うには必要で褒められる付き方だと思う。実に機能性に優れてるね。だけど、上腕のは見た目だけでスピードを損なうし、胸筋も無駄。それならまだ、デブの方がマシって思うぐらいだ。あ、もしかして、大道芸もやつてるとか？ ふんつて鼻息荒くして筋肉だけでシャツを破つたりして。それならまあ、仕方無いか。大事な資金集めの為でもあるんだろうし」

「深く、考えていないんだが……。たぶん想像して、自分で笑つたんだと思う。

小さく吹き出し、サイードはやっと顔を上げて大斧使いを見た。

「やめ

ちなみに本人も周囲も、一気に喋られた言葉を理解するのに少しのタイムラグを有したようだ。ポカンと呆けてる間にまたもや整った唇が動き出すのだが、大剣使いが一番最初に全てを把握しながら静止を掛けようとした、一步届かなかつたのである。

「ねえ、俺にも見せてくれね？ まじで出来たら、金払うからさ」

「てんめええええええ！」

至極真面目で期待の籠つた表情のサイードだったが、これだけ言わればいくら聖人君主でも平常心ではいられなかつただろう。大斧使いみたいな者だと尚更である。

彼の必死の理性も空しく、気のせいではあったのだろうが血管の千切れるような音と共に、その手は背中の大斧を掴んでいた。

「待て！」

「落ち着きなさい！」

流石にこれには、周囲も笑つてはいられなかつた。2人の間に入ろうと、控え室担当の騎士も勿論動こうとする。もう、1人空気を読まずにキラキラした瞳を向け続けるサイードは、放つておいていいだろ？

「うるせえ！　ここまで馬鹿にされて黙つてられつか！」

しつかりと固定されていた大斧が、軽々と右腕一本で構えられる。至近距離で向かい合つていたサイードと大斧使いだ。素早く、そして軽く振るうだけで、簡単に定めた狙いに突き刺さるだろ？

しかも、そうなつたが最後、部屋は血の海になるはずだ。観客とは違い、悲鳴を上げて目を瞑るだけしか出来ない面子では無いので、ある者は自身の得物を構えて走り、ある者は魔法の詠唱を始め、ある者は傍観に徹する。

危うい青年を助ける為というよりは、可哀想な未熟者を罪人にさせてはならないと思つての行動の方が強い。

「死ねや小僧が！」

理性も何もあつたものではない。その内を占める感情のまま。腕が振り下ろされた。

大斧は振り下ろされ、部屋には轟音が響き渡る。壁は砕けて大斧が突き刺さり、天井にまで亀裂を作る。

「坊ちゃんだつたり、餓鬼だつたり。小僧って、餓鬼より格上じや

ない？

だが、全員の心配は杞憂に終わった。

柔らかだが抑揚の無い声は微塵も変わらず、僅かに充満する砂埃が、視覚で無事を確認させてはくれないが、そこに一切の負傷も匂わせていない。

「我願う、清浄な世界を」

誰かが迅速に魔法を使い、それは直ぐに治まった。そうして、全員がサイードが扉の前で笑っているのを見たのである。

「続きは試合で、ね？」

じゅやつて。誰かが呟くのだがそれに答えることはせず、呆然とサイードと自分が振り下ろした大斧の場所とを見比べる大斧使いに、手で扉を示して促す。そうすれば、彼だけでなく全員がトーナメント表に視線を移すのだが、2人の一つ前の試合には、既に線が1本付け加えられていた。

「俺に、剣を抜けさせてくれよ。やつと「武」の奴とかち合つたんだからや」

どうやら全員が、サイードの暇つぶしに遊ばれただけらしい。ただ、それだけでは無さそうだ。

「良い感じに、狂戦士になれたでしょ？」
バーサーカー

悪戯が成功した子供の様な言葉。刺激を求めていたのか、未だに経験値を求め生贊を作りだそうとしていたのか。はたまた、単純に

昨日の仕返しが。

ルシエは無駄な事はしないと思うのだが、それは過大評価じゃないと信じていい。

だからこそ譲れない

「ファイアドラゴンを倒したとも、ワインドラゴンを退けたとも、数々の噂を持つギルド所属の冒険者。虚勢の狂戦士の異名を持つ大斧使いに対するは、花街から現われたとも思える程に目見麗しく、今回唯一、一度も武器を抜かずに勝ち上がってきた銀髪の青年。その実力は未知数ですが、確実に乙女の心とじく一部の紳士のハートを鷲掴みにしている若き剣士。真逆とも言えるこの2人がどう戦うのか！？ 試合開始です！」

司会の紹介はともかく、サイードと大斧使いとの決着の場は正々堂々な試合へと移された。

とはいっても、端からサイードは敵として認識していないのだろうが、相手の意気込みは相当なものである。

大きな歓声と黄色い悲鳴が響き渡る中、大斧使い……せつかくなので虚勢の狂戦士は、その得物を心を表すかのように片腕で振りながらサイードを全力で睨み付けていた。

対するサイードであるが、どうやら今回も剣を構えるつもりは無いようだ。

それどころか、客席の女性達に爽やかな笑顔で手を振っている始

末である。ここまでくると、舐めているとか緊張感が無いだけでは、その奇行を説明できないかもしれない。何せ、今までのサイードを考えれば、正反対とも感じる振る舞いなのだ。勿論、先ほどの毒を抜きにしてである。

まるで、全力で誤魔化しているというか、装っている気がした。

「もう、助けてくれる大人はいねえぞ」

「別に、さつきだって助けてもらつてないじゃん」

それぞれアピールタイムが終了したのか、向き合つた時に交わされた言葉はあまり意味がない。

いくら浅慮だといつても、虚勢の狂戦士も一介の戦士なのだ。虚勢と付いても、戦士であるのだ。

狭く定められていた戦闘エリアはその5倍程に範囲を広くし、2人は中央で対峙する。四方には、判定とストッパー役である騎士が控え、観客はゴクリと唾を呑んでいた。

「狂戦士の名ぐらい、虚勢じゃないとこ見せてくれよな」

「はつ、早々にリタイアなんかさせねえからな」

最初に動いたのは狂戦士だつた。怒りは消え、真面目な表情になる。しかし、あまり整つてはおらず大きな顔におまけ程度に付いている目は釣り上がりきらついていた。もしかしたら、それが狂戦士と呼ばれる原因なのかもしねりない。

「芸も何もねえでやんの」

狂戦士は、その巨体に似合わない結構なスピードでサイードに突進してきた。しかしそれは、予選での斧使いの動きと同じようなものだ。猪突猛進、一直線。ヒラリと軽い動作でかわすだけで事足りた。

しかし、サイードは思わず瞠目する。その攻撃の威力が、予選の者と段違いだったのだ。

先ほど控え室で壁に亀裂が入っているのはしっかりと見ていたが、あれでも精一杯手加減していらっしゃい。地面が、2メートル強の長さと1メートル弱の深さでひび割れていた。

「筋肉馬鹿もここまでくれば、立派な武器つてことか」

流石にそんな威力のモノを喰らうわけにはいかず、警戒も兼ねて距離を取る。

観客は、その力量に大いに沸いていた。

「てめえが避け続けて地面が壊れるのが先か、俺様の斧が制裁を加えるのが先か」

「試してみろよ」

次にサイードを襲つたのは、その豪腕により振られた斧が生んだ衝撃波だった。どこの少年マンガかと思わずつっこみたくなる攻撃を、またもサイードは跳んで避ける。

しかし、狂戦士はわざとその場で地面に斧を突き刺した。

「うはっ、いいねえそれ」

そのまま着地すれば、亀裂に足を取られて態勢を崩しただろ。サイードは精霊の加護を受け、地面に付くギリギリで再び軽やかに跳ぶ。

一見、その身体は羽のように軽く、飛んでいるようにも風に乗っているようにも思えただろ。風の国の人にとって、とても美しく映るのだった。

「ちよこまかとー。」

しかし、それだけでは防戦一方だ。

衝撃波と地面の亀裂が何度も迫り、エリアの地面はまるで大きな怪物の爪痕のように抉れ、見るも無残なものになる。

サイードはそれでも避け続けるだけで、次第に狂戦士が息切れ大きく肩を上下させはじめた。そこでやつと、サイードの目に攻撃の光が宿る。

「お疲れだつたり？」

「馬鹿を言えー！」

まるで岩がそこらにあるような不安定な足場を駆け抜け、サイードは舌なめずりをしながら狂戦士に迫った。

いくら小物っぽいと言つても、仮にも3回戦まで進む腕を持つているのだ。狂戦士にはしっかりとその動きが映つており、大斧が的確に向かつてくる相手を捉える。

見た限り力は拮抗しているように思え、観客からしたら手に汗握る良い試合だ。2人に対してそれぞれ、声援が降り注いだ。

「甘い、甘い」

「んなつ！？」

崩れた足場を利用して攪乱させながら懐へと向かつたサイードには、大斧の届く位置に入った時、当たれば確実に首が飛ぶであろう攻撃が迫っていた。

己のスピードのせいで止まる事も避ける事も出来ないと思ついた狂戦士にとって、まさかそれが外れるとは思わなかつたのだろう。空振りに終わり、思わず驚きに声を上げる。

サイードは、攻撃をしゃがむことで避け、そのままぐっと足に力を込めて両腕を地に付け、それを軸に全体重を乗せた蹴りを狂戦士の顎に狙いを定める。見事、下から上へと衝撃が狂戦士を襲い、巨体が簡単によろめく。

当然、それだけでは終わらない。そこからば、攻撃のワッショウであつた。

顎の次は鍛え抜かれた胸。さらによろめいた身体に今度は足払いをされ、まるで倒れるのは許さないといつかのように背後へと回れば、背中から一蹴り。

お陰で、後方へ倒れることは回避できた狂戦士であるが、さらにも脇腹に一発喰らい、痛みへのぐぐもつた呻きが零れる。

「まだまだ、終わらねえよ。意識飛ばすんじゃねーぞ、筋肉だるま

スケートリングを滑るような流れる動きで、サイードは再び狂戦士と向かい合つ。ギラリと光る獰猛な視線は、その目見麗しさに似合はず、狂戦士は戦慄した。

どじが貴族だ、お坊ちゃんだ。小僧だ、餓鬼だ。そうやって、己の認識の間違いにやつと氣付くのだが、今更遅い。彼はもう、獲物

として狩人^{ハンター}の標的^{ターゲット}となつてゐる。

「おり、俺に剣を抜かせてみろよ」

最初の一撃で脳が揺れ、視界が定まらない。それでも狂戦士は、サイードの言葉に口の誇りを刺激され、まだ持つていられた大斧を振つた。

「それで終わりとか言つんじゃねーよな！」

耳が笑い声と共に危険を訴え、視界が決定的にそれを教える。狂戦士がなんとか意識をしつかり保とうと頭を数回振れば、目の前には爛々とした視線と末恐ろしい笑みを携えたサイードがいた。

「うおおおおおおお！」

「んだよ、やっぱり小物じゃねーか」

一際大きな歓声。狂戦士が雄たけびを上げて精一杯”虚勢”を張るが、先ほどまでの派手さに比べて呆気なく試合は終わつた。

最後にサイードが、狂戦士の腕に右足を振り下ろし、すかさず腕にも一撃入れて大斧を落とさせ、それを軽々と持ち上げて持ち主の首に添える事で。

「勝者、サイード！」

まだ、氣絶する方が楽だつたかもしれない。無様に地面に伏せた方が、受ける屈辱は少なくなつただろう。

進行役の勝敗を告げる高らかな声が響く中、狂戦士は目の前の青年に視線を縫い付けられていた。

彼が大斧を持てるようになるまでに鍛えなければいけなかつた力は、その青年の肉体では到底無理なレベルのもの。片腕で振り回せるようになるまで、驚く程の時間と修行を必要とした。

負けたことに驚いたのか、見た目にそぐわない腕力に唖然としたのか。ただひとつはつきりしているのは、サイードにとつて狂戦士の大切な相棒は、自分の腰にぶら下がっている玩具と同等だということだろう。勝敗が決まつた合図で、最早用無しだとぞんざいに放り投げて背中を向けたのだった。

「精々這い蹲つて泣けばいいさ、三下さん」

ドスン、と2人の間に大斧が落ちる。その音の裏で、サイードらしい傲慢な言葉が槍のようなくるに狂戦士に突き刺さる。しかも、大斧の奥から見えた表情は、馬鹿にするというより心の底から見下した笑みだつた。

「くつ、くつそおおおおおおおおお...」

狂戦士は、悔しさよりも憤りを感じた。確かに彼は己を過信し、天狗になつていた。自分より大きな斧を振りまわせる奴はないだろう、パワーに勝る者はいないだろうと。それでも彼は、立派な戦士だつたのだ。

ある時は足の悪いお年寄りを背負い、ある時は畠を荒らす大型の動物を退治し、流石にドラゴンを倒したというのは勝手に流れていった噂であるが、襲ってきたドラゴンから行商を守つて逃がしたことはある。決して悪人だつたり、ならず者だつたわけではない。

だというのにだ。見た目軟弱なサイードは、いくら怒りに満ちて悪意を向けていたといつても、対戦相手に対する最低限の敬意も、

「己」のプライドも、戦士としての構えも何も持つていない様に感じた。ただ遊び、翻弄し、勝手に飽きて終わらせる。勝者として驕らしいことは褒められるだろうが、敗者への労いも何も持たず、ただただ見下して晒うだけ。

そんな感情が溢れ、狂戦士は拳を地面に叩きつけて蹲った。

観客は、2人を勝者と敗者でしか見ない。故に歓声は收まらず、馬鹿みたいに叫ぶだけだ。

サイードは、とっくに控え室に向かい退場し始めていた。狂戦士は、少しだけ顔を上げてその背中を睨む。

全身に蹴りをくらっているが、威力は頸の一撃以外は大したダメージになつていなかつた。だからこそ、大斧を持てた事に驚いたのだが、それよりも彼の心を巣食つたのはまだ戦えるという鬪争心。

ゾワリ、と狂戦士の雰囲気が一変する。

「待ちやがれ！」

腹の底から叫ばれた声に、肩を貸すと駆け寄つて来ていた騎士達が止まって怪訝な顔をした。

「納得いかねえ！俺はまだ戦える！」

何百もの歎声に負けないその訴えは、観客すらも黙らせた。しかし、サイードは立ち止まりも振り返る素振りさえも見せなかつた。それでも構わないと、狂戦士は立ち上がる。2歩ほど歩けば、直ぐに大切な武器を掴む事が出来た。

彼は、不穏な雰囲気を察知した騎士の制止の言葉を無視し、血走

つた田で尚もサイードを睨む。

「試合は終わっただ。」从から先は、ただの戦いだけ?」

そこで、といどりサイードが反応した。殺氣を向けられて、試合だからこれ以上は無じだと常識的な言葉を吐けるほど、寛容な心を持ち合わせていない。

田には田を、歯には歯を。狂戦士も、今の言葉の意味を理解していた。

しかし、それぐらいでは止まれなかつた。

「剣を抜きやがれっ!」

確実に殺傷能力のある衝撃波が5つ、騎士の制止も空しく放たれる。それはまるで檻の様に逃げ場を塞ぎ、サイードを取り囮む。

悲鳴と怒号、お祭り騒ぎであつた会場は騒然となつた。

サイードが振り返つたのは、衝撃波がほとんど田の前に迫つた時だつた。跳んで避けようにも、その攻撃の高さは優に3メートルは超えている。流石のサイードも、その高さを怪しまれずによく越えるのは無理だつた。

さらに、衝撃波の間を縫つて避けようにも、その隙間に誘われた一枚の葉が粉碎されてしまつたのを見て無理だと諦める。

試合で繰り出されていたものも大分加減されていたのだと、観客はこの時やつと悟つた。なんだかんだで狂戦士は常識人であり、決して殺そつとは思つていなかつたのだ。

当たれば死ぬかもしれないという攻撃も、予選でサイードが行つたように、相手が避けられると確信していたからこそもので、ただ

単に自分を認めさせたかったのだらう。

ウイーネ杯という、戦いではあるが一種のスポーツを披露する場で誠意を欲した。

力の優劣は当然ある。だが、サイードの言動、視線は、人として見ていなかつた。狂戦士だけでは無く、出場者全員を。どうでも良いと、愛想の良さそうな青年の仮面の下で語つていた。

他の参加者もそれは感じていたが、彼等と同じように黙つて見過ごせる程、狂戦士は懐が広いわけではない。

ただ、控え室の一件で、サイードがもっとマシな態度を取つていれば、こんなハプニングは起きなかつたはず。苛立ちの仕返しなのだとしたら、2倍返しではすまされない。

「正当防衛つてことで、構わないよな？」

一般の観客の誰もが、若い青年が衝撃波の犠牲になる瞬間を見ないようにきつく瞼を閉じる。

何人もの魔術師が防御の魔法を発現させるが、間に合うかどうか。そうしている間に、5つの衝撃波は湾曲して鳥籠のようにサイードを包み、一気に閉じた。

四方を囲まれ、逃げ場は無かつた。

「三下は撤回してやるよ。そん代わり、あんたは冒険者じゃなくなつたけどな。ルールは守らなきゃいけない、だろ？」

轟音と共に砂埃が舞い、何人もが身を縮めて悲鳴を上げた。しかし、その耳に聞こえたのは、肉を切り裂く音や、まして断末魔でも無かつた。

ただ、安堵も出来なかつた。派手に舞つた砂埃の中からひとつの塊が飛び出してきたのはよかつたが、それはかなりの速さを出して狂戦士に向かっていく。

さらに、狂戦士も騎士が取り押さえられず、塊に大斧を構えて突進する。

最早これは試合では無い、死闘だ。

砂埃の中から出でてきたのは、当然サイードである。その身体は、至る所に細かい裂傷を作つていて、陶器のような肌を赤く色付けている。

頬から流れてくれる血を舐め取る姿は、仮面が剥がれて本性が剥き出しであつた。

「やつぱ、お遊戯じやあ面白くねえよなあ！」

その手には玩具の剣が握られていて、サイードはそれで大斧の一撃を受け止める。ピシリ、と不穏な音が耳に届くが、まったく気にしていない。

狂戦士は既に言葉らしい声を出しておらず、攻撃を止めた剣を鬱陶しそうに力押しした。

サイードは、一体何をしているのだろうか。その身体は僅かに風を纏つており、髪が不自然に靡いていて、もし狂戦士や周囲が冷静であつたなら一日で不審に思つただろう。

単純に、風の国に来てから溜まりに溜まつていたストレスが爆発しているのであればまだ良いが、自分で作り出した3つの人格のせいで精神のバランスが壊れているのだとしたら。今の様子では、あ

ながら外れていなさそうだから恐ろしい。

「そこまでだ！」

そして2人が一度距離を取り、再び打ち合おうとした時。客席の最前列、一際豪華で護衛も立たせている来賓席から一人、その間に飛び込む者がいた。

その者は、右手の剣で狂戦士の斧を止め、左手でサイードの剣のグリップを握つて抑え、2人に負けない闘志を纏つて叫ぶ。
瞬間、客席は一気に安堵したのである。まるで、彼が出てこればもう大丈夫だというように。

「伝統あるこの大会で、そのような態度をされては困る。両者、武器を收めるんだ」

「俺、死ぬところだつたんだけど」

「だつたら尚の事、私がさせないから引きなさい。これ以上は見過^じせ無い。当然、その懷に忍ばせている武器からも手を離すんだ」

凛とした響きの声は、一切の反論も認めなかつた。興ざめしたの^カサイードは、やれやれと溜息を吐いてあつさりと引き下がる。
対する狂戦士は、それでも引けないのか息を荒げて睨み続けた。

「君の気持ちも分からぬいでも無い。」この青年は、目に余る言論と行動ばかりだからな。当然、控え室での報告も上がっている

肩を竦めて心外だとサイードは思うが、それには口を挟まずに大人しく剣を鞘に仕舞つた。そして、一斉に駆け付けてくる騎士達に

小言をもらひながら怪我の度合いを診てもらう。

その間にも、狂戦士を宥める言葉は続いていた。

「だが、だからこそ、自分の信念を揺らがせるな。こんな相手の言葉に耳を貸すぐらいなら、素振りでもしていた方が何倍も口の為になる」

「おい。流石にそれは、俺に対して失礼すぎやしないか？」

狂戦士は、その者の言葉でやつと斧を下ろし、周囲を騎士で固められながらも退場した。

となると、サイードは間に入つて来た者と必然的に向き合わなければならなくなるのだが、襲われたのは此方だというのに、あまりの物言いに思わず目を細めた。

その金の瞳には、相手の姿が映されている。クリーム色の髪にピーコックブルーの瞳をした彼は、忘れたくとも忘れない、憎きウイーネ騎士団団長レイスだ。

「全力で殺そうとしていた者が、偉そうに。私を欺けるとでも？」

サイードは、傷の手当てをと救護室へ連れて行こうとする騎士を払いのけ、目の前のレイスに言つ。

流石、民に人気の騎士様だ。かなりの歓声がして、サイードが五月蠅さに眉間に皺を寄せた。それでもレイスは、二口ひと皿だけは笑わず微笑む。

「まさか素顔でいるとは思わなかつたし、この大会に出ているのも予想外だつたけどね」

「ちつ」

「……でやつと、サイードがこの大会でサイードらしからぬ振る舞いを多々していた理由が分かった。

考えれば直ぐ分かつことなのだろうが、レイスが騎士団長であればお偉い方の一人として観戦していても当然なのだ。しかも、よくよく来賓席を見れば、お姫様もそこにいらっしゃるではないか。

だからサイードは、悟られないように振舞っていたのだ。まあ、堪え性が無さ過ぎてどうやら問題児として報告が上がっていたようで、しかも、その努力空しくしつかりバレていた様だが。

「何を考えているのかは知らないが、もう少し賢く立ち回ってくれよ」

「何故、お前の事を気にしなければいけない？　俺を探していたみたいだが、こっちは何の用も無いしな」

苛々と、腕を組んで貧乏ゆすりをしながら返すサイードと、余裕綽々、威厳たっぷりのレイス。2人に面識があることにレイスの部下達が驚くが、それ以上に、普段は柔軟な彼がサイードに対し、嫌悪感を剥き出しにしていることに慌てている。

どうやらその中に、あの森に居た者はいないようだ。

そろそろ次の試合の為に場を開けるべきなのだが、丁度、大地の精霊と契約している魔術師がエリアの修復を行つ為に空いた時間が生じ、2人の会話は続けられた。

「何故だつて？　色々とやらかしてくれたくせに、よく言つたものだ」

強烈なブリザーブが吹き荒れる。レイスは未だ、サイードのあの時の所業を根に持っている様だ。ただ、捕らえるつもりは無いのだろ、ひ。

「やらかしたも何も、助けてやつただけだろ。無事、森を抜け出せたみたいで何よりだ」

サイードもサイードで、レイスと関わり合いたく無い様子。そつと来賓席に視線をやり、お姫様が自分を見ている事に気付いてもう一度舌打ちをしている。

「危うく迷つてしまふところだったよ。さて、それよりもだ。一生懸命別人だと装つていた様だけど、こうしてバレバレだつたと分かったのなら、剣もそんな鈍らを使う必要が無いんじやないか？」

いつまでこんな奴に付き合わなければいけないのだと思うサイドだが、大勢の人間の前では、レイスにこれ以上の礼儀を欠く態度を取ることが許されない。

自分の努力を無駄だと言われ、だから何だと視線だけで返すのだが、彼は気にせずサイードの指輪を目で示した。

「特例として許可しておくから、ソレを使うが良いさ。そして是非とも優勝してくれよ？ 私には、君に聞きたい事が幾つかあるのね」

その申し出はとてもありがたいものだつたが、後半の言葉には面倒事の気配がたっぷりと込められていて、思わず零れそうになつた暴言を必死に呑み込むサイードであつた。

「明日の決勝と『モンストレーション』、楽しみにしてるよ

そして、レイスは実に優雅に、尚且つ上目線で、再会を喜びながら自分の席へと戻るのであった。

逆にサイードは、今までで一番機嫌を悪くし、腰の剣を乱雑に投げ捨てながら退場した。顔は若干に俯き、何も無い先を激しく睨みつけるのだが、髪に隠されぎみの瞳の方は、隠しきれ無い感情のせいか金と赤に忙しなく変化していたのである。

カウントダウンと蚊帳の外

女は焦っていた。

たつたひとつ田標の下、何年も必死に努力し苦労し、やつとこのウイーネ杯に出場することが出来、無事に本戦に出場して準決勝まで進んだのだ。

舐められてたまるかと、男装をして剣士だと油断させる為に偽装までして。結局それは、思わぬ形で初日に意味を無くしさしたが、それでもだ。

ここまできたら、何が何でも優勝しなくてはならない。その為にプライドも捨て、人としての常識も無視し、汚い手まで使ってきた。

しかし、後一歩といつといふで、初日に抱いた不安が現実になろうとしている。

「ああ、忘れてた。昨日はわざわざ俺の為に、トルッテをありがと
う」

田の前の、何の力もなさそつな不真面目な青年によつて。

それは女の勘だったのか、精靈の警告だったのか。女 男装魔

術師は、額に流れる汗を拭う余裕も無く、恐怖を押し殺す様に唇を噛み締めていた。

「さっきまでだつたら、少しほとぎすが減るかと思ってたんだけどね。だけど、今、俺、相当此処にきてるんだわ」

準決勝の相手は、彼女の内でかなり高く危険視されていた。始めは見た目から舐めてかかっていたのだが、その行動と言動、僅かに垣間見た本性に危険な臭いを感じていた。ただ、現状はあまりに予想外。

此処、と言いながら、自身のこめかみを示したサイードの目は、まるで憎悪を叩きつけるかのように男装魔術師を見据えていた。

「喜んでくれたみたいで、よかつたわ」

氣丈に返してはいるが、彼女は今にも氣絶しそうな顔色をしている。本人の意思を無視して身体は震え、声も弱弱しかった。

「くはっ！ そんなに怯えるなよ。別に取つて食いやしないし、あんただつて、あの糞野郎に良い感情は持つていねいだろ？」

糞野郎。それを示す相手を、男装魔術師はよく知っている。いや、知っていた。

そして、その者こそが彼女の目標でもある。

男装魔術師の視線は、僅かにその者の方へと映り、サイードも同じようにその方向へと動く。そこに居るのは、レイスであった。

彼女と同じクリーム色の髪に光が降り注ぎ、美しく反射している。しかし、レイスの瞳は彼女を映してはくれない。

「似てるな、とは思つてたけど。本当に血が繋がつてるとほねえ」

「……繋がつているだけだわ」

言い不得て妙だな、とサイードは晒う。

男装魔術師の目標は、優勝者に与えられるウィーネ騎士団団長との手合わせの権利を勝ち取る事であった。3日目に行われるそのデモンストレーションで、彼女が生まれて直ぐに養子にいつてしまつた兄と、会話がしたかったのだ。

権力を欲し、家族を捨てて自分だけ贅沢をしている兄に一矢報いたかつた。

だからこそ、危険に思えたサイードに対し、差し入れとみせかけて少し強力な痺れ薬を盛ったトルツテを渡した。他の対戦相手にも、密かに反則行為をとつたりした。

ただただ、地位など無くても強くなれると見せ付けたかつた。

「別に、今更運営側に密告する気なんて無いから、そこは安心しなよ」

サイードはそう言つて、剣のグリップに触る。それは、3回戦まで装備していたものとは違い、正真正銘の愛剣だ。

「剣が変わってるけど?」

「あんたのお兄さんの計らいでね」

男装魔術師は、戦いが始まる、と神経を尖らせ唇を舌で軽く湿ら

せる。相手が魔術師との相性が良いのか、1回戦と2回戦を短時間で終えているのを知っているので、微塵も気が抜けない。

「策士といつより、道化だわ。何よその剣、詳しくない私でも普通じやないつて分かるもの」

「道化、ねえ。それ、ローブのおっさんにも言われたわ。この剣についてには、そうだな。むしろ、魔術師だからそう感じるんだろうな」見ただけなら、感嘆できる程に美しい。ただ、男装魔術師にはその剣が、とてつもなく恐ろしい物に見えた。
ゾワリと背筋が凍り、触れる事すら拒まれそうな気配を感じる。恐れ多いとはこういつことか、と思える程だ。

「ま、いつまでも話してゐるわけにもいかないし、そろそろ始めよ」
「ぜ」

「氣を抜けば、無意識に後退してしまいそうだ。男装魔術師がそう思つて氣合を入れ直すと、見計らつたかのようにサイードがそう声を掛けてきて、ハツとする。

「悪いけど、さつとも言つたとおり手加減できないから。あんたとあの野郎は、仲良しな兄弟じゃないみたいだけど」

「我、えひ。契りの下にその力を！」

男装魔術師が詠唱を開始するのを待つて、サイードは試合では今回初めて最初から剣を抜く。

そして、余裕そうに立ちながら「それでも」と続けて、戦場に立つたことも人を殺した事も無い彼女に対して全力の殺意を放つた。

「似てるつてだけで、腹が立つ」

「迫る敵を薙ぎ払え！」

出し惜しみはしない。その意気込みを表すように、会場に大きな竜巻が発生した。

精靈はどの国でも色々な種類が存在している、といつのは誰もが知っていることだ。ただ、相性として国の持つ精石の眷属と民が一番であり、結果的にその国に属する魔術師はその属性の者の割合が多い。

男装魔術師もその一人であり、彼女の精靈は風の属性である。

ここで、魔法に於いての魔力と精靈について、少し説明をしておこう。

魔法とは、魔力を媒体に精靈の力を具現化させるものであるが、何故精靈の力は単体でそれを發揮できないのか。それは、王以外の精靈は、ある程度の差はあるど、世界に影響を及ぼすことが難しい程に微弱なものだからだ。

それこそ、陽の精靈であれば一本の草すら燃やすことも出来ず、風の精靈であればそよ風ぐらいしか生み出せない。

理由としては、これはサイードの推測であるが、精靈は存在することが全てであるからだと考えられる。

存在するだけで、世界は保たれる。存在していれば、世界が成り立つ。だから、それ以上に発展しない。

ただ、そこに魔力が混ざれば違つてくる。

精靈の力は魔力とは別。魔法こそが精靈の力であり、魔力は本来

の魔法を増強させる役割を担う。

その量と質、魔法そのものである精霊との相性。それにより威力の優劣、上下が発生し、魔術師の力量となる。

これは、またもやサイードの推測であるが、人間が強い意志を持つてあり、尚且つ精霊とは真逆の存在だからこそ可能となつたのではないか。そう考えられた。

何故なら、魔力そのものはアピスの空気中にも含まれるし、命あるもの全てが有しているものなのだ。

しかし、例えばキー・テと精霊が契約を結ぶことは不可能であり、精霊が勝手に魔力を奪う事も出来ない。

人間だけが成せる技。そう言えばとても素晴らしいものに思えるだろうが、捉え方によつては精霊の良い非常食。そう考えてしまうのは、サイードだからか。

とはいゝ、魔法のお陰で人の生活が発展しているのも事実だ。

農業、商業、武力。様々な分野で魔法は、その素晴らしい力を人に実感させてきた。だからこそ、最早切り離せないものになつていてる。

と、少し語りすぎてしまつたが、その精霊の力の増強剤である魔力で男装魔術師を評価すれば、彼女は純血種でないというのに中々優秀であった。

魔力は生まれ持つもので、その質を鍛錬によつて向上させることはできるが、量はどう頑張つても増やすことが出来ない。

彼女が放つた竜巻を起こす魔法は、規模でいけば、才能の無い者だとその一発で1週間は寝込んでしまう程のものだった。

「運も実力の内だつたつけ？ だつたら、あんたは運が無かつたつことだらうな。俺とあのロープのおっさんが居なければ、優勝も

狙えただろ？よ

竜巻は、サイードに向け意思があるかのよつに迫る。男装魔術師はその制御を行いながらも、さらに別の魔法を行使するために口を開いた。

「我、『んづ。彼の者に絶望を』えたもう刃を」

「人間相手には初めてだな。この剣の本領を發揮できんのは」

サイードは当然、男装魔術師の契約精靈に対し今までの相手と同じくお願いをしている。ただ、今回は魔法の規模が大きすぎ、巻き込まれるというかたちで避けることが無理だった。

しかも、続けての魔法は、竜巻をまるでミキサーにするようなえげつないもの。竜巻に巻き込まれて、それも精靈の制御下を離れる。魔法は精靈が操れるが、魔力は術者の領域。

これもまた、控え室で見つけた対人間への懸念であつた。

「ま、別の目的で用意していたのが、功を奏したつて感じだけど」

「私の為に倒れなさい！」

男装魔術師が叫ぶのと、竜巻がサイードを呑み込むのは同時。ただ、それが実はサイードが自らそこに突っ込んだのだと、彼女は術の規模が大きすぎたせいで気付けなかつた。

「やつた……？ なつ！？」

「『んづそつさま』

竜巻の中にサイードが消えたのだけは分かつていていた男装魔術師。自然に収まるのを待つていればもれなくサイードがミニンチになってしまつので、死ぬ前に魔法を消そうと魔力の供給を止めた。すると、徐々に規模を小さくしていく竜巻だったのだが、その中心に黒い影が見えてくる。

彼女の予想としては、かなりギリギリの満身創痍で立っているか倒れている姿があるはずだったのだが、それは見事に裏切られた。

「やつたか、は死亡フラグの代名詞つってね」

僅かに乱れた髪をかき上げるサイードは、まつたくの無傷であった。

しかも、手に持つ剣は始まりより明らかに輝いており、プレートは銀から緑を帯びた色に変わっている。

「魔力を、吸つた……？」

男装魔術師は愕然とする。アピスの世界に存在する物質の中には、魔力を吸收したり宿したり、精霊の加護を受けることが可能なものがある。

しかしそういったものはとても希少価値が高く、偶然それが可能だつたと説明するしか無いものがほとんどだ。滅多にお目にかかるような代物では無い。

「惜しい。魔法を喰つた、が正解」

「くそつー。」

相性が悪すぎる。男装魔術師は、自分の運の無さに苛立つた。

魔力を吸うだけであれば、その許容範囲を超えるまで魔法を放てばいいだけだ。そこまで難しいことでは無い。

しかし、サイードは言ったのだ。喰つた、と。

だったら、お腹一杯になるまで同じようにすればいいと思つかもしれない。俄か魔術師であれば、そうしただろう。

ただ、喰つところとは消せるところと。そして、わざと喰いきらうに貯めることも出来るのではないか。

男装魔術師の脳内では、そんな最悪な予想を導き出していた。

「女の子がそんな汚い言葉を言つたらダメだつて。婚期逃すぞ」

「ふざけるなー！」

そして、男装魔術師が魔法を使つて躊躇した隙に、サイードは僅かに残る竜巻から抜け、彼女に向かつて走った。

「我、ひづ。我に降る災いを遮る盾をー！」

慌てて、手を降つて風の盾を作り出す。

怯む事も無くそのまま向かつてくるサイードに、先ほどの予想が当たっていたのかと男装魔術師は恐れた。

「我、ひづ。断罪し正義の槍をー！」

しかし、それでも勝ちたいといつ気持ちは消えない。盾を前方に配置しつつ、サイードの足止めをしようとした幾つもの風の槍を落としていた。

「……避けてる？」

そこで、ひとつ違和感に気付いた。

恐らくサイードは、先ほどの竜巻は剣を使って対処したのだろう。しかし、風の槍はただ避けているだけだったのだ。避けきれないものは剣で防ぐが、それも弾くだけ。

魔法を喰つた、と言っていたのだから、そんなことをするよりも喰わせたほうが何倍も楽だろうに。なのにそれを何故しないのか。

「まさか。剣がすぐとも、あの子の魔力が低すぎて使いきれてないとか？」

宝の持ち腐れ。男装魔術師の頭に、その単語が浮かんだ。
だったら

「当たれば勝てる！」

槍の数が増した。

サイードは器用に全てを避け、弾くのだが、活路を見出したと思つている男装魔術師には気持ちに余裕が生まれている。

彼女の考えたことは、半分正解だった。

サイードの剣は、対精霊用にと元々作られていたもの。それが、本人も言つていた通り対魔術師にも有用であり、竜巻を無傷で対処できたのである。

効果として、あの剣は魔法を吸収して蓄えたり喰つことが出来るのだが、それを発動させるにはサイードの魔力が鍵となるのだった。そして、蓄えた魔法はその行使権を術者からサイードへと移し、

溜まつた分だけ同じ効果の力を放出する。

確かに現在のサイードは、魔力をほとんど持っていない。種はやつと芽を出そうとしている、ぐらいだからだ。

ただ、サイードは溜めたその力を解放していないだけで、出来ないのではない。だから、半分正解だ。

「やっぱ、学のある奴と戦つた方がいくらか楽しいんだよねえ」

「なんで当たらないのー？」

「そりや、当たりそなのは喰いつつ弾いてるし、俺があんたの方に向かっていってなければ、絶対に当たらないからだよ」

最早、槍というよりは殺傷能力のある豪雨が降つてているぐらいの規模になつてしているのだが、サイードはかすり傷のひとつもしていかつた。

そして、剣の色もより濃くなつていて。

「我、ハツ」

「盾、ちゃんと魔力込めないと危ないよー？」

男装魔術師は、別の策を講じることができなかつた。詠唱途中で、サイードが目と鼻の先に迫つたのだ。

本人は、予想以上にそこまで辿り着くのに時間がかかつたと思つてゐるのだが、彼女からすれば短時間。攻撃を避けながらにしては、あまりに早かつた。

「ハツ！」

「お、ナイス反射神経」

危機一髪、盾がやつとその役目を果たした。

ガツンと剣がぶつかり、敵を押し離そうと盾が風を放つ。

「笑う、な！ だから君は舐められるのよー。」

普段であれば男装魔術師も乙女だ、美男子が目の前にいれば赤面していただろう。だが、今の状況では、今のサイードの表情には、そんな気がまったく起きない。

剣は怖い。負けるのも嫌だ。そして、彼女自身は崇高な目的のために必死になっている。

この戦いが始まるまでは、あの狂戦士を自分も馬鹿にしていたが、こうして対峙してみればその気持ちが十分すぎるほど理解できた。

「そんなこと言われても、楽しまなきゃ無理なんだよ」

そして、憤りを込めて男装魔術師が叫び睨み付けた。
その時、目の前の表情が消える。

笑っていた顔は何もかもを無くし、片方しかみえていない瞳が男装魔術師を景色から除外する。

憎しみ、不満、恐怖。負の感情全てがそこにある、そう思つた。

「いいじゃん、少しぐらい遊び感覚でやつたって」

それは、誰に対する言葉だったのだろうか。男装魔術師に向けてじゃないのは確かなのだが、そう言つた直後にふわりと柔らかく

微笑んだサイードは、再び彼女に意識を戻して「ね?」と同意を求めたのだった。

これには、男装魔術師も思わず赤面してしまった。あまりに優しく、柔らかく、美しかつたせいだ。

「え? あ……」

心の中で馬鹿にされているとも知らず。

「あなたと俺、その目的の桁が違いすぎるんだよ」

風の盾が、その強度を大分弱めているのにも気付かず、男装魔術師はその道化師が作り出す嘘にのまれた。

「たかだか、お兄ちゃん一人を見返すだけのソレと比べられるなんて、俺を馬鹿にするのも程があるつづーの」

そしてサイードは、瞬時に剣を逆手に持ち替え、溜めに溜めていた魔法のほんの一欠片を引き出す。

「がつはつ……！」

そうすれば、風の盾は簡単に破られて、剣のポルメが男装魔術師の腹部にめり込んだ。

彼女はあまりの衝撃に身体をくの字に曲げ、ドサリと倒れる。

見開いた目は生理的な涙を流し、突然のこと驚いた体内が悲鳴を上げて嘔吐させた。

「てめえらは、どれだけ俺を苛立たせれば気がすむのかねえ。今更

謝つたつて、赦す気はないけどさ」

薄れゆく意識の中、男装魔術師が聴いた言葉は低く地を這う怒りそのものだ。それに対し、彼女は思つ。さらに蹴られないだけマシだな、と。

「勝者、サイード！ サイード選手、見事決勝戦進出です！」

この大会が終われば悲劇が始まるといつに、目前となつたカウントダウンにも気付かずに、脇役であり後の犠牲者となる民衆は、サイードに大きな歓声を送つていた。

その夜。一人の少女が覚悟を決めていた。

「もう、後戻りは出来ませんね。終わらせてしまってましょ。」

自分の身長の3倍ぐらいある窓の外の月眺めながら、その子は

泣いていた。

ただ、泣きながらも大人でも出せないような威厳と強い意志を持つて微笑んでいた。

そして、建物を同じくして別の場所では、一人の男が酒を煽りながら闘志を燃やす。

「あの男だけは放置しておけない。あのお方の為にも」

剣を掴みながら見据える先には、残酷にも彼に必死の想いを抱いている者の姿は微塵も無かつた。

リサーナでいるのをやめて、サイードで行動するようになつてから拠点となつた森の中では、ルシエが静かに寝息をたてている。ルシエは知らない。彼に対し、色々な想いが向けられているなど。精霊は必要なことしか教えない。それはある意味無情で軽薄で、とても軽い関係なのだった。

何の為に剣を持つ

風の国で催される3年に1度の大会、ウイーネ杯。

今年度は3日間全てが晴天で、尚且つ例年以上に白熱する試合が繰り広げられていた。

本戦進出確実、優勝候補と噂されていた弓の名手はまさかの予選敗退となり、誰も意識しなかつたダークホースが2人、決勝戦に勝ちあがつたのだ。

どちらも、今まで何の功績も残しておらず、無名も無名。

観客は大いに沸き、賭け事に興じていた貴族のほとんどが泣き、大穴を狙つて2人の内の片方に賭けていた没落寸前の貴族が決死の祈りを抱く。

影でそんな事が起こつていたりもするが、何にせよ、国を挙げての祭りは今日で最終日を迎える。

この日だけは周辺の店は概ね臨時休業となり、屋台に力を入れ、最後の稼ぎに期待を注いだ。

「本日も、驚くほどの晴天！ 風の精石も、この予想外な展開に喜んでいるのでしょうか！ まずは、未だ全身をロープで包み、その全貌を隠し続けている謎の男。大剣を軽々と、そして優雅に扱いながらここまで進んだ剛健な剣士は、その貫禄を崩すことなく戦えるのか！？ 皆さん、大きな声援でお迎え下さい」

残すところ後1戦となり、今日は進出者は顔を見合わせないよう

に其々に控え室を与えられている。その為、会場への入場も別々で、まずは大剣使いが大地を震わせそうな大きな声援を一身に注がれた。

試合の時だけ、ロープの下で背負っている大剣をその上に装備し直す姿勢は、格下であっても備えだけは怠らない律儀さを思わせる。主に一人の青年が起こしてきた色々な波乱、そのせいで騎士により最終のルール確認をさせられることになったのだが、大剣使いがそれを受けている間に、観客の視線は南側にあるもうひとつの中場口へと移っていた。

「さて、皆さんが待ちきれないということで。対するは、意外や意外、魔術師の出場人数が上回る中、「武」の部門同士での戦いとなりました！ 準決勝でとうとう剣を抜き、華麗な舞いで相手を翻弄。甘いマスクの下には、獰猛な狼が潜んでいたのか？ 大剣にどこまでその細腕が食らい付くのか、黄色い声援が会場に響きます！」

そこから出てきたのは、シルバーの髪を風に遊ばれながら颯爽と歩く青年サイード。

レイスにバレたことで裝うのを止めたのか、観客に何の反応もみせず、にスタッタと開始の位置まで歩いていく。表情も、冷たい気配を纏っていた。

サイードに対しても、むしろサイードの為に、特に念入りに最終確認をしようと駆け寄る騎士だったが、鬱陶しいの一言で拒絶されている。

その威圧感がまだまだ新米を抜けたばかりの騎士にはダメージが大きすぎ、任務を真つ当することが出来なかつたのだが、誰が彼を責められるだろうか。

この時のサイードは、本当に我慢の限界を超え、自分本位な虐殺を

抑えることに全力を注いでいたのだから。

あくまでその身にあるのは、精石の解放。そして、それに対しての共犯者はいるが、感情だけの所業はデルの役割には出来ない。ただの虐殺は、本人にしか責任を負えないものだからだ。

何も知らない観客達は、それでもそんなサイードに、決勝で気負つていいのだなど勝手に思つて勝手に好感を抱くのである。

「おめでたいにも程がある」

最早、観客にも騎士にも、律儀に説明を受ける大剣使いにも苛立つていた。

そんなサイードの感情につられ、周囲の精靈も騒ぐ。ふわり、と小さな風しか起きないが、剣は昨日の男装魔術師の魔法を蓄えたままなので縁の光を漏らし、あらうことか片目は僅かに縁に変わる。どうやらサイードは、精靈と同調し易いようだ。そして、それが瞳に出やすい。

こんなことまで予想して片目を髪で隠しているわけじゃないのだろうが、感情の変化が激しそぎる点は弱点にしかならないだろ。激情していようが、冷静に事を運んでいく冷徹さは賞賛に値するが。

「ちゃんと言い付けを守ったみたいで安心しただ

「別に。あなたの為に勝ち上がったわけじゃない

ただ、この決勝戦だけは今までと少し違う。

それは、対戦相手がサイードより明らかに格上で、もう立ち位置として今まで勝利してきた敗者と同じ場所にいるところなのだ。恐らく、玩具の剣では歯が立たなかつただろう。

「若いつてのは罪だねえ」

最終確認が終わり、進行役が2人の今までの戦い方や勝ち姿を力説していた。

その間に繰り広げられる会話は、ポジションに付いた騎士にすら聞こえない。

「これだから年功つて言葉は面倒くせえんだ」

「俺もまだまだ若輩者だがな」

サイードは、スラリと剣を抜いた。

カチャリと一鳴きしたその剣は、前方ではなく身体の横でエッジを下に向けて構えられる。

「良い剣だ。意志がしっかりと込められているな。ははっ、その意志が歪んでいいが。剣は使い手を選べん」

大剣使いは楽しそうに笑った。

強者の余裕か、経験からくるものか。まるで、幾重にも師事を施してきたような姿だ。

「歪んでいて結構。俺は、誰かに褒められたくて動いてるわけでも、息をしているわけでもない。賞賛や同情、同意を求める程度の志など、持つだけ無駄だ」

「良いねえ。その年でそんな言葉が吐ける奴はそうそう居ない。そうだ、良い子ちゃんには誰だつてなれる」

大剣使いは腕を組み佇むだけだった。

それでも纏う闘志は逸脱しており、サイードを確かに対峙するに値すると認めている。

「俺に剣を抜かせてみろ、小僧」

そして、進行役が試合開始を告げた。

「どうやらが勝つと思しますか？」

最前列で尚且つ会場の全てが見渡せるベストポジションの客席、来賓席で少女が自分の騎士に問いかけた。

といつても、その騎士も招かれる側なので隣に座っている。

「そうですね、経験や姿勢からいえば、恐らく大剣使いの方が優勢でしょう」

「でも、貴方は青年に勝つてほしい」

少女はそう言って、隣の騎士に微笑んだ。

騎士はどこか悔しそうに眉間に皺を寄せながらも、そうですねと素直に返す。その視線は、一挙一動を見逃すまいと戦う2人に釘付けだ。

本来であればそれは少女の立場からは無礼であるが、彼女は咎める浅慮な行為などせず、自分も視線を戻して大剣使いに攻めていく青年を眺める。

彼女にとって、試合そのものよりもその青年を見ることが重要であつた。

「姫様は、どうしてここまであの者を意識するのですか」

「理由は説明しましたでしょう？　レイスだって、驚きながらも受け入れたではないですか」

その会話は、この2人にしか理解できない内容であった。本当の意味を知ればこのような大勢がいる場で話せるようなものではないのだが、例え会話の断片を盗み聞きしたところで、まったくといっていいほど汲み取れないからこそ大丈夫なのである。

髪と瞳の色に良く合つシンプルながらに豪華なドレスを身に纏い、お姫様は微笑んでいた。そこに、我侭姫と既に馬鹿にされるような姿は微塵も無い。

「会わなければ、それで済みました。しかし、アレは危険すぎる」

「何が危険で安全かなど、最早関係ない次元に事はあります。それに、私はあの青年がそこまで浅はかだとは思えません」

その2人の会話に拳がついている青年は、大剣使いに奇抜な剣技で何度も攻撃を仕掛けている。

全てを見事に避けられているのだが、その目には焦りも憤りも映っていない。勿論、余裕があるわけでは無いのだろうが、かといって無謀に攻めているわけでもなかつた。

「私は、託します。いいえ、託したいのです。あの青年の持つ、運命さえも捻じ曲げるような搖るがない意志に」

レイスには、お姫様のその感情だけが理解出来ないでいた。

彼は、ウイーネ騎士団団長でありながら、王女の護衛もある。本来であれば、彼は王の近衛なのだが、その直々に任命されてそうなつっていた。

そして、護衛となつて初めて、王女がわざと我仮姫を演じている事實を知つたのだ。

「後から後悔しても、遅いのですよ？」

ただ、それを知つたところで何がどうなるわけでもない。忠誠とは、それこそ揺らいではいけないのだ。

レイスの言葉に、お姫様は本当に暖かく微笑みを深くするのだった。

それは、10歳そいらの少女が出来るようなものではない。国を、幾つもの命を背負う姿だ。

「私には、後悔する権利もありませんから」

一瞬、お姫様は自身の手に視線を落とし、すぐに顔を上げる。

「とはいっても、レイスはレイスである青年と相対して構いません。」

私も、全てに同意できるわけではありませんから。お好きに戦いなさいな」

まだ決勝は始まつたばかりで、どちらが勝つとも分からない状況なのだが、武術に長けているわけでもないお姫様は最後に、あの青年は勝ちますよと確証があるかのように言うのだった。

レイスもレイスで、勝つて貰わねば困りますと返し、そうしてそれきり2人は静かに観戦した。

ただそれは、大剣使いのローブが脱げるまでであったが。

「小僧お前、剣を誰かに師事されていたわけじゃないのか

「生憎、剣を持つたばかりの素人だ」

サイードは、攻めて引いてを繰り返し、相手の出方を伺っていた。しかし、大剣使いには一切の隙も見られず、当てるつもりで剣を繰り出すも、全てが軽くかわされている。

さらには、たった数分でサイードが素人だと見極められてしまう始末。とてつもなく分が悪かった。

「ぐ、あつはつははは！」

大剣使いは、サイードがあつさりとそれを認めたことで、傑作だと言わんばかりに爆笑した。

流石のこれには、サイードも攻撃の手が止まる。好機ではあつたが、そこまで笑うことだらうかと思つた部分があり、そもそも腹を抱えながらも隙を作らない大剣使いに舌を巻いたからだ。

暫く、その笑いが静まることはなかつた。

「天性の才能か、それとも反則技でもあるのか。どちらにしろ、やっぱお前良いわ」

大剣使いは、あまりの潔さと軽さがツボに入つたのであるが、それ以上にそのレベルの高さがまるで努力が無意味だと言つていうようで笑えてきたのである。

ボソリと、こりや負けたほうが良い勉強になりそつだと、意味の分からぬ事を呴いていた。

「よし、決めた。お前俺のロープを脱がせてみる。そしたら負けてやる」

とはいつても、大剣使いの方があくまで格上。本人もサイードも、それは事実として分かつてゐる。

ただ、今の言葉だけは頂けなかつた。

舐められるのは、度が過ぎなければ構わない。上田線でこられるのも、まあ我慢出来る。

しかし、忘れてはならないのが、今のサイードは我慢のし過ぎでこれ以上を受け入れられない状態にあるということだ。

会場に、突風が吹き荒れた。

砂埃が酷く、大剣使いも観客も、審判役の騎士も進行役も、全員が思わず目を瞑つて髪や服を抑える。

そして、収まつたところで何が起つたのだと辺りを見渡すのだが、何故だろう。少しの差はあれど、皆が次には大剣使いに視線を釘付けにされた。

「で？」

「おいおいおいおい。前言撤回じゃあ駄目か？」

これには、さすがの大剣使いも啞然である。

サイードは笑っているように思えたが、確実に冷笑している。そしてその手には、今の今まで大剣使いが纏っていたはずの薄汚れたロープが握られていて、剣が明らかに風で纏われていた。

「大丈夫。俺、何も聞こえてなかつたから」

感情に呼応して、剣の風が強くなる。先ほどの爆風は、溜めに溜めていた男装魔術師の魔法だったのだろう。

突風で誤魔化しつつ、上手く操つてロープを剥ぎ取る。魔力は低くとも、そこは流石日本人だつたということか。種族的な器用さも相まって、繊細なコントロールのセンスを持ち合わせているのか。

ただ、それだけでは、今の会場の静寂は作り出せ無いだろう。原因は恐らく、大剣使いの方にある。

褐色の肌に「ゴールドの髪と瞳。鍛え抜かれた肉体に無駄は無く、男らしい格好よさのある者だつた。

「あーあー、せっかく最後のお楽しみにしようと思つてたのに。でもま、やつぱ勝ちはお前に譲るわ」

「それはありがたいが、今すぐじゃないだろ?」

大剣使いはガシガシと頭を搔き鳶り、ニカリと満面の笑みを浮かべる。そこには、純粹に樂しみたいという感情が浮き彫りになつていた。

そして、サイードの言葉に当たり前と返し、とうとう背中の大剣を触つた。

「せつかくだ、俺が剣の何たるかを少しだけ教えてやる」

周りを無視し、2人の戦闘狂が狩りの時間だと囁いた。
しかし、それは空氣の読めない外野によつて邪魔をされる。

「リュケイム団長!..」

「元を付ける、馬鹿! んでもつて、邪魔すんじゃねーよ」

どうやら大剣使いは、そこのお調子者というか明るい性格なのだろう。外野の叫びにご丁寧につっこみを入れる。

さらに、その1人の邪魔者を皮切りに、一気に観客は騒然とした。

「な、なんと! 謎の大剣使いは、『俺、旅に出るわ』という言葉と共に突然消えた、前ウイーネ騎士団団長、リュケイム様だつたああああ! ? なんということでしょう、予想外、あまりに予想外

です

進行役でさえも、我を忘れて馬鹿みたいに叫ぶ。

ただ1人、この世界の内情の触りしか知らないサイードだけが、取り残されたようにポツンと内の高まつた神経をどうしたらいいのだと憤り、そして、またお前かと大剣使いに叫んだレイスを睨み付けている。

「貴方は何をやっているのですか！」

「いいから黙れって！ 今俺、忙しい！」

「忙しいじゃあいません！」

なんだこの茶番、と思うのはサイードだけであろう。それだけ、大剣使いの正体は驚くべきものだつた。

騎士団、それもウイーネ騎士団というのは国にとってとてもなく重要な存在であり、尚且つそのトップともなればそう簡単に投げ出せるようなものではない。

進行役の言葉が真実で、それをまるで塵を捨てるかのように簡単に投げたとなれば、このような反応をされても仕方が無いのだ。消えたのであれば尚更である。

「あ～、悪い。収集つかなくなりそうだ」

「……興醒めするにも程がある

さすがのこれには、大剣使い リュケイムもお手上げであった。サイードも、言葉と共に剣に纏わせていた風を一度治めて、どうしようないと舌打ち。そもそも、限界突破したストレスゲージが

その腹に穴を開けてしまつかもしれない。

「だなあ。俺、リタイアするから、小僧何とか周りを黙らせられな
いか?」

対戦相手にこんなことまでお願いされてしまつただから、本当に
身体に支障をきたしてしまいそうだ。
てめえでやれよ、と視線で訴えても、リュケイムは無理無理と首
を振るのであつた。

そして、深い溜息を吐いて諦めたのだらう。サイードは、溜めて
いた全ての力を使い、剣を振つたのである。
当然、誰も被害に合わないようだ。

すると、豪風と共に観客が戦闘に巻き込まれないよう造られ
ている壁に大穴が開く。

「うん、やっぱお前良いわ」

確かに黙らせることは出来たが少し、いやかなり大げさだらう。
本人の表情がすこしきりした感じを出しているので、これはこ
れで良かつたのだろうが。

「てことで、俺リタイアするわ」

出会つたときよつかなり口調が変わつてゐるリュケイム。じつや
うひらも、少なからず道化の氣質を持つていて、ビートなくサイ
ードと似た性質があるのであつ。

ともかく、波乱ばかりのウイーネ杯。

今回の優勝者は、サイードに決まった。

自分の為

はつきり言えば、決勝戦はかなりの戸惑いを生んだ。

サイードの力量は、優勝候補になるぐらいレベルが高かつたのは確かだが、だからといって栄えある決勝がまさかの相手側のリタイアで決まろうとは、誰が予想しただろ？

観客の心情としては、概ね二つに分かれた。

このまま我らが騎士団長様と戦つてもらおう、というものと、再試合で全力を出し合つべきだ、というものに。

ただ、後者は、元々こつなつた原因の一端である観客なのだから、利己的にもほどがある。

勿論、大会側がそう決定したのであれば、サイードもリュケイムも従わざるをえないが、2人ともその気は当に失せていた。

そして、異例ながらこの決勝戦に協議が為されることとなり、サイードは与えられた控え室で時間を持て余すことになってしまふ。部屋の中央、またもや床に寝そべって呼ばれるのを待っているのだが、その目は天井を眺めながらも真剣に何かを考えているようだ。

「あそこまで、対魔術師に効果があるのはびっくりだな」

どうやら、身になつた試合、今は昨日の男装魔術師とのものを冷静に分析しているのだろう。

眼球がまるで、その時と同じ動きをするかのよう忙しなく動き、誰かが見ていたら気持ち悪いと思つてしまいそうだ。

「ただ、溜めるつてなればかなり体力持つてかれるし。正直疲れた……」

本人が言う通り、その顔色は若干青い。

まだ戦いが控えている、しかも下手したら決勝が仕切りなおしになりかねないので、瞳を休めるように腕をそこに当てて溜息を吐く。

気乗りしないのだろうか。いや、どちらかといふといつも以上に面倒くさそうだ。

出会った時はあれ程戦つてみたいと思つていたはずだが、今はレイスとの関わり全てを避けたがつていて思えた。

恐らく、元々が持つ危険やハプニングの察知能力の高さが、そうさせているのだろう。

バレないよう、と神経を使つていたこの3日間だ。そうするには、相手を観察しなければいけない。

その過程でサイードは、レイスとお姫様が自分に視線を向けているのに気付いており、その中に何かが込められているのも分かつていた。

それでも装つていたのについては、ただの意固地だろう。

「あー、今回は色々しくつたかもしねない」

ぼそっと呟かれた言葉には、疲労の色が濃い。素が出つつも反省するだけで、暫くすれば落ち着いた呼吸音が部屋に響いた。

「……魔法剣士」

しかし、寝ていたわけではなかつたのか、十数分後に突然言葉を発する。

「魔法剣士、サイード」

もう一度謎の言葉を発し、クツクツと笑い出し、次第に身体を横向きに変えくの字に折り曲げて爆笑した。
その様子から、十分元氣で疲れも軽かつたのかもしないと思つのだが、不気味すぎる点から、余計に疲れているのかもと思つ。きつと、疲れていたんだねつ。
これで、今後魔法剣士サイードだと名乗り始めたたりでもしたら、きっと世界は崩壊してしまつ。

早く試合を始めてやれと願わざにはいられない。

リュケイムは、自分の控え室で問答無用に追求されていた。

「貴方は一体、何がしたいのですか！」

「だからー、旅がしたかったって言つたじゃん

「ええ、言いましたね！ ですが、了承した覚えはありませんし、あの後私がどれだけ大変だつたか！ やれ、副団長の監視不行き届きですよ、だ。やれ、君が追い出したのではないかだとか。追い出すならもつと頭を使うだろ？ よー！」

「おーおー、キャラが崩壊してるぞ。レイス団長」

五月蠅いと吠えるレイスに、リュケイムはやれやれだと肩を竦めた。

レイスは我を忘れているのか、リュケイムの胸倉を掴んでおり、いつもの柔軟な雰囲気は微塵も無く鬼気迫る迫力である。

今の光景を見たら、さすがのサイードでも一步引いただろ？。相当、リュケイムには溜まつたものがあつたということか。

「団長、一先ず冷静に」

そんな般若と化したレイスを、怖氣づくことなく宥める者がいた。淡々と細々と、気配すらなさそうな弱音である。

「聞きたい事があるからと、私もテモンストレーションが控えているところに、共に来たのですよ」

「……分かつている」

その者の言葉に、レイスはリュケイムから離れ、咳払いをひとつしてバツが悪そうに誤魔化した。

残念ながら、部下に怒られてやんのと空氣を読まない馬鹿が一人、遠慮無しに笑つてるのでその口元はひくひくと震えていたが。

「リュケイム様も、少しは団長の気持ちを汲んでやつて下さい。ただでさえ、気苦労が絶えず私が大変なんですか？」

「そーせんしたあー」

リュケイムという男は、本当に30代の良い大人なのだろうか。先ほどの言葉から、もう1人は副団長らしい。決戦後は、優勝者は団長と準優勝者は副団長と剣を合わせるのが習わしなのだ。

レイスと同年代な感じで青髪の、インテリが形を持つて生まれたような副団長は、眉間に指を当てて小さく溜息を吐いた。眼鏡をかけていないのが残念だ。

「おふざけはそろそろやめましょうよ」

でないと私は、これから準備をさせてもらいますよ。そう言つかのように、副団長はリュケイムに冷めた視線を向けてレイスへも一瞥をくれる。

それに、誰もリュケイムをただの馬鹿だとは思っていない。

例え、旅に出たいからという理由で騎士団長という地位を捨てるような男であっても、元騎士なのは変わらない。

そして、理由も無く馬鹿な真似をするような馬鹿ではないと、彼等は知っているのだ。

「何故、戻ってきたんですか。しかも、突然こんな形で」

「色々ときな臭い事が耳に入ってきたもんでな」

副団長は、レイスが本来のペースを取り戻したことで傍観を決め

た。

扉の前に立ち、部屋に誰かが立ち入らないかどうか気配を探りながら、視線はリュケイムに縫い付けられる。

まるで、一挙一動見逃すまいと、彼を見定めるかのように。

「……きな臭い？」

リュケイムは元々、情報収集能力に長けた男だった。

騎士でありながらその情報網は裏の世界にまで及び、レイスにとっては剣の腕よりもそちらの方が何倍も恐ろしい。

恐ろしい、ということは、レイス自身に何かしら秘密があるといふことだらうか。

向かい合つ形で腰を下ろした2人は、おふざけの空氣の一切をかき消した。

レイスは真剣な表情に、リュケイムはまるで試すように若干の違いはあれど、そこは守ることを中心とした職を誇りとしている、していた者達だ。

「陽の国が一度落ちたのは当然知っているな？」

「子供でも知っていることですからね」

まさか他国の話が出るとは思つていなかつたレイスだが、それが何年も付き合つてきた元団長のやり方だと分かつていて。

浅いところから、確信へ。道化とはこの人のことだ、とレイスはまだ部下だった頃に同僚に対し何度も愚痴を零してしたりする。

「だが、それ以外を誰も知らない。これはおかしいだろ？」

その国の人間までもが。そう言ひてリュケイムは、眉間に皺を寄せ真っ直ぐにレイスを見つめる。

「ただ単に、情報を隠しているだけでしょう」

「それ以外に何があるんだよ。問題は、何故隠す必要があるのかだ」

レイスは今の言葉を吟味する為、一度リュケイムから視線を外す。ただ、だからどうしたのだという気持ちもあった。

所詮、他国との問題である。自分たちは武器ではあるが、軍師にはなれない。
騎士団長といえど、まとめ役にはなるが所詮それだけだ。

そんな考へが顔にでたのか、リュケイムは深い溜息で呆れた。

「あのなあ、不穏なんだよ。陽の国に限つたことじやねえ。むしろ俺は、陽の国が何かしら被害を受けた側だと考へてる。それも、早々公にできないような大事だ」

「しかし、あの国は反乱が起こり、王が変わったばかりです。復興するだけでも厳しい状況なんですから、当然では」

「だあ！　お前じや駄目だ、話にならん」

しかし、あまりのレイスの鈍さにリュケイムが匙を投げた。
頭を搔き鳴りながら、だからお前は剣馬鹿つて笑われるんだよと言つてゐる。

貴方には言われたく無い、と反抗するレイスだが、少なくともリュケイムは同じではないだらう。使う、ということを知つてゐると

見受けられる。

「だから」おかしい、ですよね」

そこで、黙つて話を聴いていた副団長がやれやれと口を挟んだ。何を言つているんだお前は、とレイスは見やるのだが、リュケイムの方はお前のが話易そつだと彼を座らそつと田で訴えた。

残念ながら、嫌ですと一刀両断されたのだが、副団長は続ける。

「どう考へても、現在の陽の国は国庫も無い状態ですから、復興さえも難しい。それは、私たち騎士ですら分かる事。なのに、反乱で何が起こったのか、どうやって前王を討ち取つたのか。その一切が流れでこないと、リュケイム様は言つているのですよ?」

「いや、だから、それを隠しているんだろ」

2つの深い溜息が重なつた。
取り残されたレイスだったが、何かを言つ前に小さな咳払い封じられてしまう。

「貴方は、盜賊を討ち取つてその功績を隠しますか?」

だが、副団長の言葉にやつと今までの会話の意味を知つた。

「……確かに」

いや、確かにじやないだる。と思つてしまつては負けだらうか。鈍いにも程がある。

ただ、リュケイムが言いたいことはそこでは無い。それだけでは、

国の中核が知つていればいいことだ。

続きを、と促され、彼は頷いた。

「陽の国が一番分かりやすいから出したんだが、まあそれでだ。どこもかしこも、変な動きが目立ちすぎてるんだよ、最近」

ちらりとレイスを見て、リュケイムは次々と自身が持つ情報を明かしていく。

それは、インターネット等無いこの世界で考えればかなり広く多い情報で、リュケイムの能力の高さに驚かされた。

レイスと副団長は、今更ながら何故彼は国を捨てたのだろうかと疑問を抱く。それすら分かつているかのように、リュケイムは自らの力を見せ付けるのだった。

「でだ。俺が戻つて来たのは、それを陛下に伝えて警戒して頂く為だ」

「……は？」

そうして、唐突にリュケイムは言った。

当然ながら2人は驚くのだが、彼は氣にも留めない。

「そして、お前たちにも警戒してもらつ。……最近、光風の便り亭という場所で身元不明の女が一人、保護されたらしいな」

「ここからが重要だ、と言わんばかりにその声が低くなつた。

副団長は、そういうやそんな報告があつたようなと浅い反応であつたが、逆にレイスは眉間の皺を深くし大きな反応を見せていた。

「男に襲われショックで記憶を無くしたらしいが？」

「どうしてそれを」

何故か、レイスのリュケイムに対する警戒が濃いものになる。それを面白そうに笑いながら眺めるリュケイムだが、目が笑っていない。

「俺は、国に仕えるよりも陛下に忠誠を誓いたくてな。だから、その椅子をお前に譲った」

「捨てた、の間違いでしょ」

どっちも変わらないだろ、とリュケイムは言つが、レイスはまるで親の仇にでも会つたかのように、激しく彼を睨み付けた。

先ほどまでの空気が嘘のようだ。

何がそこまでレイスの癪に障つたのだ？ 彼は奥歯を噛み、無意識に腰の剣を掴んで軽く腰を浮かす。

おやおや、とリュケイムは笑い、副団長は冷静に傍観するだけだ。

「その女、逃がしたそうだな」

「え、そうなのですか？」

ただ、それを聞いた副団長は思わず問いかけた。

そうすると、レイスの怒りが自分に向きかけるのだが、リュケイムが無視して先へと進むので難を逃れる。

レイスもレイスで、部下に世話を掛けてしまつタイプといふことが。

「まつたく、俺でも予想できない何かが起こりそうな不穏な空気が漂っている。時に、明らかに怪しい奴を野放しにした挙句、まんまと逃げられちまつとは。ウイーネ騎士団が聞いて呆れる。だから俺は、ウイーネ杯に託けて、お前等の緩んだ神経を鍛え直してやうと思つたんだよ」

「何故貴方に、そんなことをされなきゃいけないんですか？」

ギリツと睨み付けるレイス。しかし、無意味な反抗はリュケイムには通用しないだろ？

眞面目ながらも笑っていた口元が急に下がったかと思うと、彼は座つたままの体勢で片足を上げ、レイスが反応するよりも早く抜こうとした手を剣^{ブレッシャー}と踏んで止めた。

「言つただろ？ 俺は、陛下に忠誠誓つてんだ。つまりは私兵。正規のお前等がそんなに腑抜けてたら、誰が俺の主人を護るんだ？ 騎士が主君の憂いになるなど、俺は許さねえ！」

その威圧感^{ブレッシャー}は、恐らくレイスでも出せないだろ？

そもそも、己の誇りの象徴である剣を足蹴にされてくる時点での実力差はみえている。

副団長も、威圧感に押されて背中に冷たい汗が流れていった。

「後、サイードとかいうあの小僧。公表前に出されていた出場者名簿の中にはいなかつたぞ？ 当然、参加申し込み書も無かつた。どうぞびつやつして、すり変えられたんだろうなあ」

反論も言い訳も許される雰囲気では無い。
そこには、洗練された道化の姿があった。

サイードと戦っていた時は、あれ程楽しそうに見えていたといつたのに、こうなればそれすら装っていたのだろう。

馬鹿な真似をするような、という言葉は撤回するしかない。リュケイムはきっと、忠誠を尽くす為になら馬鹿にならざるせむだ。

「2度と、こんなへマして俺の手間をかけるんじゃねえ。あの小僧も絶対に逃がすな。見えない不穏なにかに付け入る隙を見せれば、陛下に危険が及びかねない」

「……肝に、命じておきます」

レイスがやつとのことやつ脳つむ、リュケイムの足は彼を解放した。

そして、副団長に対しても前もだと言い付け、これ以上は話すことはないと口を閉じたのである。

2人は、威圧感から解放されたことに安堵の溜息を吐き、そして己の失敗に反省を見せた。

今後彼等はリュケイムに頭が上がらないだろう。

ただ、それでは失礼しますと2人が退室しようと扉に手をかけて頭を下げる時だった。

「俺を欺けると思つたよ? レイス・アレフィヤー・アランドル」

今までで一番低い声がレイスに降り注ぎ、しかしこの時だけはレイスは何も返さず、一礼して颯爽と立ち去つていったのである。

「ありやあ、どうしようもないな。あの小僧の方が、大分マシな顔

してゐるだろつよ

閉じた扉を見つめ、椅子の背に肘を立てながら呟かれた言葉の真意はいつたい。

その後直ぐ、協議の結果とデモンストレーション開始を告げに騎士が入室し、リュケイムは何事も無かつたかのように出て行くのが、はたしてサイードは、自分が疲れすぎて壊れかけている間にこのようなやり取りが為され、何より身近にリュケイムという何倍も経験を積んでいる道化師が居る事に気付いていのだろうか。

騒すのは誇り

舞台を用意しよう。

それは、誰の言葉なのだろうか。

波乱、波乱のウイーネ杯で、歴史はあるが所詮お遊戯の枠から抜けない大会で、世界を揺るがすような運命がいくつも交わり定められた。

しかし、それを知るのは覚悟を決めた本人達のみで、全てを把握している者は誰もない。

望む者ですら、舞台を用意するだけしかできない。そうして、意志を持つ人形を躍らせる。

それをさせるにも、踊るには音楽が必要で、奏でるには楽器が必要だ。さらに、楽器があつても奏者がいなければただの物。

まずは、産声を。

誰かが楽しそうに笑う。楽しみで仕方が無いとはしゃぐ。用意だけが、誰も気付かないままに着々と進められた。

ひとつの大戦のメインイベントであり、クライマックスでもある戦い 자체が壮大な何かのファンファーレになるのかもしれない。

「さて、とうとう始まります！ 優勝者への特典であり、我らが自慢でもあるウイーネ騎士団団長、レイス・アレフィセー・アランドル様との『トモンストレーション』。両者美丈夫で女性は大興奮なことでしょ？！ 是非とも、剣技でも我々を魅了してほしいのです。サイード選手は、果たしてどこまでレイス様に食いついていけるのか？ 片時も目を離せません！」

協議の結果、決勝戦が再度行われることはなかつた。
陰では、リュケイムが何か手を回したとも囁かれるが、その真偽は分からぬ。

太陽は當に頂点を過ぎ、リュケイムと副団長との試合も終わつた。
語らずとも、その勝敗は分かることだらう。

そして今、因縁の対決というほど縁があるわけではないが、お互いがあ互いに何かを抱えている2人が、会場の中央で剣を抜き対峙していた。

「正々堂々と団長を殺れるなんて、こんな良い機会は2度と無いだらうつな」

「いやいや、殺すのはルール違反だよ」

どうやらサイードは、疲労から回復したようだ。
不敵にレイスを睨み付け、舌なめずりをしていた。

そしてレイスも、余裕を取り戻したのか冷静にサイードを見つめていた。

その周囲には、半径3メートル程の円が白い線で地面に引かれていて、サイードはそれが気に食わないと言いたげに一瞥した。

本来、優勝者は手合わせを願つといつ形で試合を行つ。言わばこれは、優勝者の為とこりよりも、他国に自国の戦力を見せ付ける為のものだ。

そして、試合そのものも、結局はスカウト目的があるので、これだけの手練れが自國にてつてこりといつ牽制にもなる。

そもそも、騎士団団長たる者、そう簡単に負けることはないのだ。だからこり、ハンデとしてレイスはその円の中だけしか動けないのがルールである。

これは、サイードにとってもとても面倒くさいルールであった。

その円から出られないところとは、自分が打ち込まれない限り接近できないところとなのだから。

どうするか、と考えている間に、大袈裟な開始の笛が吹かれた。盛大な歓声と共に、試合が始まる。

「遠慮無く来ればいいぞ」

二口りと舐めてかかつてくるレイスだが、彼もサイードの力量の一端を森で垣間見てている。

決して、油断をしているわけではない。

「その円、邪魔なんだが」

「ルールだから、仕方無いわ。私にまじりこも出来なによ。……君が消してくれれば、問題無いがね」

その言葉に、サイードが四方に立つ騎士に視線をやった。

「じゃあ、消すまでお互い手は出さないってことで良いな?」

「君の言葉を信用して、一度痛い目見ているからな。約束はしない」

レイスの瞳に、一瞬だが黒い光が掠める。

恐らく、森で迷いかけたことを言っているのだ。

ねちっこい男は嫌われるぞ、とサイードは返しながら、もう一度視線は白い線へ。じつやう、それは石灰か何かで書かれているだけのようだ。

それなら、とサイードは走った。

レイスが警戒を強めてその動きを追い、剣を握る力が増す。

サイードはそれを無視して、剣で線を一閃。そして、ほとんど空になっていた男装魔術師の魔法に自身の魔力を僅かに上乗せして、小さな風の刃を作り出した。

それには殺傷能力はほとんど無く、線を刻むといつよりも周囲の砂を小さく抉つて上から隠している。

自身も線の上に足を滑らせ踏み消して、田はすぐには消えた。

この奇行に驚いたのは、観客である。

始めは、サイードが強気で攻めていったのだと勘違いしてお、と唸つたのだが、まさかこのようなことをするとほ。

ざわりざわり、と周囲が騒ぐ中、一度開始位置に戻ったサイードは、剣を肩に乗せてニヤリと笑った。

そして、レイスではなく軽く首を上げて周囲に大声を張り上げる。

「我らが団長の全力、是非見てみたくは無いか！？」

空いている手をわざとらしく広げてアピールをし、サイードは態々レイスも戦えるように仕向けていくのであった。

「観客は田で、俺はこの身で！ もし俺が勝つたら、それはそれで一興だらうー？」

言葉そのものは、立場も何もあったものではない。当然、騎士達は馬鹿にされたのかと眉を顰めるのだが、平民の観客達は大いに沸いた。

次第に、やれやれ、と合唱しだし、進行役が咎めるも収集が付かない状況にまで発展する。そこでやっと、サイードはレイスへと視線を戻して一言。

「これなら問題ないな？」

そう言って笑った。

「民の期待に応えるのも、我々の役目だからね。これなら、仕方が無い」

レイスも、消された後がはっきりと残る線に田をやり、まるで不本意だと呟つような態度を取りながら歩く。

サイードも合わせて一步を踏み出し、謹ぎは合唱から再び歓声へと切り替わった。

レイスは、型にのつとつた構えで歩きながら線の跡を踏む。

サイードは、肩に乗せていた剣を体の横にエッジを下に向けて構えて片手で振るう、いつものスタイルにもつていく。

2人の足並みは次第に早まり、そして。

「君を私は認めない！」

「はっ！　てめえに認められたって嬉しくないなあ！」

美しい金属音と共に、お互いの誇りが交差した。

ギリギリと僅かに押し合い2人ともが飛び退くように離れるのが、表情の違いが大きい。サイードは楽しそうに笑い、レイスは怒気を含んだ厳しい顔だ。

一方が一步動けば相手も動き、2人は其々で隙を窺う。

その様子を、気付けば会場の誰もが固唾を呑んで見守っていた。

ただ、その中でサイードに期待を寄せる人間はいないだろう。皆、考えるとしたら精々が、あの小僧は我らがレイス様を相手にどこまで粘れるのか。

サイードも、実はそうであった。精靈や陽の精靈王の力を全力で使えば、少なからず自信は持てる。

しかし、剣術のみだけではセンスは勿論のこと、経験が重要だということが分からぬ程馬鹿では無いし、自惚れてもいい。

「ま、存分に俺の礎になってくれってね」

ふわりと、その足を柔らかな風が包む。今までに何度も使つている、瞬発力を上げてくれる風の魔法だ。

僅かに身体を落とし、サイードは一気に間合いを詰めた。

当然、レイスは素早く反応して下半身に力を込める。

金属音はまだしない。

サイードは、素早くレイスの目の前にまでいたのだが、そこでは剣を振らずに跳躍し背中に回ったのだ。

そして、躊躇無く胴体を分断するつもりで一閃する。

観客が悲鳴を上げる暇も無い動きだった。

「……甘い！」

しかし、そう簡単にいくなら、レイスは団長の座にはいないだろう。

う。

響く金属音。

彼は後ろを振り返ることなく、両手で前に構えていたはずの剣を逆手に持ち替えて攻撃を防いでいた。

そして、すぐさま構えを直して身体を動かし、攻撃後に出来る隙を狙い反撃を繰り出す。

サイードが剣を片手持ちするのは、剣そのものが軽いから為せる技もあるが、それ以上にその俊敏性にあつた。

上からのレイスの攻撃は、お得意のバック転で避ける。

地面に手をついて中腰となつた体勢を立て直すことなく足に力をいれ、そこから再び接近。

それも簡単に防がれてしまつたが、お互に攻撃と反撃を繰り返す形でそのまま剣の打ち合いとなり、まるで曲を奏でているかのように会場に美しい音が響いた。

観客の誰もが、男ですら、両者の剣技と姿に見惚れた。

暫くは、打ち込めば払われ、払えば打ち込むという動きが続き、その途中で何度も押し合いをし、その度に2人は瞳で会話をしていたのだろう。

サイードはいつそう笑みを深くし、レイスは怒氣を濃くする。

「姫様は、契約されている精霊と、とても親密な関係なのだ」

しかし、それは突然であつた。何度もかの剣の交差の際、レイスは囁くように声を発したのだ。

その瞬間、サイードは不吉な予感を抱き、それこそ飛び退いた。

僅かに開いた距離。永遠に続くかと思われた攻防は一端中止となつたのか、2人は僅かに息を荒げながら対峙に戻る。

サイードの顔から、笑みが消えた。

「その精霊が、とても興味深い事を教えてくれたそうだよ

止まつていた思考が、フル稼動する。

恐らく、王族であるお姫様の契約精霊は風を司るシルフだろう。シルフは臆病で用心深いが、一度信頼を得られれば強い絆を結ぶ事

が出来る。

しかし、ルシエの存在は精霊にとつて例外で絶対であり、何を不安に思うことがあるのだろう。

万が一、仮にだ。あのお姫様がルシエ同様、精霊と意思疎通を図れたとして、そして存在を明かしたとしても、少なくとも彼女が障害になることは無いのだ。

この仮定 자체、かなり確立の低い事ではある。

ただ、ルシエは自分だけという驕りは抱かない。自分だけは特別だ、という感情を許さない者だった。

だからこそ、その懸念を抱くことが出来るのだが、戦いの中ではあつたが視線を来賓席に移せば、そのお姫様は明らかに頷いたのである。

それは、確実に意味を持ち、訴える仕草だった。

「君は、精石を壊す為にこの国に来たのだろう？」

めずらしく、サイードの目が大きく開かれて驚きを露にした。
お姫様にだつたのか、レイスの言葉にだつたのかは分からぬ。
しかも、何かを言う前に、まずは身体を動かすことに集中しなければならなかつた。

勝敗を競うというのに、相手の意識が移つたのが分かりながら、黙つて待つしてくれる者はいない。

そもそも、レイスはそれを見逃す未熟者でもない。

「余所見は禁物だろ？？」

頭上からの素早い一撃が、サイードを襲う。

「ねぎとだよつー。」

サイードは慌てて剣を翳し、押されえて腰が落ちかけながらも手をブレードに添えて踏ん張り、大きな舌打ちと共にレイスの足を素早く払った。

「なつー!?」

「くわい

咄嗟の行動は見事、レイスは体勢を崩しサイードへの注意を削がれる。

しかし、不安定な体勢で防ぎ、そのまま攻撃に転じた為に耐える力が弱まつたせいで、サイードの剣は宙を舞つ。

「のままではまずい、と腕を支えにレイスの腕を蹴る。

カラソンド、2本の誇りが地を叩く音が重なつた。

そして距離を取つたサイードは、やつと、お姫様に対して余計な事をと毒付くことができた。

焦るなど自身を律しながらも、その表情は険しい。

考え方通り、精霊がお姫様に教えたとしてもそれは障害にならないであろう。ただ、どうしても、お姫様が信用した相手がルシエにとつてもそうなるとはならない。

だから、ルシエは仲間を欲する事が無いのだ。

どうするべきか必死に考えるも、答えは一つしか無い。それも、早急に対処せねばならず、しかし今ここではするのは厳しいという最

悪の展開だった。

「焦つているようだね」

「……てめえ」

レイスは笑っていた。それも、してやつたり顔である。今度はサイードが怒氣を含むこととなつた。

その感情のまま、レイスの懷へと入り拳を繰り出す。それはあつさりと避けられ、彼から一撃を貰つてしまつが、それでもサイードは怯まず蹴りを脇腹に入れダメージを返した。

体術に関して、ルシエはまったくの素人ではなかつた。地球でのトラブルが増えつた折、その対処法を会得する為に幾つか身に付けていたりするのだ。

ただ、与えられるダメージの値は両者に大きく差があつた。

サイードは、思わず自分が女であることに憤りを感じてしまう。普段であれば、ふとした拍子に忘れてしまつ事実であるが、肉弾戦の際にそれが如実に表れるからだ。

いくら戦術で補おうとも、体力や力の差はどうせいつつも男を越えられない。

一刻も早く、剣を取り戻さなければならなかつた。

目的を知られていてる時点で、これは試合の枠を外れている。

レイスは国を護る騎士だ。そしてサイードは、国を壊す敵である。そんな両者が剣を手に相対していたら、そこにるのは生と死。

「俺を公衆の面前で殺すのが目的か」

もし、レイスが騎士では無く、その秘密を明かしたのがお姫様じゃなければ、サイードははぐらかす選択を取つたかもしれない。しかし、忠誠を誓い誓われる関係の者に知られた時点で、それは通用しないだろう。

半ば自棄になりながら、サイードは問ひつた。

「……聞きたいことがある」

といふが、ここに予想外の事が起つた。

騎士であるレイスが、あることか答へをはぐらかしたのだ。

流石のこれには、サイードがあからさまに訝しむ。口元を垂れてくる血を拭いながらレイスを見ても、彼は動く気配がなかつた。

お姫様の精靈や彼女自身、そしてレイスも何がしたいのか。自分に何かを抱いているというのはサイードも感じていたが、初めてその内容に疑問を抱いた。

立ち塞がるつもりか、利用したいのか。まさか、協力したいとか、仲間になるつもりがあるわけではあるまい。

自分の目的に關することしか気にせず、周囲に気を配らない不注意が起こした結果が今の状況ではあるが、何にしろどれをとつても全てが迷惑である。

レイスは一瞬顔を伏せ、次にサイードを見た時、彼は意を決した表情をしていた。

「君は何の為に剣を持ち、そして何の為にそれを振るつ?」

「どうこう意味だ」

「良いから、答えろ」

しかし、口を出たのはほつたく脈絡の無い質問。サイードは困惑する。

何がしたいんだと目で訴えるも、レイスは答えるまで動かないと思えた。

流石にそんな状態の彼を攻撃してしまえば、観客からは大ブーリングをくらつてしまふだろう。

それに、今更ではあるが、彼等の真意を探らなければならない。

仕方なく、サイードは質問に答える為に考えた。ただ、先ほどの質問は考えた事も無いもので、眉間に深く皺が寄っている。

「何の為に?」

サイードにとつて、剣とは殺すのに必要で、殺すのは邪魔だからである。

しかしそれは、レイスの知りたい答えではないだろう。

何故なら、武器の役割や殺す理由にはなれど、サイード自身が持ち、使う理由にはならないからだ。

だから、せらに深く考えていく。

邪魔なのは、進まなければならぬ道を塞ぐからだ。では、それは何故か。

せうやつて、一つ一つを掘り下げていき、とつとつ辿り着いた答えはシンプルで、とてもらしいものであった。

「……そうだな。強いて言うなら、俺自身の為だ」

「なんと愚かなつ！」

サイードにとつてその答えが全てである。ただそれは、レイスにとって到底理解し難い答えだった。

一瞬にしてレイスの表情は嫌悪に変化し、まるで田を覚まさせようとするようにサイードに拳を繰り出す。
それを避けつつも、サイードは思った。

「こんなものに、正解な答えなどあるのだらうかと。

そもそも、何故人間は、物事に対して逐一意味を求める、想いに理由を求めるのか。

分からぬ、とサイードは呟く。その先にある価値が分からない、
と。

「人は、自分以外の誰かを護る時にこそ、人知を超える力を發揮する。なのに君は、力がありながら己だけの為に振るうのか！？」

「在り来たりな名言をどつも。しかし、それは絶対か？」

今や戦いは、唯の殴り合いとなつていた。しかも、正反対の思想まで引き合いにされてだ。

答えを求める」と自体、サイードには無意味なことである。

何故なら、正しい答えが存在する数学にさえ、そこに辿り着くまでの計算式にはいくつかのパターンがある。それも、複雑になればなるほどだ。

そこでは、一番シンプルで簡単にまとまらず、無駄に幾つもの公式を用いて遠回りしてしまったとしても、同じ数字に辿り着く。それも模範解答にはならずとも当然正しい答えであり、正解を導いてくれる過程だ。

考え方、思想もそれと同様、同じものでも掘り下げていくと違つていたりする。

そこにははたして、間違いがあるんだろうか。そもそも、こういったものに正解や間違い 자체がないのでは。

基準として、常識と非常識があり、それで分けられるだけではないのだろうか。

「君は、人を切る際に何を思つていた？」

レイスは、サイードの問いに答えなかつた。まるで、都合の悪い言葉は聞こえていない様だ。

そのくせ、自身を価値観はさも正論のよつて闘してサイードを諭そうとする。

両者、既に肩で息をしていた。

サイードに至つては受けたダメージが大きく、若干足元が覚束ない。片目は殴られて腫れてきており、全身に痣が出来ている。

レイスは、そこそこ負傷はしているがサイード程ではなかつた。もし彼が、サイードが本当は女性だと知れば、一体どういった反応をするのか。平氣で殴つている様子から、是非とも知らないと思いたいものだ。

でなければ、些か風の國の騎士の有り様に疑問を抱いてしまつ。

「何も。別段何も考えていないが？俺にとつて殺すことは、食事や睡眠と然して変わらない。だが、それが何だと言つんだ」

「駄目に決まつているだう！お前の正義は、一体どこにある？」

頬に一発大きく攻撃をくらひ、サイードは地面に倒れ身体を滑らせた。

予選であれば負けと判断される程のものであるが、最早2人には周囲の声など聞こえておらず、誰も止められない。

そもそも、誰も止めようとしなかつた。

「ここまで騎士団長に対し食らい付き、しつかりと試合が出来る者は滅多に居ないのだ。

サイードは赤い唾を血に吐き、新たに流れた口元の血を乱暴に拭い、痛む身体を無視して起き上がる。

そして、膝に手を付いてレイスを見やつた。

彼は何を言いたいのだ。自分に何を求め、どうしたいと。そう思いながら、叫ばれた言葉を脳に届ける。

ルシエだつて当然、その手を初めて赤に染めた時には、何かしらを抱いたはずだろう。心はある。

ただ、そこで抱いた何かを考えた末、そうした自分が出来上がった。それだけである。

ゆづくつと膝についた手を離し身体を完全に起こせば、頬に鋭い

痛みが襲い、小さく呻き声をあげながら顔全体を覆うよつて手で押された。

指の隙間から見えるレイスは、一体どう映ったのだらう。

「……正義？」

サイードはぼつりと呟いた。

そのまま、同じく肩で息をするレイスを穴が開くほど見つめる。

何度も何度も正義と咳き、そうする度にだんだんと口元がヒクつぐ。

そうして何度も正義を発した直後だった。明らかに口角が上がり、サイードは両手で顔を覆つた。

「くっ、くははははは！」

まるで泣き笑いにも思える姿だった。顔を上に向け両手で隠し、しかし聞こえる声は愉快で堪らないと言つている。

恐らく、レイスの言う正義とは、人に優しくしたり、困っている人を助けたり、そういう類の人の道理というものだろう。
善意、良心、愛情、慈愛。そういうものを寄せ集め、固めたもの。

それは、彼がどんな人物だと思っていたにしろ、ルシエにだって存在し、過去に行動で示したことだつてある。

一頻り、サイードは盛大に笑つて表情を隠す手をどけた。

その下には、瞳を見開き心底人を馬鹿にする表情があり、両手を広げながら叫ぶよつにレイスに言った。

「なら聞くが、お前の言ひ正義とは、正しい道理とは何だ？ 困っている者を助けるのがそつだといふのなら、悪事を働いてそれを隠そうと必死になつてゐる奴に手を差し伸べるのも、正義になるじゃないか」

それ自体は、言葉の文である。しかし、いつだつて何かを決めるのは人間で、決めたのも人間。

ならば、否定をするのも人間だ。

あれはダメ、これはイイ。
何故、どうして、だから、だとしたら。

そうやつて意味を求め、区別したがる生物は人間以外にいない。
それが知能が高いからこそなのか、そうではないのかは誰も知らない。

だからといってどうこうなるわけでは無いが、ルシエに可笑しさを抱かせるのは、それを他人に押し付けようとしていること。

善悪を区別することだった。

しかしそれは、なんとも曖昧であやふやなことだらう。

もし人間が、他と同じように武器も持たず生身だけで食物連鎖の枠にはまつていたとして、そうしたらそこに、人殺しという罪は存在するのか。

弱肉強食の世界で必死に抗い、生きるために同種を見捨てたり、仕方なしに殺したりすることは罪なのか。

答えは、否だ。

でなければ、自然界が成り立たなくなってしまう。
肉食獣が他種を食らうことや、子が生まれた際に親を食らうことがある。
そういうものの全てを、自然の摂理といえなくなる。

人間とは愚かなもので、そういう光景を見た時には残酷だと評するが、結局は仕方が無いと身勝手にのたまう。

そして、自身に影響が及ばない限り、まるでまったく別の立ち位置にいるかのように振舞うのだが、人間の築いていく足場、決めてきたものというのは哀れな程に脆いものだ。

たとえ現実はそうでは無いと言つたとしても、何時どのような形で変化するとも限らない。

「それは違う！ 私達は見極める頭と心を持っている。だからこそ、善悪が存在するのだ！」

「なら、俺は人間では無いと？ だがそれは、何を基準に定められる。心か？ 法か？ それこそ簡単に変化するし、そうすれば悪法も存在しないだろう？」

理解出来ない。お互いが全身でそれを訴える。

ただ、サイードは考えを言葉にしながらも、自分でそれを否定していた。

そう思いながらも、ルシエ自身、地球上に居た時には今と同じように行動していたわけでは無い。

社会では法が定められており、それを犯せば待つのは償いと責任だ。

アピスに来たからこそ、目的があるからこそ、ルシエはその為に人を殺す。

逆を言えば、だからだ。だから、殺すことに罪悪感を抱かず、快樂も抱かない。

ただそれは、心のどこかで自分は救世主だからと驕っている結果なのかも知れない。割り切っているのかも。

それに気付いたとしても、ルシエはそれを省みることはないだろうが。

とにかく、2人の関係はまさしく水と油であつた。
両者が相容れることは難しすぎるだろう。

しかし、2人には決定的な違いがある。

自分の考えが正しいと信じ、諭す風を装いそれを強要するのがレイスだとすれば、正しいとは思わず、誰にも関係無い自分だけの事だと分かっているサイード。

常識での正しいは当然レイスだ。人の築く社会で”生きる”のなら、サイードは悪である。

「だから君は、そのような瞳をしている！ 死を描ぐ色を持つている！」

ただ、それは大きなお世話であつた。

サイードは人間だ。ただし、人であることを捨てた人間。

意志を持っているだけの只の生物で、意志を持つからこそ他の生物を代表して世界を担つたのである。

人にとって不幸だったのは、選ばれたのがそんな考え方の同種だったということだろう。

お互に攻撃もせずに立ち廻っていたが、サイードはこれ以上の押し問答を続ける気はもう無かつた。

素早く視線をレイスから外し、自分の剣を探せば直ぐに見つかる。

剣は指輪に変える事は触れていないとも可能だが、呼び寄せる万能な機能は持っていない。

その手で、その足で掴み取るしか無く、その距離は少し走れば届く場所にある。ただ、それは相手も同じ。

それでサイードは、迷わず駆けた。

「つー

「へー

その動きに素早く反応しレイスも行動を起し、最後の誇りのぶつかり合いとなつた。

高い音と共に、1本の剣が再び宙を舞つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1238y/>

その背に黒の羽根を

2011年12月1日17時50分発行